

〔物語〕 関東大震災からの復興と築地小劇場の興起

―小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子―

- 第一節 新劇の勃興と震災前夜における新劇人 その一
- 第二節 新劇の勃興と震災前夜における新劇人 その二
- 第三節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その一
- 第四節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その二
- 第五節 震災からの復興と築地小劇場への準備
- 第六節 築地小劇場の創業と柿落し『海戦』

〔物語〕 関東大震災からの復興と築地小劇場の興起―小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子―

第一節 新劇の勃興と震災前夜における新劇人 その一

幸福の追求と自由・平等を理念とするヨーロッパの近代文化を摂取して、歌舞伎の伝統に拮抗する新たな演劇、いわゆる新劇は市川左団次と小山内薫による自由劇場結成を契機として勃興した。劇団最初の公演は明治四二（一九〇九）年有楽座でなされ、イプセン晩年の戯曲『ボルクマン』が舞台に供される。「こういう風な芝居は」と小山内薫はあらかじめ宣言した。「開闢^{かいびやく}以来日本で初めて演ずるのであるから、その困難な事は大抵でない。極言すれば、日本の劇壇にまだこういう劇を演ずる技術の方法が、一つも準備してないと言って好い。」「もともとの為事は、若い人間のする為事だ。若い者が新しい芸術を日本に興そうというのだ。」①

イプセン原作『ボルクマン』は鉱山の開発と産業の発展を意図する実業家の物語であって、有楽座での公演は森鷗外邦訳の脚本により小山内薫が演出を采配した。演技は歌舞伎育ちの役者が担当し、男役として元銀行頭取ボルクマンを主役の市川左団次、息子エルハルトを市川猿之助、フォルダルを市川左升がそれぞれ演じ、女役では女形の沢村宗之助がボルクマンの妻グンヒルドに、同じく市川莚若が義妹エルラに扮するほか、女優たる河原

① 小山内薫『『ボルクマン』の試演について』（小山内薫・市川左団次編『自由劇場』自由劇場事務所、

崎紫扇がファンニイ・イルトンを、おなじく市川松蔦がフォルダルの娘リーダーを務めた。①

イブセン作・森鷗外訳『ボルクマン』第四幕

二人は森の木の疎なりたる狭き高き処に達す。背後に峻しい崖あり。左手遙か下の方には入海に接する広やかなる平地を見る。その奥には遠山重複せり。森の木の疎なりたる処には雪高く積りいる。主人ボルクマンは先に立ち、エルラは跡に付きて、右手より苦し気に雪道を辿り来る。

主人 (左手崖の処に立ち留る) さあ、ここへお出で。お前に見せるものがある。

エルラ (傍に寄る) 何を見せて下さいますの。

主人 (遠方を指さす) まあ、あれを御覧。あの目の前に見えている広々とした土地を御覧。

エルラ 昔あのベンチに腰をかけて、わたくし共は今見える処より、もっともっと遠い処を見ましたのでしたね。

主人 さうさ。あの頃は夢の国を見たのだ。

エルラ (沈黙に頷く) ええ。わたくし共の生涯の夢の国でしたね。今はその国も雪に埋められてしま

① 河竹繁俊著『日本演劇全史』岩波書店、一九五九年。一〇五〇―一〇五二頁。

ました。(間) そして御覧なさい。あの老木もとうとう枯れてしまっていますね。

主人 (相手の詞を聞かずに) あれ。あの港の外に煙を上げている大きな汽船があるが、あれがお前に見えるかい。

エルラ いいえ。

主人 己には見える。(間) あれが行ったり来たりして、世界中の人間に交通させるのだ。そういう事にしようと思も昔は夢の中で思っていた。

エルラ (小声に) その夢はどうとう夢の儘におしまいになりましたね。

主人 うむ。夢の儘でしまいになった。(聞き耳を立つ) あれ、あの下の方の川の処で。(間) 聞いて御覧。工場が器械を運転させているだろう。己の工場が。己が立てる筈であった工場みんなが。あの器械を運転させている音を聞いて御覧。夜業をやっているのだね。夜も昼もあの通りやっているのだ。聞いて御覧。ね。車輪が渦を巻いてロラが輝いているのだよ。永遠に運転しているのだよ。①

こうした演劇の革新は坪内逍遙や森鷗外による西洋近代劇の導入で準備され、小山内薫と市川左団次による自由劇場の結成で本格化した。大山功による史書『新劇四十年』は、思想統制の厳しい太平洋戦争末期の刊行な

① イブセン作・森鷗外訳『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』(自由劇場脚本)、二四二―三四五頁。online.

ら、近代的な理念に導かれる新劇勃興の意義を忌憚なく伝えている。関東大震災が勃発し、築地小劇場が興起する一九二〇年代には、維新以来の文明開花を受けて、都市の生活と種々の学芸が成熟し、産業革命の進展につれて、労働問題の発生と社会主義への関心も顕著となった。

新劇勃興と築地小劇場（大山功著『新劇四十年』）

新劇はわが既成演劇としての歌舞伎劇、新派劇に反抗して起ったものであり、いわば既成演劇の革新を動機として起ったものである。しかし既成演劇の革新運動は新劇勃興当時 に於て初めて起ったものではなく、それは遠く明治十九年の演劇改良の頃にまで遡ることが出来る。この演劇改良会は末松謙澄、外山正一を主唱者として当時の一流の官僚、実業家、学者、文士等が中心となり、市川團十郎を擁して、既成演劇の革新を目ざして起ったものである。その後尾上菊五郎、守田勘弥等が参加して演劇矯風会なるものへ再組織され、更に明治二二年再び組織を改めて日本演劇協会が設立された。

これらの会の目的とする所は従来のが歌舞伎劇を革新する所にあつたが、結局は彼等の演劇の本質に対する無理解と、それから招来された誤れる写実主義のためにいわゆる「活歴」と称される新歌舞伎劇を残したことで、演劇改良会が理想とした歌舞伎座を建てた以外何等の業績も残さなかった。「活歴」は近代文芸、近代演劇に於ける写実主義とははるかに縁の遠い、皮相な史実尊重と徒らに高尚上品を銜う当時の官僚的國家主義の道德的理想を主張した非芸術的な史観にすぎなかった。・・・

こういう情勢の裡にあつてかつて日本演劇協会の文芸委員たりし坪内逍遙は、早稲田専門学校に文学科を創設し、欧州の文芸、演劇殊に沙翁劇の研究に没頭し、一方制作に志すと同時に演劇の研究、評論を発表していた。そして遂に明治三九年その門下生を擁して文芸協会を起し、演劇の全面的革新に乗りだした。又坪内逍遙と同じ日本演劇協会の文芸委員たりし森鷗外も西洋の文芸、演劇の紹介、翻訳、批評を物し、特にハルトマンの独逸美学の立場から先駆的な意見を發表し、実際の劇壇に多くの示唆を与えていた。そこに新しい演劇創造の機運は漸く動きはじめた。

更に明治四二年洋式の新しい劇場たる帝國劇場の創立が企画され、女優の募集養成が開始された。また一方同じく洋式の劇場である有楽座が完成し、新派の一方の旗頭藤沢浅二郎は単独で東京俳優学校を立てた。そして、これらの新氣運に促進されて文芸協会は組織を一新し、演劇研究所を設立して実際の革新運動に乗りだす色々な準備をととのえた。

このような外面的な事情によって漸く劇壇革新の新機運が醸成される一方、内面的にも新しい演劇創造の素地が出来上りつつあった。即ち当時の人々、特に若きインテリゲンチヤは、わが国資本主義の發展と西欧自由主義の輸入とによって、漸く封建主義思想、感情をもった歌舞伎劇、新派劇に飽き足らざるものあり、自己の生活感情を充足してくれる新しい演劇を願望してやまなかった。このような事情を背景にして起ったのが、明治四二年の自由劇場の創立であり、明治四四年の文芸協会の運動であつた。そしてここにわが国新劇運動の第一幕がきつておとされたのである。

自由劇場はいうまでもなく小山内薫と市川左團次との共同事業であり、明治四二年十一月第一回試演をもつてそのスタートをきったのであつた。小山内薫は大學卒業後伊井蓉峯一座に關係して演劇の實際を研究すると同時に、日本演劇の批評等に筆をとっていたが、秘かに商業演劇の前途に深い憂慮を抱いていた。一方

市川左団次は父を亡って以来、明治屋の孤星を守って奮闘していたが、明治三十九年松居松葉に従って渡欧し、西欧の演劇の実状を視察し翌四十年帰朝した。そして彼の地の演劇界の情勢に深く刺激され、演劇革新を目ざして敢闘したが、当時の人々には却て冷罵を以て迎えられ、迫害さえうけやうとした。このような環境と立場におかれた二人が、昔日の交流を層一層深め、ここに相携えて新しい演劇運動を起すべく創立したのが、自由劇場に外ならなかった。・・・

大正十二年の震災によって東京の主なる大劇場は殆どみな灰燼に帰して、再び演劇なぞの復興は何時の日か分からないという状態になってしまった。しかし復興事業は意外に早く進捗し、演劇娛樂等に渴望する民衆は次ぎつぎに建てられるバラック式の劇場へ殺到するという現象を招来した。第二期に於て殆どその姿をかくしたかにみえた新劇団も次ぎつぎに再生してきたが、殆ど仕事らしい仕事をすることなく消えていった。それらの中で最も大きな業績を残した中心的存在たるものが築地小劇場であることはいうまでもない。築地小劇場はかつての自由劇場の指導者であった小山内薫と、氏に師事して演劇研究のため独逸に滞在していた後進土方与志との共同事業である。①

二五歳にして襲名し、明治座座元を引き継いだ二代目市川左団次は、明治三十九年亡父の追善供養のあと九カ月の海外旅行に赴いた。まずパリでは『ノオトルダム・ド・パリ』の舞台に接し、女優サラ・ベルナルとも会見

① 大山功著『新劇四十年』三杏書院、一九四四年。一三一―一七、六七頁。

する。ついでスイスの湖畔にウィリアム・テルの墓を訪ね、イタリアではミケランジェロの天井画に感嘆。ベルリンではイブセンの『社会の柱』やゴリキークの『どん底』を観劇し、さらにイギリスへわたって俳優学校を參觀するとともに、シェイクスピア祭に際して『ジュリアス・シーザー』等に接した。こうした研鑽の成果を抱いて帰朝後の左団次は、劇場と演出の改革に着手し、明治座で『ヴェニス商人』を上演するものの、徒らに反発と嘲罵を浴びるのみである。以後数年不振と失意が続くなかで、旧友小山内薫はたえず彼を励まし、扶け合うふたりの先覚者が、やがて自由劇場の創建へと前進した。①

市川左団次・小山内薫の自由劇場結成（『左団次芸談』）

小山内君をそもそ私が知ったのは十七、八歳の頃で、その当時私は雜俳に凝って元数寄屋町の鶯亭金升氏の門に通っていたので、その運座で始めて顔を合わせた東亭扇升、又の名富士見小僧と云ったのが小山内君で、まだ軍人志願の中学生時代で、その後高等学校の文科に入ってから余り運座には顔を出さず、大学時代は伊井一座の真砂座に関係していて、私の洋行から帰った頃には浅草の瓦町に住んで真砂座とも関係を絶ち、専念演劇の研究に没頭して、その研究の結果をば聞かしてくれたので、非常に心強く思ったが、私の

① 市川左団次著『左団次芸談』南光社、一九三六年。九〇―九四、九八一―一〇四頁。

小山内薫「市川左団次の半生」（『小山内薫全集』春陽堂、一九三一年、春陽堂。第五卷、六七二、六七六―六七五頁。）

劇場制度改革の失敗当時のことを、小山内君は「この興行中私は毎日のように彼を楽屋に訪ねた。私は出来る限り彼の〈孤独〉を慰めた。彼は誰にも云はぬ憤激を私に洩らした。十何年唯ぼんやり付合ってきた私と彼は、この時初めて本当の〈友達〉になったような気がした」と書いてゐる。

そうして仁左衛門氏が明治座に一座していた明治四年の三月のことであった。私は楽屋へ訪ねてきた小山内君をとらまえて「いつ迄こんなことをしていても、きりが無い。この間から話している計画を是非とも実行しようではないか。一年に一回でも二回でもいいから、実際に自分のしたいと思う芝居をば演ってみよう」と、相談したのだった。

小山内君とても勿論賛成である。然しひどく謙遜して、今の自分の学問ではまだ到底不十分であるから、みっちり勉強をする間、もう十年待つてくれないかと云いだした。けれども私は、そう云えばそうでもあらうが、然し今出来ないことは、十年経つても出来ないに違いない。思い立った以上は、直ちにやらなければ駄目だ、と促し立てた。全くのところ、自由劇場はただこの勇氣だけで出来上ったのであった。

従つてこの事業は世間からはかなりに危惧の念を以て迎えられた。然し興行演劇に於ては自分の思う儘に芸術家としての使命を果すということが出来なかつたので、興行演劇を演らねばならぬ位置に置かれた私としては、この自責の念に全く苦しみ悶えていたのであった。そうしてせめては此自由劇場に依つて俳優としての使命を果し、本来の演劇に為に尽したいと熱望したのであった。・・・

「始めて劇評の筆を執る」と書かれて、森田草平氏は縷々と述べられて、「これを要するに、今回の自由劇場第一回試演は予想外の大成功であつた。それは役者の手柄でもなければ、背景のお陰でもない。直接イブセン自身の効果である。従つてイブセン劇を始めて日本に輸入した小山内薫、市川左団次の手柄である」

と評された。

故鈴木泉三郎氏は『俳優評伝左団次』の巻のなかでその時の模様を誌されているが、「第一回試演を行った時のわれらの感動と云つたら、まア何と云つたらよからうか。丁度心の内に描いていた夢のような恋が叶つた時の喜びにも似ているのであろうか。一人の友達はすこし取逆上せたのではあるまいかと思う程な、はしやぎすぎた態度と表情で、上ずつた声でその夜は明け方近くまで、わたしの部屋でおしゃべりをしていた。も一人は一緒に芝居を見ている内に、陰気に黙り込んで仕舞つて、はねてからよそで少しばかりの会食の間も、涙ぐんでいるやうに見えて、話し声など震えていた。」^①

かくして明治四一年小山内薫を主事、市川左団次を舞台監督として自由劇場が結成され、年二次の公演を原則として、島崎藤村や柳田国男など十七名を顧問に仰いだ。女優の人材が乏しいのを考慮して、第一回公演にイブセンの作品中でも『ボルクマン』を推挙したのは藤村とされる。^② 彼によれば、近代劇導入の社会的意義は、学芸の発達を促進するに止まらず、広く万民の思考や言談を革新するところにある。『若菜集』と『破戒』でわが国近代文学の口火を切つた藤村は、『ボルクマン』観劇の前年自伝的な小説『春』を完成し、浅草新片町にて次作の長編『家』を準備しつつあつた。

① 市川左団次著『左団次芸談』一二八―一二九、一三九―一四〇頁。

② 伊藤整著『日本文壇史十五 近代劇運動の発足』講談社、一九七九年。一二五―一二九頁。

島崎藤村「自由劇場の新しき試み」

自由劇場でこの秋舞台に上せようとするのは、いわば近代劇そのものの翻訳を試みようとしているのです。・・・イブセンなどの戯曲を上場すると云うことは今までになかったのです。すべての点から云って、今日完全なものを求めることは、無論できませんが、ただよく全体を纏めたと云われるよりも、鬱勃たるイブセン劇の新味を、幾分なりと提出して貰いたいと願っています。文学の方面から云っても、海外に於ける、露仏もしくは独伊等の新作物が、翻訳されて伝えられたと云うことは、筆を執るものにとって、刺激を与えるばかりでなく、またそれを味う人々の眼をも覚したのであります。清新な外国の作物が翻訳され、また現にされていると云うことは、新文学の興るについて大なる刺激を与えたので、従来とは異なつた人世の取扱いが、なんらの束縛なき物の見かた、自然の愛などを教えたのです。こう思うと劇そのものの翻訳にも、これが刺激となり、導火線ともなつて、新しく興つて来る劇の先駆ともなろうと考えます。私が今度の自由劇場に於て、イブセンの作『ボルクマン』を上演するについて、望を囑しているのは、そこにあるのです。

振り返つて今の時世を見れば、過去の人々が享樂した演劇音楽等は、吾らにとって真に隔世の感がある。今は実に落莫たる時である。「生」を享樂すべきものの極めて少い時である。せめて新しい芝居の起つて来るまで―吾らだ胸いっぱい泣いたり笑つたりすることのできる芝居の起るまで―西洋近代劇の忠実なる翻訳によつて、自分等に近いものを、舞台の上に見出そうではありませんか・・・

演劇が吾ら日常の会話に及ぼす影響も多い。武士道とか、禅とか、その他昔から種々な教育を経て来て、

吾らは沈黙に慣らされたが、その結果は自己を表白するに拙いものとなつた。吾らはあまりに言葉を卑み過ぎた。イブセン劇などがこれからしばしば演じられて、ああいふ自由な、陰影の多い言いまわしが可笑しくなく聞えて、自然とそれが多くの人の会話にも上るようになると、その影響は大きなものだろう。①

伊藤整の大著『日本文壇史』の第十五卷「近代劇運動の発足」には、自由劇場第一回公演に向けた明治文壇の関与と反応も詳しく叙述される。この劇団は千五百人を限度する会員組織であつて、年会費は二円五十銭、会員には家族をも含む観劇の特典が与えられる。②

自由劇場第一回公演第一日（伊藤整著『日本文壇史』）

自由劇場の公演の第一日なる十一月二七日には、顧問として関係した文壇人や画家たちだけでなく、若い文士や学生たちも大きな期待を持っていた。当日は島崎藤村、蒲原有明、柳田国男、岩野泡鳴、徳田秋声、岩村透、田山花袋、和田英作、北蓮蔵、森田草平、正宗白鳥などが集つた。翻訳者の鴎外はこの日、内務大臣平田東助の息子の結婚式に招かれていたので、母の峰子が孫の於菟と茉莉を連れて出かけた。鴎外は二日目を見に行くことにしていた。また小山内自身も執筆者の一人である『スバル』からは小山内の友人の吉井

① 島崎藤村著『後の新片町より』新潮社、一九一三年。二〇四―二〇七、二二一―二二三頁。

② 伊藤整著『日本文壇史十五 近代劇運動の発足』講談社、一九七九年。一二五―一二九頁。

勇と長田秀雄が見に来ていた。また、学生たちのなかには、東大の国文科の二年生で、数え年二四歳の谷崎潤一郎というのが平土間の椅子席で見えていた。・・・数え年二五歳の長田秀雄は、もう寒い頃であったので、外套を着て『スバル』の同人たちと有楽座に入った。彼の席は土間の真中辺であった。小屋は満員になっていた。・・・

『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』の劇ははじまった。左団次は頬髯をつけ、老人の身ぶりで現れた。重つ苦しい芝居であったが、この舞台も背景も演出も、すべてがこれまでの日本の演劇とは違って、イブセンという西洋の劇作家の創造をそのまま実現しているという強い印象が観客を捉えて離さなかった。・・・芝居がすむと、湧くような拍手が小屋を満たし、しばらく鳴りやまなかった。文士や画家たちは、場内の食堂なる二階の東洋軒で行われる慰労会に出席した。『スバル』関係の若い作家たち、吉井勇や長田秀雄などはその人々のあとから上って行った。二間をぶつ通しにしたその二階の部屋に椅子や卓が雑然と並べられたあった。長田は隅の椅子に腰を下して恐る恐るそこに集った先輩たちをみまわした。三六歳になる藤村、花袋、秋声のほか、もう三つ、四つ若い蒲原有明や官吏の柳田国男、それに美術評論家の岩村透などが煙草の煙を吐きながら談笑していた。舞台装置を手伝ったという和田英作、中沢弘光、岡田三郎助その他の画家たちが疲れ果てたような、しかし満足した目つきで集まっていた。入口のドアが開いて、小山内薫と市川左団次を先頭に、自由劇場の俳優や関係者の全部が、顔の作りを落とし、衣装を着かえて現れ、挨拶して細長い一つの卓のまわりに坐った。皆の前に盃が置かれ、ボーイたちがシャンパンを注いでまわった。岩野泡鳴が立ち上って、元気のいい声で祝辞を述べ、小山内薫が劇場関係者を代表して答辞を述べた。一同は心から

の拍手をしてその労をねぎらい、成功を祝して乾杯した。

①

こうした自由劇場の公演は、年度にして第一回から第四回まで有楽座を舞台とし、第五回から第八回までは帝国劇場に替えて行われた。与謝野晶子が最初にこれを接したのは、明治四四年六月一日有楽座においてある。この興行では長田秀雄作『歡樂の鬼』、秋田雨雀作『第一の暁』、吉井勇作『河内屋与兵衛』、メーテルリンク作『奇蹟』の四本小山内薫の演出で組まれ、左団次は『歡樂の鬼』と『河内屋与兵衛』の各主役を演じた。②日本人による戯曲を初めて舞台にするとあって、当日は島崎藤村、徳田秋声、正宗白鳥、木下杢太郎、高村光太郎など著名な文学者も観劇する。『明星』の同志ともここで再会した与謝野の記録は、新劇勃興の雰囲気とともに、新たな戯曲上演の意義をよく伝えている。歌集『みだれ髪』で名高い彼女は、この年『新訳源氏物語』の執筆を始めるとともに、平塚雷鳥に賛同して『青鞥』創刊号へ詩作「山の動く日来る」を寄稿した。

与謝野晶子「自由劇場の印象」(『定本与謝野晶子全集』第十四卷)

六月一日、二日と催された自由劇場を初めの夜に観に参りました。私共の席の側の箱に藤村様の顔が見えました。並んでいらっしゃるのは秋声さんと白鳥さんと承りました。左の二階には木下杢太郎さんが独逸

① 伊藤整著『日本文壇史十五 近代劇運動の発足』講談社、一九七九年。一三三―一三七頁。

② 小山内薫・市川左団次編『自由劇場』自由劇場、大正元年。付録。

人夫婦を伴れて来ておられる。その周囲には今日演じる新しい脚本の作者達やその友人達の若い作家が集っておられる。中にも黒地に紅い肩章のある上等兵の服を着た長田秀雄さんが目に立って見えました。後で廊下でお目に掛かると、今夜は特別に中隊長の許可を得て十二時までには外出が叶うのだと仰っしゃる。幕が明くと岡田八千代さんにお目に掛かる。お久しくと御挨拶する。どういう訳か少しお痩せになった様な気がしました。鈴が鳴り出したので席に就こうとすると、一列おいた後の方で挨拶をなさるのは高村光太郎さんでした。前の團十郎の娘さん達の組みの近くに平出(修)さん御夫婦がお嬢さんを伴れて来ておられる。例によって小山内さんの開会の挨拶がある。きゃしゃな姿のこの若い舞台監督がフロックコートを著けて、大きなネクタイをひらひらさせながら、つやを消した銀色のよく徹る声で気の利いた挨拶をなさるのを聴いて、先年平田禿木先生が倫敦の舞台で観て来たとお話しになった愛蘭土生れの詩人イエエツの挨拶ぶりなどが想い出されました。「三つながら私共と同じ若い作者の若い心持で作った一幕物を選んだ」と仰った時は何かなしに目がうるみました。

長田さんの『歓楽の鬼』の博士夫人はイブセンの書いた女を想わせるような台詞に面白い所があると思いましたが、延若の扮装が芸妓の様であったのと、博士と話しながらヒステリー風な気分になって、反抗的な台詞に移る間が、少し突然であったのと、博士に死んだ子の事を言われて、直ぐに平凡な日本の女に復って仕舞って、泣きじゃくる所が、呆気なかったのとを物足りなく感じました。・・・良人が畢生の著述に従おうとする病苦を振棄てて、良人の家を出て行こうとする夫人の主我的意志的な所は、一種のノラを想わせて、あれ位露骨なのが面白いのですが、亡くなった子の為にせっかく覚めかけた新しい心を頓挫して仕舞うのは、性格の発展が矛盾していると思いました。・・・

次の幕の秋田雨雀さんの『第一の暁』は前のと違って翻訳物臭くない、型の無いきびきびとした、全く新しい技巧で出来た一幕物でしたが、俳優に作為が飲み込めていなかったつらしいのと、舞台の装置がうまく行っていなかったのとで、変に呆気ない物になって仕舞いました。・・・猿之助の扮した三五郎が自分の斬った先学者の志を継いで、「僕は城へ帰りたくない。あの冷い牢獄の様な板間を踏んで何をするのだ。空気の腐った白壁の中から、藻の生えた濠を眺めていて、何をするのだ。僕は行く。其処には暖かな春と自由と云う大野があるのだ。国と国が友達のように手を握る。だが其処へ行くには大きな戦争があるかもしれない。」と云って遠い行方の知れぬ漂泊者となって、城下を離れる気持は、私の胸にも応えました。この三五郎もまた第二の犠牲だと思いました。而して今夜この有楽座に集った若い芸術家と若い女の中には、三津丸もあれば、三五郎もおる、と思うと湿った心も躍りました。

この『第一の暁』の象徴は現代の大勢であり、現代の先覚者たる若い者の心であると思います。新しい歓喜を期待する改造、如何にもそれには是非はげしい一戦争を要します。保守と進歩との争い、野蛮と文明との争い、親と子の、社会と個人との争い、古い権威と新しい生活との争い、それは悲惨ではありますが、とにかく革新の元気に満ちた愉快な時運に出遇ったのを喜ばねばなりません。真に生き甲斐のある私共だと思えます。妥協を排して各自に真剣な生活を作り出す時代が近づきました。既に芸術家と若い婦人との世界にはその第一の曙光が見え出したじゃありませんか。

箱の中へ子供を伴れて来ている羽左衛門に何か言って、下の席の女優達がはんけちを投げたりしていると、吉井勇さんの『河内屋余兵衛』が聞きました。岡田画伯などの御苦心なすっただけあって、第一に舞台が目新しく整っていました。向かって右に大きな黒びかりのした油桶が六つ七つ並んで、暗い夜の陰に種油の匂

いがしそうです。正面は広く内庭を取って、奥の突き当りの表口には大きな戸が締っています。・・・

余兵衛の傍には妹が座ったまま、うなされて居る兄を夜明けまで守っていました。余兵衛は、夢で長崎の商人が預けて行った絵の中のドン・ファンと云う立派な若い人に逢った。その人は美しい言葉で、わしの思っていることと同じ心持を言って居た。その人もまたわしの様に「長崎」へ行きたいと言って居た。わしはもうしばらくもこんな土地に居たくない。長崎へ行こう。そこへ行ったらドン・ファンという人にも逢われるかもしれない。「長崎へ、長崎へ。」こう云って夢を見て居るような気分になって、よろよろと庭へ跳び下りながら、裸足で表口を明けて駆け出します。「兄さん、わたしも伴れてって下さいあい。」と云う声が、大きな潜り戸を明け放したままの表口から舞台に響き渡る。外はすっかり白く夜が明けて居る、空虚になった河内屋の店は夜の様に寂寥。幕が徐々と下りました。

この劇の暗示する所も前の『第一の暁』と同じく、今の若い男女の心持ちです。幾多の余兵衛とその妹とは、この劇がかように舞台の上で成功を得た如く、自己の改造に勝利を得ねばなりません。「長崎へ、新しい思想の生活へ。」と感動した私の心も、余兵衛の妹の健気な後を追いました。

次のマテルリンクの『奇蹟』の幕が明く迄廊下へ出ると、荷風さんと良人が立話をしています。某さんが、勇さんの御父様の吉井伯爵も、勇さんの妹さん達も二階に来ていらっしゃるなどと教えて下さいましたので、

「それでは余兵衛の妹よりも、実際の余兵衛のお妹さんの方がお美しいでしょう」と申しました。①

陸軍軍医たる父を幼くして喪くした小山内薫は、つとに東京帝国大学の学生時代に、文芸雑誌『万年草』に投稿し、森鷗外と上田敏の知遇を得た。鷗外を介して新派の俳優伊井蓉峰に紹介され、彼は深川の芝居小屋『真砂座』に迎えらる。小山内薫と二代目市川左団次とにより結成された自由劇場は、明治四二（一九〇九）年初の公演として新築の洋式劇場、有楽座でイプセンの戯曲『ボルクマン』を披露した。その翌々年渋沢栄一を創立委員長として帝国劇場が落成し、自由劇場の公演は以後ここで行われる。やがて小山内は演劇視察のためヨーロッパ諸国を歴訪し、モスクワ芸術座でゴリキの『どん底』等に感銘を受けた。② 大正三年帝国劇場では芸術座の島村抱月演出、松井須磨子主演によってトルストイ原作『復活』が上演され、その主題歌『カチュシャ』が世を風靡する。一方帰国した小山内は同年やはり帝劇でゴリキの『夜の宿』（『どん底』）を演出するとともに、島村・松井に対抗して有楽座でアンドエーレフの象徴劇『星の世界』を有楽座で上演。自由劇場の公演は以後四年間中断し、大正八年に復活するも不評に終わった。この間に彼は大劇場の営利主義や興行の低俗化に違和感を募

① 与謝野晶子「自由劇場」『定本与謝野晶子全集』第十四卷（評論・感想集一）講談社、一九八〇年。四六三―四七〇頁。

② 小山内富子『小山内薫―近代演劇を拓く』慶應義塾大学出版会、二〇〇五年。五一、八二―八四、一〇五―一〇六、一二二―一二三、一二九頁。

らせる。小山内の慨嘆「新劇復興のために」は大正六年より雑誌『新演芸』に連載され、商業演劇への失望と訣別が表明された。

商業演劇への失望と訣別（小山内薫「新劇復興のために」）

日本の「新しき芝居」よ。哀れな日本の「新しき芝居」よ。お前のこの頃の瘦せようはどうだ。お前のこの影の薄さはどうだ。お前はオイケンやベルグソンやタゴオルのように、やっぱり「一時の流行」であったのか。

お前が始めて外国からこの国へ渡って来た時、この国の所謂「有識者」はどんなにお前を歓迎したろう。どんなにお前を有難いものと思ったろう。そして、どんなにお前を無くではならぬものと思ったろう。

然るに、今日のお前はどうか。お前は僅かに「田舎廻り」に生きている。お前は辛くも浅草公園に生きている。そしてもう「有識者」とは何の関係もなくなってしまった。「有識者」の末流とも何の交渉もなくなってしまった・・・

お前がほんとに莫迦にされ始めたのは、あの「カチュシヤの唄」からだ。『復活』は、お前にとって『復活』ではなかった。『復活』ではなく、『死滅』だった。「カチュシヤの唄」で当った『復活』―トルストイにはほんの僅しか関係のない『復活』―まるで黙阿弥の芝居を見るようなセンチメンタリズムの『復活』―あれから、お前の本当の姿は段々舞台の上に見られなくなった。お前は段々名前ばかりになった。そして、名前ばかりのお前がお前だとして、今までお前を見た事もない人達に喝采され出した。そして、今まで不完

全なお前の姿の内にも本当のお前を求めてやまなかった人達が、段々お前を遠ざかるようになってしまった。

芸術座が「二元の道」を説き出したのも、丁度その頃だったろう。「二元の道」とは何の事だ。簡単に言えば、一方では神に仕えながら一方では人に仕える事だ。そう言うのが若しむづかしえれば、一方では金儲けをしながら、一方では芸術家になろうというのだ。即ち、少しは俗衆の媚びても、先ず金をうんと儲けた上で、それから損得を顧みない純粹な芸術を見せようというのだ・・・

『復活』で味をしめた芸術座が二元の道を説き出してから、お前は本当にみじめな目を見始めたのだ。お前はやがて浅草の六区へ連れて行かれた。お前は大阪俄や活動写真と一緒に陳列された。そして、あの埃だらけな、外から見通しな野天のような舞台で、薄暗い醜い光の中で、臭い息と噓せるような烟の籠った空気の中で、耳も聾になりそうな騒がしい物音と人声の中で、八公熊公の前にお前の姿を晒さなければならなくなった。あたりが騒がしい為に、役者の声は段々高く叫ぶようになった。あたりが騒がしい為に、役者の目は段々大きく見張るようになった。役者は群衆の勢に負けまいとして、舞台の上で出来るだけ荒ばれた。哀れな日本の「新しき芝居」よ、かくしてお前は咽喉を割られたり、まなじりを割られたり、手足を抜けほど引っ張られたりした。無慚に傷つけられたお前の魂は、やがて公園の池に投げ込まれてしまった・・・

「新しき芝居」よ。決して失望してはいけない。決して落胆してはいけない。お前の本当に立つのは寧ろこれからだ。今までお前に追従して来た者は、みんな嘘の人間だ。今のような姿になったお前を見捨てない

で、もう一遍これからお前を守り立てて行こうという人が、本当にお前の味方なのだ。①

築地小劇場の創立者土方与志は、伯爵土方久元を祖父とする。久元はかつて土佐藩勤王の志士であり、文久三年三条実美らの七卿落ちを護衛。やがて坂本龍馬等とともに薩長連合を支援し、幕府を大政奉還へと追い詰めた。維新後彼は男爵に列せられ、第一次伊藤博文内閣では農商務大臣と宮内大臣を歴任する。② その孫与志は幼くして父を喪くし、二十歳若さで爵位を相続する。学習院中等科に在学の頃からイプセンなどの戯曲を読み始め、帝国劇場で『ジュリアス・シーザー』の舞台にも接した。また、素人劇壇の友達座を同級生と組織し、みずからは舞台監督を担当する。以後帝国大学文学部に進学して、小石川の自邸に模型舞台研究所を設け、友達座によるメーテルリンク作『タンタジールの死』を渋谷福沢桃介邸の丸太小屋で披露。一九二〇年帝国劇場の公演記録には、ワグナーの楽劇『タンホイザー』星の歌巡礼の場』総指揮山田耕筈、合唱指揮近衛秀麿に加えて、演出土方与志と誌される。その翌年土方は山田耕筈の紹介で小山内薫を訪ね、弟子とされるよう懇請し、試練として明

① 小山内薫「新劇復興のために」『小山内薫演劇論集』未来社、一九六四年。第一巻、三五、三七―三八頁。）

② 渡辺修二郎著『評伝 松方正義・土方久元』同文社、一八九六年。一七一―一七五頁。

土方久元著『回天実記』東京通信社、一九〇〇年。四頁―

治座にて市川左団次一座の『俊寛』に舞台装置を施した。①

人生の煩悶とヨーロッパ留学（土方与志「灰色の築地小劇場」）

一九二〇年私は職業的演出者となるために、小山内先生の助手として徒弟的な修行をつむことになった。

そして先生の戯曲『第一の世界』に、初めて演出を担当することが出来て、とにかく劇団にデヴィューした。

この頃は私生活の上では、いわゆる栄爵と一緒に先代の遺していった三十余万円の借金の整理も一形つけ、其の結果数万円を浮かせ得たので、ほっとしたところだった。しかし、この時代にまきおこったデモクラシーの波は、私のようなものをいろいろ考えさせた。なお、周囲の特権階級の中にある横暴や虚偽や矛盾に対しても人並みの不満を感じずにはいられなかったし、まだ〈河原乞食〉などの観念があつて、私の選んだ道には相当の石ころがあつた、

特権階級の一員として、また有産者としての不安や事績や、一九一八年頃からの「演劇における理想主義者」としての、当時の劇団に対する不満や、特に小山内先生のすすめによって初めて知った平沢計七氏の指導していた労働劇団に対する異常な感激等で、どうにもならないあせりを感じていた。

私は息苦しくもあり、面倒臭くもあり、誰に何ともなく腹だたくもあつて、日本を離れようと考えた。

① 土方与志「自伝」（『土方与志演劇論集 演出者の道』未来社、一九六九年。三九五―三九七、

四〇一―四〇二、四〇六―四〇九頁。

その結果としてどこへというあてもなく、漠然と、しいて目的をつければ、優れた演劇を学ぶことの出来るヨーロッパのどこかの国に行こう、しかしいつまでということもはっきり考えずに、また出来たら家族も次第に呼び寄せて、移住してもいいつもりでさえいた。一九二二年私は一人で外遊の途に上った。・・・

パリについた。エトワール凱旋門の近くのオテル・パンシヨンの北向きの屋根部屋におさまった。モスクワ芸術座のソヴィエト国外客演第一夜の『どん底』を見たのはその夜だった。私はこの夜の観劇およびその後毎夜芸術座の上演を見たことを今にして思えば、稀有の幸福であったと考えるが、またこの観劇は、ここに語ろうとする築地小劇場九年のためには決して幸福のもでなかったといわねばならない。私は『どん底』『桜の園』『ステパンチコフ村』『村の一日』等を連夜見つづけた。これら旧ロシアの生活を描いた作品は、もちろんロシア語のわからなかった私が深く内容を理解することは不可能であったが、私に激しい観劇を与えてはくれなかった。『どん底』の上演も、なにか完成美というようなものは感じたが、ひどく平板なものに感じられた。・・・

当時パリの劇壇は非常に盛んであった。国立劇場のほかに多くの小劇場も、それぞれの長をもって存在を主張していた。私の最も多く訪れたのは、ジャック・コポーのヴィユウ・コロンヴィエ座と、北欧の近代劇を多く演じるリュネ・ボーの創作劇場であった。私は暮から正月にかけて率直にすべての観劇の印象を小山内先生に報告した。

一九二三年一月ベルリン大學に演劇科が開かれると聞いたので、ルール占領、そしてさらにヨーロッパ戦争の再発の噂をよそに、フォッシュ將軍の軍隊と一緒に汽車でベルリンに着いた。・・・当時ベルリンは表現主義演劇の最盛期であった。私はゲオルグ・カイザーの世相的戯曲の上演や、またエルンスト・トラウ、

カール・チャベック等の作品に興味を感じた。革命的演劇運動はまだはっきりと現れていなかった。エルウィン・ピスカルなどとは場末の劇場で、トルストイの『闇の力』などを上演していた。①

産業革命の進展と労働問題の深刻化のなかで、大正期には社会主義の影響を受けた劇団も誕生した。「新民衆劇の萌芽とも云うべき」と戯曲家中村吉蔵は大正十年の雑誌時評に下町の探訪を書く。「一風変わった芝居の催しを見た。場所は深川の錦糸堀から五の端へ出た市外大島町の五の橋館という寄席である。三、四百人位入れる小劇場程度の建物で、舞台は四、五間の幅しかないが、そこを利用して労働者出身の文筆である人が、労働問題を取扱った脚本を作り、旅廻りの少数の俳優を相手に、作者自身も登場してそれを上演した。付近は工場労働者が群居しているのだから、彼等は続々その寄席へつめかけて席は忽ち満員となつて了う。舞台に展開する劇は、芸の巧拙は兎も角、直に観客たる労働者の心臓にまで高い鼓動を伝える題材なので、彼等は熱をもってそれに共鳴して行く。そこに他の劇場では見られない生きた光景があった。」②

平沢計七最初の戯曲『夢を追う女たちの群』は、鉄道院浜松工場に勤務する大正三年に発表された。上京後も戯曲と小説を書き続ける彼によつて、江東地区に労働劇団が結成され、亀戸の五の橋館において、大正十年十二月九日から三日間と翌年二月から三日間、『失業』など平沢の脚本五つが上演された。蟄居中の小山内薫に推奨

① 土方与志「灰色の築地小劇場」(『土方与志演劇論集 演出者の道』一一一―一一三頁。

② 中村吉蔵著『現代演劇論』豊国社、一九四二年。八六―八七頁。

され、土方与志や中村吉蔵を感服させた舞台はこの企画である。つぎにその一端を示す作品『大衆の力』は、大地震の二カ月前に、プロレタリア運動の雑誌『新興文学』に掲載された。①

労働者の苦悩と争議（平沢計七の戯曲『大衆の力』）

舞台は初夏の夜の七時。舞台は職工の酒場。正面の壁にビールの広告絵、労働問題演説会の辻ビラ。酒肴である事と、酒一合十八銭、刺身御一人前二十銭等の定価表を読んでこの酒場が極く安直な酒場である事を知る。・・・

高井 俺もいつかの演説会で聞いたのだ。だがそれに違いない。俺達は資本主義にすっかり身体を縛られて、自分自身の生活が無いんだ。俺達が人間として活きるには、先ずこの俺達を縛っている資本主義の鉄の鎖をたたき壊さなくちゃいけないんだ。その為には労働運動しなくちゃならない。だから、俺達は労働運動するために生きていくんだ。（昂奮する）だから今度の事はどいつが反対しよう、是非やつつけなくてはならない。

佐久間 （声を潜めて）それは先刻から云っている通り、旋盤工場じゃみんな賛成なんだよ。ねえ、豊田さん、あなたさえ承知すれば、直ぐにでも爆発するのだがね。

豊田 だから私も反対しません。しかし今はその時機でないと云っているんです。私は喧嘩を始めたなら

① 藤田富士男・大和田茂著『評伝 平沢計七』恒文社、一九九六年。六一―六七、一一五―一一九頁。

ばどうしても、その喧嘩に勝たなくてはならないと思っている。ところが、今会社の全職工が気を揃えてたつたとしても、私には勝算がないのです。誤解せずに聞いてください。私は理由なしに反対しようと云うのじゃない今起つたならば職工が負けるにきまっている。

高井 そんな事は知っているよ。（荒々しく）金と金とでの喧嘩ならばよ、労働者が負けるにきまっているんだから、負ける覚悟でやろうじゃありませんか。その代り資本家の一つびきくらい眠らせるにや俺一人の力でもたくさんだ。なあに、いよいよとなれば、命を投げ出すだけの話さ。・・・

豊田 ま、そう怒らずに呉れたまえ。そのうちに良い時機が来るからね。

高井 わかったよ。工場を追い出されちゃ飯は食われないからね。へん、頼まねえ、俺達だけで、やら。矢はもう弓を離れているんだ。（佐久間に）なあおい。

佐久間 まあ待て、もう少し話して見よう。ねえ、豊田さん、ストライキって奴は、考えてやるようなものでなくて、考えるひまも何もあらしめない。堪忍袋の緒の切れてやるんだからね。（卓を叩いて）会社がこの頃の横暴はどうだ。武田の臆首になったのも内山の転勤になったのも、仕事が無いからじゃないのだ。骨つ節のある奴を片付けてから、こちとらの料理にかろうって寸法だ。みんなの身体に火の粉がふりかかっているんですぜ。仕事は山程あるんだが、世間がひまだから高級者を追い出して、新規の職工を安く使おうと云うのだ。こんな時に黙っていちや労働者の恥だ。世間の奴等に笑われらあ。日本鉄造の職工は如何にも骨無しだってな。第一、くびになった武田に対してはも義理が悪いや。

① 平沢計七「大衆の力」(『平沢計七先駆作品集』一人と千三百人／二人の中尉) 講談社、二〇二〇年。
二八三―二八五頁。

第二節 新劇の勃興と震災前夜における新劇人 その二

演劇革新の重要な要素である女優の養成は、明治四一年川上音二郎と川上貞奴により設けられた帝国女優養成所が嚆矢とされる。その開所式が芝の大庭理髪店二階で開かれ、列席した渋沢栄一は入学者に次のような式辞を述べた。「従来世間から賤しめられていたものが三つある。一つは私の様な商人で、女子と俳優だ。私はその賤しめられた素町人の立場から、大いに女子と役者に同情を表する。」① この養成所は三年後帝国劇場に付属技芸学校として受け継がれ、第一期の女優十一名が同劇場で河竹黙阿弥原作の『透写筆命毛』等に起用された。こうした女優の養成と起用の歴史的意義が、大地震三年前に刊行された『帝劇十年史』に記述され、演劇志望者への激励も付記される。

「帝国劇場技芸学校」(杉浦善三著『帝劇十年史』)

炯眼なる川上(音二郎)氏は組織的に女優を養成する事の必要と利益なるを思い、ここに芝区桜田本郷町十七番地に帝国女優養成所なるものを設置し、妻女貞奴をしてこれにあたらしめ、一方帝劇の諒解を得て新

① 井上清三著『川上音二郎の生涯』葦書房、一九八五年。一〇七―一〇九頁。

「女優養成所開所式」『渋沢栄一伝記資料』第二七卷、四三八頁。

女優志願者の募集を開始す。・・・(明治四二年七月)これを帝劇の直轄経営に移し、校舎として構内に新館六二坪の工を起し、学則その他を東京府庁に申達して認可を稟請し、十七日を以て時の府知事阿部浩氏よりその指令を受く。・・・

四三年三月二六日帝国劇場株式会社取締役会長・男爵渋沢栄一氏、付属技芸学校総長に就任し、技芸学校はここに内容外形共に具わりて其存在を明かにし、同年九月十六日第一期卒業生十一名を出せり。・・・願れば、付属技芸学校開校以来入学せるもの合計五五名、此中完全に業を卒えたる者三六名、現在生徒十二名、落伍者通計七名也。而して三六名の卒業者中、現に帝劇に出演しつつあるは十九名にして、他は廃業者若しくは他座に転じたるものなり。

案じるに吾女優界は未だ過渡時代に属し、かのエレン・テリーの如き、サラ・ベルナルルの如き、エレオノラ・ドゥーゼの如き、若しくはモウド・アダムスの如き一代の名優を出して、劇壇を風靡する事難しといえども、そもそも吾国劇が出雲の阿国なる一女性によって創始せられ、爾来幾百年の繁栄を持続し来りしは、つとに諸賢の知る所なるべし。ただ吾邦における女優の発達は、徳川幕府の風俗取締政策によって阻止せられ、ここに一頓挫を来たせり。かくて今日の女優はかえって教えを男優に乞うに至れるは、やむを得ざる理数ならんや。然れども言うを休めよ、女優は男優を凌ぐ能わず、と。吾国劇の揺籃を揺り動かせるものは女優にあらずや。要は研究努力の如何にあり。彼等にして他日若し出雲阿国が一世を風靡したるに倣うを得ば、ひとり彼等の為のみならず、演劇界全体の為に慶すべきの事たり。いささか付言して女優諸嬢の奮起を

要望す。①

貧しい母子家庭で育った山本安英(山本千代)は、内職に追われる母を幼いときから気遣い、やがて東京の伯父母に預けられて女学校に通った。医家である伯父は謹厳であったが、伯母の好意で踊りや長唄を稽古し、月刊『演芸画報』の耽読を楽しむにする。新聞広告で知った市川左団次の俳優養成所に応募し、小山内薫の面接を受けた。大地震の二年前、大正十二年暮に彼女は、小山内の戯曲『第一の世界』に抜擢され、帝国劇場において初舞台を踏む。この師走興行には土方与志が演出に加わり、市川左団次や市川猿之助らの共演で好評を博した。②

帝劇初舞台まで (山本安英『新版 歩いてきた道』)

とりとめのない思い出は、もう私が小学校に通い始める頃、例の祖父はすでにいず、母と三人の弟と、やはり横浜の一隅に貧しい暮しの日々を送っている頃からはつきりとして来ます。共に寝起きする父というものが私にはありませんでした。父は時々気弱そうな美しい面だちに眼鏡をかけ、長髪に琴の糸で織った被布で私の家へ現れ、おみやげの牛肉を自分で料理して私たちに食べさせては、すぐまたどこかへ行ってしまう

① 杉浦善三著『帝劇十年史』玄文社、一九二〇年。一一九―一二〇、一二三―一二三頁。

〔参照〕「帝国劇場付属技芸学校」『渋沢栄一伝記資料』第四七巻、四一五―四二三頁。

② 大山功著『近代日本戯曲史』近代戯曲史刊行会、一九六九年。第二巻(大正編)五五二―五五五頁。

うだけの人でした。谷文晁の流れを汲む絵師で、それから茶の湯や生花を教えていたというこの父が、母に對して使う「あなた」とか「そうです」とか、時には軽い調子ながら「ございます」というような言葉づかいを、子供心にも言葉がきれいというよりも何か遠慮勝ちなものに私が感じるのです。

どうして別居しなければならなかったか、その複雑な入りわけを、いまだ私は母に聞くこともできずにいるのですが、父の方には私たちの生活を助けるだけのゆとりが全く無かったらしく、私の覚えている限り、母はいつも朝から晩まで四人の幼い子供のために、心臓の悪いからだを働きづめに働いていました。・・・ただ一つにすがりついていた「職業」というのは、父の紹介だったのでしよう、「はま」のえはがき屋で売っている外人向けの写真やガラス絵に彩色をする下請けの仕事でした。・・・それを私が幼いなりになんとか手伝いをすると思って手を出すと、母はいつも厳しく私を叱りました。貧しくとも子供だけは卑屈にさせたくないというその母の氣もちを察することができたのは、もちろんずっと後のことでしたが、その頃は叱られるのがわけもなく淋しくて、やっと願って私と一番上の弟とに許されたただ一つの仕事は、えのぐを洗って色のついたどんぶりの水を、日に何度か取りかえる仕事でした。・・・

小学校もだんだん上級になって来ると、母も少しずつ私に仕事をさせてくれるようになっていました。引っこみ思案のくせに負けん氣だった私は、出来上った品ものをお店に届ける役を引きうけて、ふろしきを抱えては油の音のじゅうじゅうしている南京街を抜けてお店へ通いました。夕方などお腹をすかして、せまい南京街の裏通りのあちこちから流れて来る油の匂い、肉の匂いの中を、子供ながらもわびしい氣持で歩いたものでした。・・・

芝居も幼い頃祖父や「ばあ」につれて行ってもらった以外は殆んど記憶がなく、ただうちの患者待合室におくため毎月とっていた『演芸画報』は、私の待ちきれない楽しみで、ずいぶんくりかえしよみふけたものでした。新しい劇というものは、まだ社会的にははっきりした地歩を持っていなかった時代ですし、思想的にも社会的にもものを見る見方が多くの人々の口の上ようになったのはそのしばらく後のことで、ですからこの頃私があこがれていた芝居の世界というものは、ただ漠然と「芝居の世界」として私の頭の中に画かれていたものにすぎませんでした。それともう一つは、前に書いたようにやはり私も何か職業をもって働きたいという氣もちを持っていました。そのときの私自身の境遇は、そういうことを必ずしも必要としていなかったわけですが、横浜でいまでも二人の小さい弟を抱えて細々暮らしている実母の事を考えると、たまたない氣もちだったのです。私は毎朝あけ方にそと家を抜け出して、赤坂の円通寺までお百度をふみに通いました。今考えると少々恥かしい氣もちもありますが、ただただ何とかして自分の念願を通したいという一途なもので、別に何かを信仰するという氣持ではむしろなかったのですが、それは自分でもかわいらしいと思う程ひた向きの氣もちで、その折円通寺の尼さんから頂いたガラスの数珠を今でも大切に持っています。

何かの話にあるように、二一日目の満願の日、玄關を出ようとするとたん、投げ込まれた新聞に私は、市川左団次さんが松竹をバックにして、現代劇女優養成所の生徒を募集する、という記事を発見しました。私は養母に無理をたのんで、父に内密でこの試験を受けたのです。

新富座の芝居茶屋（猿屋）の二階は、応募者で一ぱいになっていました。母親について行ってもらったのは私だけだったので、少々気まりの悪い思いもしましたが、この時の試験場で初めて小山内薫先生にお会いしたのです。そしていまだによく理由の判らないのですが、その中から選ばれた五名の一人に私は入る事ができました。・・・当時二四歳だった土方与志先生も、この養成所に関係されていて、実技を教えて下さい

ました。

初舞台は一九二一年十二月、帝劇で小山内先生作の『第一の世界』で、演出は―その頃は演出とよばずに舞台監督と言っていました―小山内、土方与志の共同になるものでした。当時まだ猿之助、長十郎さん方も一所だった左団次一座に、師走興行なので中車、小団次、松助、宗之助、寿三郎さん達も加わった大一座で、出しものは『増補信長記』『第一の世界』『奥州安達原』『鳥辺山心中』『拾遺太閤記』の順で五本立てでした。私は左団次さんの娘役で台詞も沢山あり、先生方の御苦労は大へんだったろうと、今になってよく判る気がします。下廻りの役者さんから「あたしなど永年芝居をやっているけど、まだろくに舞台で旦那（左団次さんのこと）と口をきいた事がない、そんな役をふられたら、あしたしんでもいい」などとうらやましがられたものでしたが、左団次、松薦さんを始め松助さんなど一座の方々は、本当によく面倒をみて下さいました。階級制度のきびしい歌舞伎の世界には珍しいことで、ここにもやはり一座の方々が、新しい芝居を開拓してゆこうとされた熱意がうかがわれる気がします。

この養成所はこの公演をやっただけで、どういう事情からか翌年の春までで終わってしまいました。それで私はまた家庭へかえることになり、稽古ごとをつづけながら、時々小山内先生のお宅などにもうかがいつつ、またその間にはライオン児童齒科医院に勤めたりしましたが、そこに起ったのがあの関東大震災だったのです。^①

① 山本安英著『新版 歩いてきた道』未来社、一九八七年。八一〇、一五一―一八頁。

関東大震災を契機に人生の劇的転換に向うのは、のちの国民的女優東山千栄子（渡辺せん）である。彼女の祖先は下総佐倉藩の家老であって、父渡辺暢は高等法院院長を務め、貴族院議員に勅選された。兄弟姉妹の多い東山は、小学三年のとき後継ぎのない叔父寺尾亨のもとへ養女として引き取られる。そこでは社交界に出るべく早くから育てられ、華族女学校に入学するとともに、雙葉学園でフランス語をも学んだ。法学博士の養父寺尾は謹厳であって、花嫁となるべき娘に小説を読むことも、芝居を観ることも禁じたとされる。男女交際についても厳しく、花婿の候補者を養父母が選び、彼女は十八歳のとき、原合名会社モスクワ支店長の河野通久郎と結婚した。一時帰国した通久郎と京都での新婚旅行を済ませた後、明治四二年ウラジオストックを経て、シベリア鉄道で着任地へ到着する。折しもモスクワは帝政ロシアの末期、ロシア革命の前夜にあった。彼女の自伝には夫河野の演劇に対する深い理解やロシア革命による日本への退去も述べられる。^①

モスクワでの生活と観劇（東山千栄子著『私の歩んだ人生』）

モスクワには主人がアパートを用意してくれました。五部屋ぐらいあり、六十歳になるフランスとポーランドの混血の家政婦のおばあさんと、若いロシア人の女中がおりました。おばあさんは主人から私を紹介されると、両手で私を抱き、両ほおとくちびると、三つキスしました。はじめての経験なので、私はビックリ

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』産業能率短期大学出版部、一九七七年。四一五、九一―一〇、一七―二〇頁。

してしまいました。

こうしてモスクワでの私の生活ははじまり、八年間をここで暮らすことになったのでございます。そのころのモスクワはやつと数ヵ月まえに日本総領事館が設けられたばかりで、日本人はその方たちを含めても、八人ぐらいいしかおりませんでした。女性はそれから三年あとまで私ひとりでした。・・・

主人は文学や音楽を愛好しておりましたので、私に小説を読んで人生を知ること教え、またバレエやオペラやオペレッタに私を連れて行ってくれました。そのころにロシアは、帝政時代の爛熟期で、ましてモスクワは芸術の中心地でしたから、私は芸術に対する目をしだいに開かれて行きました。ポリショイ劇場ではじめて『白鳥の湖』を見たときの驚きと喜びは、いまでもわすれることができません。舞台の広さ、百人以上の踊り子たち、舞台装置のすばらしさ、音楽のうつくしき明治の末期のころ、しかもお芝居やバレエなどをまったく知らない私だったのですから、私の驚きを想像していただけるでしょう。・・・

モスクワではじめて見たお芝居は『桜の園』でした。その夜は主人が旅行者のご婦人をご案内し、私もはじめて芸術座にまいりました。私はこの高名なお芝居に対して何の予備知識も持っておりませんでしたし、同行の方からそのころ日本で出版されていた瀬沼夏葉女史の翻訳本をみせられたのも、劇場へ行ってからのことで、それも幕間にただチラチラとページをめくったくらいだったのです。

しかしそういう私が、その『桜の園』にすっかり魅了されてしまったのです。脚本が傑出していううえに、モスクワ芸術座の創立者のひとりであるコンスタンチン・スタニスラフスキーの演出でありますし、その演出者自身が兄ガーエフの役で出演、作者チェーホフの未亡人オリガ・クニツペルが女主人公のラネーフスカヤ夫人に扮していたのですから、私ならずともそのすばらしい舞台から深い感銘を受けずにいられなかった

ことでしょう。

このとき私は、将来自分が俳優になるだろうとか、『桜の園』をやるだろうとかは夢想さえしていなかったのですが、それがこんなにひきつけられたというのは、あとになって考えてみると、後年私が俳優になる動機がこのときあったような気がしますし、しかもその私が、やがてラネーフスカヤ夫人の役を三百回前後も演ずるようになったことの、いわば因縁のようにさえ思われます。・・・

のちの築地小劇場の創立者のお一人、小山内薫先生にはじめてお目にかかったのは大正元年でした。先生はモスクワ芸術座見学のためにおいでになり、それからドイツ、イギリス、フランスとお回りになって、シーズン・オフに再びモスクワに戻られ、しばらく滞在なさいましたが、このときは私の家でお宿をいたしました。先生と私の主人とは、以前に日本でお知り合いになっていたのです。

モスクワ芸術座では先生はちょうど画家が名画を模写するような敬虔な態度で、スタニスラフスキーの演出を克明にノートなさいました。先生はモスクワ芸術座で、まえにご自身が先代市川左團次さんたちと自由劇場で上演なさったことのあるゴースリキの『夜の宿』をはじめとして、チェーホフの『桜の園』『三人姉妹』『伯父ワニャ』などをごらんになりましたが、それらについてのノートが、のちに築地小劇場で生かされたのです。

しかし、ここに書いたすべての演目に、やがて私が出演することになるなどとは、よもや先生はお考えにならなかったでしょう。当時の私はまったく支店長夫人であり、人妻以外のなものでもなかったのですから。また小山内先生はスタニスラフスキーの家庭に招かれ、一座に俳優さんたちと親しく遊んだりなさっ

たことを、楽しそうに話していらっしやいました。①

ロシア革命とモスクワからの退去（東山千栄子著『新劇女優』）

ひとつ主人に最も感謝しなければならないことがあります。それは窮屈な生立ちをしたために全く閉じられてしまっていた私の眼を、文学、音楽、演劇など、あらゆる芸術の世界へ開けてくれたことで、私の退屈であった人生は、どうやらそこから息づきはじめました。・・・河野はその文学好きのまま法科を卒業して海外貿易に入りましたが、これは当時の世界の経済事情に感ずると共に、困難であった生立ちの経験からも、経済力の確立が第一、何ごともその上で考えたものでございましょう。原輸出商会に入って直きにリヨン支店詰めとなり、ずっと日本を離れて暮しました。それで日本の文学の動きが次第にわかりにくくなったのでしょうか、その代り小説類の原書の入手は思うままでしたし、音楽にしても演劇にしても、日本では思いも及ぶ本舞台のものに接し、初めは手探りから次第に自分一個の鑑賞力を得て、殊にモスクワにいつてからは、丁度爛熟期の露西亞芸術に心ゆくまで親しみました。・・・

やがてこの重苦しいまでの芸術的雰囲気にあったモスクワが、あの歴史上永遠に記録すべき革命の一撃によって破壊される時が来ました。私共はその革命前に何も知らず、暫くの休暇をいただいて日本へ株立ちました。そうして東京に帰っていて現場に居合わさなかったのは幸か不幸かわかりませんが、私共の住居は丁

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』二二―二三、二六―二八頁。

度クレムリン宮殿と士官学校の間の処にございました。東京にいて号外で革命を知り、次の報道を待っても、今のようにラジオなどで迅速にわかる時代ではありません。重大な時に店を留守にしていたことですから、主人の心痛も一通りでなかった次第です。幸いに店の人達も無事に脱出して帰り、その話で、瞬間に打込まれた銃火に焼けた店や住居の様子もわかりましたが、その人達は言いました。「支店長夫妻がいなかったのは、幸いだった。もしあの場所にいたならば生命の危険はもとより、何かを取出そうとして火の中に飛込んだかも知れない。」そういわれて私共も黙する外ありませんでした。

勿論家庭のことで見ても、主人が独身の時代の七年に、私が行ってからの八年を加えて、十五年の間に自然と出来ていた物一切、モスコーにあるのが私共の全部でしたから、故国の空に袂着の着のみ着のま、これで振出しの無一物に戻ったという有様でした。間もなく領事館の引き上げとなり、主人が十五年苦心のあとも全く水泡に帰しました。主人の落胆するのも道理、実に主人のモスコーにおける信用は、もう充分にその後の仕事の堅実な成功を保証してあまりあるものであったのです。そして主人の文学的氣質が何処よりもよく合う露西亞であったのです。①

十五歳で築地小劇場の舞台、『青い鳥』の主役に起用される及川道子は、敬虔で清貧な両親に育てられた。勝気で幼時から歌や芝居を好んだが、病弱な体質で小学校への入学も一年遅れる。青山でささやかな喫茶店、パー

① 東山千栄子著『新劇女優』学風書院、一九五八年。四七―四八、五〇―五一頁。

ラー・オアシスを営む一家は、大地震の一カ月前道子の療養を兼ねて、避暑地への出店を引き受け、館山湾沿岸へしばらく移転していた。後年映画女優としても注目されつつ、二七歳で夭折した彼女の自叙伝を繙いてみる。

房総海岸 大正十二年夏（及川道子著『いばらの道』）

楽しい時、苦しい時、また喜びの時、悲しみの時、先ず父の口をついて出るものは讃美歌の一節でした。思えば父のこの讃美歌によって、励まされ、慰められたことの何と多かったことか！過去二十幾年の私のいばらの道で、唯一つの光明はこの父の讃美歌の他ありませんでした・・・

父が讃美歌を連想させるように、母と云えば、私は童謡を思い出します。その最初の記憶は何でも私の四つか五つの頃だったと思います。その頃私はリンパ腺を腫らして、病院へレントゲンをかけに通っていました。それも遠い冬の寒い道を、弟をおんぶした母に手をひかれて、電車にも乗らず、とぼとぼ歩いたものでした・・・そんなとき母いつも寝台の側で『ハトポッポ』や『トンボトンボシヲカラトンボ』等の童謡をうたって聞かせて、私の機嫌をとってくれました。それから学校に上りようになってからも、学校で教わるどの唱歌も、母はよく知っていて、家でいろいろ教えられました・・・

十二、三になってから、お友達と遊ぶにもーその頃は唱歌会やお芝居ごっこが好きで、よく遊んだのですがーいつも自分が先生（所謂舞台監督）になって、自分よりも大きなお友達を犬にしたり、猿にしたり、お百姓さんにしたりして、自分の思う通りにして遊びました・・・

体の弱い私は普通の人と同じに入学が出来ずに、九歳の時に始めて学校へ行きましたが、学校へ通うよう

になってからも、始終病氣勝ちで、五年生になった頃には、肋膜炎が悪いと医師から注意を受けました。

医師から肋膜炎を受けたその年の夏に、私たち一家は房州の北條へ行くことになったのです。それは避暑などという贅沢なものではありません。ちょうどオアシス・パラードと取引関係のあるカルピス会社で、北條の海岸へテント張りの売店を出すことになったので、それを引き受けて、言わば出稼ぎに行ったようなわけです。けれども私の両親が、進んでこの売店を引き受けたのは、たとえ暫くの間でも海岸で暮したならば、私の病氣のためにどれだけの効果があるかもしれないーという尊い親心からであつたでしょう。

オアシス・パラードを休業にして、北條へ行った私たちは、諏訪森の下にある新築したばかりの家を借りて、そこを住居にいたしました。諏訪森の下から海岸までは、いくらか道程がありません。私たちは毎日海岸にあるテント張りの売店に向いて働きました。私を真実の妹のように可愛がっていつも励まし導いてくださった佐々木さんが、一緒に北條へ来ておられたので、その佐々木さんと父が支配人兼コックさん、母が後見人で、私と強子とがお給仕さんです。

高等師範や早稲田大学の水泳部の方や、避暑に来ておられる人々などで、海岸はいつもお祭のようになりぎやかでした。私たちの店も大繁昌の日が続きました。殊に夕方になると、きまったように高等師範の方々が大勢集まって来られて、丁度天幕の中は何かの倶楽部のようでした。私と強子とはよく『坊やのお裏の柿の木に』や『踊れ踊れ、風吹くまに』等、その頃流行った童謡をうたいながら踊って見せたものでした。するとこんどは、学生さん達が私達の知らない歌をうたって、教えて下さったり、面白い童話を聞かせて下さったりしました。そして、お店をしまった後は、帰途によく海岸を散歩しました。空には星が降るようにキラキラと美しく輝き、海ではそれと美を競うかのように夜光虫が綺麗に光っていました・・・

こうした楽しい日々を送っているうちに、私もいくらか健康を回復して、顔色なども目立って丈夫そうになってまいりました。けれども、楽しい時が経っていくのはとりわけ早いもので、まもなく八月も終ろうとする頃には、水泳部の方や避暑客などもだんだん引き上げていく方が多くなって、一組減り二組経るというようにして、今まで賑かであっただけに、急に寂しさが海岸を襲って参りました。

夜中にふと目をさまして、静かな波の音に混って聞えて来る、近くの畑のトウキビの葉擦れを耳にした時など、もう秋が身近に迫っているのが、しみじみ感じられ、そして間もなく東京へ戻らねばならないことを、今更のように考えさせられるのでした。①

明治女学校で星野天知や島崎藤村の教えを受けた相馬黒光（星良）は、夫愛蔵とともに本郷の東大正門前でさやかなパン屋を開業し、やがて顧客の漸増で新宿に支店を設ける。新宿では隣家をアトリエに改造して、同郷の荻原碌山など画家の便宜に供し、インド独立の志士チャンドラ・ボースや盲目のロシア詩人ヴァシリ・エロシェンコを庇護した。こうして相馬夫人黒光の主宰による〈中村屋サロン〉が形成され、新劇脚本に依拠する朗読会から〈土壌劇場〉での公演へと進展する。

相馬黒光「土蔵劇場」『黙移』（『相馬愛蔵・黒光著作集』）

① 及川道子著『いばらの道』紀元書房、一九三五年。一六、一九二〇、三四、四三一五〇頁。

エロシェンコが私の家におります頃、私は盲目の彼のためにいろいろな文学的作品を読んできかせました。エロシェンコはそれを非常によろこびましたが、私はかねて脚本朗読に興味をもち、脚本は黙読するものではなく、朗読すべきもの、各登場人物の台詞をそれぞれ読みわけてこそ面白くもあり意味もあると考えておりました。そしてエロシェンコに読んできかせ、彼がそれをよろこんだのが動機となりまして、秋田雨雀氏を中心として、神近市子さん、上村露子さん、佐藤誠也、佐々木孝丸、早稲田出身の能島、法政の佐賀その他の諸氏が集まり、中村屋の表二階（いま喫茶部になっているところ）を開放して脚本朗読会をはじめました。花柳はるみのようなこの道の本職も、ときどきは交って指導してくれるというふうで、脚本は中村吉蔵氏、仲本貞一氏、川村花菱氏、秋田雨雀氏の作品がおもなもので、翻訳劇ではストリンドベルグの『ペリカン』、グヌンチオの『ジョコンダ』、ユーゴーの『鐘楼守』、ギリシャ悲劇のアンチゴーネ、ロシアものでチエホフの作などが、今でもはっきり記憶に残っております・・・

そのうちに一同もはや朗読では満足できなくなり、ぜひ試演をしてみたいと熱心な要求が出て、とうとう私共の新築したばかりの大広間を提供し、めいめいが俳優となって秋田さんの脚本をやってみました。何という題であったか忘れましたが、何でも薄暗い獄舎の中に囚人が幾人も座っているところでした。衣装や小道具はみな有り合わせのもので、巡査の制服制帽だけは本物をこっそり借りてきました。サーベルのカチャカチャするのにも実感があらわれ、初演にしては成功でした・・・

この試演で会員はいやが上にも自信を高め、とうとう主人を説き落して、私どもが当時手に入れたばかりの麴町平河町の住居、といってもまだ移転していませんでしたので、それを利用し、三間に五間の二階建ての純日本風式の土蔵を舞台に改造してもらいました。同時にこれまでの朗読会をあらため、先駆座の名乗り

をあげ、さらに川添利基氏や玄人の河原侃二氏などが加入して指導に当り、また上演することになりました。

その最初に上演されたのは秋田氏作『手投弾』と、ストリンドベルグ作の『火あそび』。ここで困りましたのは、男子の方々の意気盛んなのに反し、女子の方はほとんど影を没してしまって、女優になり手がないことでした。そこで私は千香子を説得して出場させ、なお千香子の級友のうちでまだ家庭に残っていたお嬢さん二人を勧誘し、そのお母様方の諒解を願って拝借することにいたしました。それに誰かの紹介で義太夫語りとして高座にも出た経験のある婦人の加わり、辛うじて入用だけの女優が揃いました。そして出て頂いたお嬢さん方は、当時早稲田大学生であった長男安雄がお家まで送りとどけ、あるいは予めおことわるしておいて宅にお泊めしたり、とにかく私が心を配りまして、二ヶ月くらいも稽古をいたしました。いよいよ四月二一、二二日に二日間開演することを発表し、会員のはげしい稽古は涙ぐましいばかりでした。

こういうふうには土蔵を改造した舞台であるとともに、また土蔵に立て籠っての研究で、誰いうともなく土蔵劇場の名が生まれたのでございます。土蔵の二階を舞台に改造するには、私どもの経済としてかなりの犠牲を払いました。芝居が終われば舞台は取りはずして押入にし、照明に用いた幾十の電球とスイッチは常にこの押入の中に入っていました。階段ふたつ、カーテンの仕掛け、見物席の設け、また母屋の各室は臨時女優の楽屋に、あるいは見物人の休憩所にあてるといふ次第でずいぶん熱中してやったものでございます。芝居が済み、掃除をして四月末日に私も家族ははじめてここに住居を移し、新宿の家はその家全体を店として使用することになったのでございます。

多くの思い出を籠めたこの土蔵劇場も、あの大正十二年九月一日の大震災で、使用に堪えないほど破壊されてしまいました。そればかりか一時は座員も互いに安否を知る由なく、十二年も過ぎて翌年の春ようやく

そちこちから出て来て顔が合い、玄閑脇の狭い応接室で再び朗読会をはじめました。けれども土蔵は容易に修繕が出来ず、芝居はやれなくなりました。①

土蔵劇場における先駆座の公演は大正十二年四月二一日および二二日に催され、それに先立って二十日には試演が行われた。客席がわずか五十であるため、観客は会員制と限定されるが、優先順十名の錚々たる名簿が次のように記録される。一番島崎藤村、二番有島武郎、三番長谷川如是閑、四番水谷竹紫、五番水谷八重子、六番藤森成吉、七番吉江喬松、八番大山郁夫、九番馬場孤蝶、十番石川三四郎。演出は川添利基、装置は柳瀬正夢が担当し、秋田雨雀の求めに応じて、島崎藤村と有島武郎が感想を述べたとされる。②

幸徳秋水ら社会主義者の演説に感銘をうけ、島村抱月からは創作の才能を認められた秋田雨雀は、吉井勇や谷崎潤一郎とともに新劇勃興を支援する作家群に加わった。封建主義を批判した彼の戯曲『第一の暁』は、明治四四年六月自由劇場の一環として有楽座にて上演される。雨雀が代表作『国境の夜』を発表したのは、わが国最初のメーデーが挙行され、神戸の川崎造船所で初めて労働者劇団が結成された大正九年である。やがて彼は〈中村屋サロン〉における朗読会に参与し、劇団先駆座を組織して土蔵劇場での上演を指導した。震災直前における彼

① 相馬黒光『黙移』（相馬愛蔵・黒光著作集）郷土出版、一九八一年。第三卷、二五一―二五五頁。

② 曾田秀彦著『民衆劇場―もう一つの大正デモクラシー』象山社、一九九五年。二七六―二八五頁。

白井吉見『安曇野』筑摩書房、一九七二年。第三部、四二二―四二三、四二九―四三三頁。

の日記には土蔵劇場の模様とともに、有島武郎の情死や大杉栄との会合も記述される。

秋田雨雀「土蔵劇場での公演と有島武郎の死」(『秋田雨雀日記』第一卷)

(大正十二年) 四月二十日 土曜劇場のことで警視庁と麴町警察へ行く。麴町警察のわからないのには弱った。・・・招待日は三十名ほど来客があった。『手投弾』は三場ともよくいった。娘になる瀬尾君がよかった。佐藤君は一箇所とちった。二場の舞台照明もよかった。有島武郎君がきてくれた。中村屋の娘さんのわがままには弱る。いつかわかるだろう。(招待日は成功した)

四月二一日 麴町署で試演の許可をえた。先駆座という灯明台をつけたらいけないといった。役人の頭といるものは妙に働くものだ。臨検にゆくと云っていた。・・・七時過ぎに開幕。きょう『手投弾』はすてきによくいった。いままでのうちで一番いい。『火あそび』も悪くない。ひげが落ちたので心配した。全体としてきょう一番よかった。黒光女史に手紙を出した。中村吉蔵君がきてくれた。夜柴原君と会食。(先駆座第一日)

四月二二日 七時半開演。『手投弾』の第二場じゃたいへんよくできた。金子君が喜んでくれた。三場の光線もよかった。梅田親子、中市君。矢部、青山、水谷八重ちゃん、運天、山田たづ子の諸君がきた。紅蓮さん、中市君と三人でおでんやで会食。(先駆座第二日。愉快な日)

五月二六日 身体がいくらか元気づいてきた。夜中村屋で先駆座の朗読があった。イブセンの『海の夫人』をやった。中村屋の娘はいくらか折れてきていた。・・・

五月二七日 墓参。鳴海、仁尾、中市の三君とすすらんにより、森飛雪君を訪い、名物屋で有島、前田河、佐藤、橋浦の諸君と会合。あとで有島武郎君を送っていつて、一時間ばかりいた。蓄音機をかけてくれた。ブロンズの手。帰路おでんやによった。(有島武郎君との最後の会見)

七月七日 身体はまったくいいようだ。午後七時から中村屋の朗読会へゆく。運天姉妹もきた。『アスパラガス』つと『犬』に決定した。夜二時『日々新聞』記者の自動車がぼくの家から帰るのといっしょになった。その記者の言葉によって、有島武郎君が信州で、ある女性と情死を遂げたということを知った。女は誰だろう？佐藤、佐々木二君と女のことを想像しあった。桜井夫人ではないか？(有島武郎君死す。)

七月八日 昨夜眠れなかった。朝『読売』の清水君がきた。明日の文芸欄に感想を話した。氏の潔癖性とニヒリスティックな傾向について。有島家を訪い、名刺をさしだした。弔問客が多い。女の名と素性について。遺書公開。・・・有島君の対称は例の美人記者波多野あき子だ。

七月九日 有島武郎君告別式。雨のなかを新島英治がきょう葬式があるから、といって迎えにきたので、二人で有島家へゆく。玄関から布がひきつめて、祭壇のところまでいけるようにして、祭壇には故人の写真が飾ってあった。喪服をきた老母と三人の子供が眼についた。守田勘弥といっしょに焼香した。生馬君がぼくの手を握って、悲痛な顔をしていた。二階で足助君に遺書をみせてもらった。鉛筆で、こころもち乱れた書きかたをしている。涙がでる。午後二時自動車で青山へゆき、埋葬した。

七月二八日 暑い。散歩。墓地で日光浴をやった。夜パウリスタで大杉栄君の歓迎会があった。大杉君は若くなったような気がする。野枝君は洋装していたが、お腹が大きいのだそうだ。利部をスパイだといって、

ある男がなぐりかかったので、みんなで止めた。カフェ新橋とロシアによった。①

① 『秋田雨雀日記』 未来社、一九六九年。第一巻、三一―三二、三一七―三一八、三二〇頁。

〔物語〕 関東大震災からの復興と築地小劇場の興起―小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子―

第三節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その一

関東大震災は首都の興行施設を壊滅させ、新劇に係わる人々やその留守宅をも直撃した。新劇勃興の功労者市川左団次も、公演を前にして大地震に襲われ、自宅から上野、滝野川、東中野へと避難する。

大地震の衝撃と避難（市川左団次著『左団次芸談』）

（大正）十二年は六月の明治座を了えてから、九月は歌舞伎座に出演することとなった。

その九月一日である。午後一時から岡本綺堂氏作『鬼薙清吉』の本読があるので、まだ家にいると午前十一時五八分、関東一帯を襲ったあの大地震である。―土蔵の瓦が一、二枚落ちて、塀が少し倒れたきりで、大したこともないので、落ちついていると、そのうち下町に異様な光を発する火の手が見えた。（猫いらず）の本舗だと云う。間も無く猿樂町の方から火が上ってきたと云う騒ぎ。大丈夫だと思っていたものの、女達がいいたので、とにかく立退くようにと云い渡して、弟子達に荷物を頼み、妻の姉の上野の家に引上げた。私の家の辺は被害が殆ど無かったので、近所の人はまだ立退く気配も無く、私の家の者が一番早かったようである。

すると二日の晩になって、上野の山に火が廻ってきたというので、山の上は大騒乱を極めた。これは避難

の人で山が一杯なので、後からきた人達が仕方なく、日暮里の方に続々と行くのを、山から逃げて行くものと誤っての混乱と後になって知れたが、私達も線路を伝って、滝野川の知人の家に移った。するとまた、朝鮮人云々の噂が近隣を騒したので、その知人の妹の家が東中野にあって、田舎の物持の娘でそこならば米も豊富に得られると云うので、自動車を一台見つけて、東中野の某家に落着いた。ところが先方は夫婦暮し、こちらは同勢七、八人で、なかなか米が足りないらしいのが解ってきて、気の毒になったので、私の車夫に米を探させて買ってこさせなどしているうちに、牛乳配達が中野野方村に家を見つけてきてくれたので、七日にそこへ引移った。まだ建てたばかりの家で、障子も張ってなかったが、結局その方が涼しいと云って、一カ月もそこに起き伏しをしていた。

東京で芝居を演ることは、まだ一年位は覚つかないと思っていたので、当分はそこに籠るつもりでいたところへ、大阪から話があったが、それは断ると今度はたしか十月の二日に京都から話があったので、十一月には京都で演らうということになった。

ちょうど小山内君は大阪に引移るというので、一緒に行くことにして、東海道線はまだ復旧されていなかったもので、上野から十月二一日に発った。汽車の中は大混雑で一睡も出来ず、おまけに親不知のあたりで、夜二時頃に半時間近くも停車してしまったので、小山内君と車外に出て、名月の荒磯を歩きながら、灰燼と化した東京のことを語りあった。・・・

震災では貴重な書籍や書画骨董を灰にしてしまったが、立退く時には自分のものだけが焼けるので、また直ぐ集るとい気がしていた。岡本綺堂氏も震災後一時麻布に住まわれていたが、その話をするときやはり同じような気持であったと語られた。中野に落着いてからは、ことによると蔵だけは残っていて、その中のも

のは無事かも知れぬという気もしていたが、十日程経って行ってみると、やはり跡形もなかった。①

帝国劇場における自由劇場の公演が杜絶したあとも、市川左団次は活躍を続け、大正九年には新富座で岡鬼太郎作『今様薩摩歌』を、また歌舞伎座で中村吉蔵作『井伊大老の死』に出演した。さらに大地震の前年京都南座での公演に先立って、十月一日洛東の知恩院山門前で野外劇、松居松葉作『織田信長』が演じられた。松竹大谷社長の後援により左団次が主役を演じ、祇園花街の少女五十余名が稚児姿で舞い、小山内薫も演出に参加した。無料で提供されたこの野外劇には観衆十万人が押し寄せたとされる。②

大地震の翌年六月に刊行された改造社編『大正大震災誌』には、演劇の分野に関して河竹繁俊の論稿「歌舞伎劇に及ぼせる影響」とともに、戯曲家中村吉蔵の執筆「破壊前後の新劇」が収録される。この寄稿において中村は劇壇震災の概要を誌しつつ、営利主義を排除した新劇復興の理念を提起している。

中村吉蔵「破壊前後の新劇」(改造社『大正大震災誌』)

大正の大震災は帝都のあらゆる文化機関を片っ端から破壊し去ったが、その中でも殆んど字義通り破壊し尽されたのは劇場である。劇場が直に演劇の成立に必要な欠くべからざる条件であり、機関である以上は、そ

① 市川左団次著『左団次芸談』一五六―一五九頁。

② 市川左団次著『左団次芸談』一五二―一五六頁。

れが破壊し尽されたといふ事は、演劇が一時的に滅亡した事になる。・・・さし当たり、震災前に漸く勃興して来て我が国の在来の歌舞伎劇に挑戦を試みつつあった新劇の過程と、今回の破壊に基づくその当面の影響とを一瞥しよう。

元来新劇とは旧劇、即ち徳川封建期の遺産たる在来の歌舞伎劇に対して、明治大正以後の新時代を精神を基調とし、西欧の近代劇の感化影響をその内容の上にも、又その形式の上にも著しく反応した新作戯曲の演出を意味するものであるのは云うまでもないが、西欧の近代劇の第一期が、主として自然主義乃至写実主義派の心理的解剖を重んずる傾向のものであって、従って小劇場形式の芸術であった如く、我国に起った新劇運動も亦多くはさうした趨勢を追うて、小劇場形式の芸術を打建てるための努力が続けられて行つた。ところが在来の歌舞伎劇の大規模な芸術様式に適合すべく作られた所謂大劇場の、あの龐大な建築はこの種の新劇にあまり適合しているとは云へない。唯洋風建築のプロセニウム舞台を持った帝国劇場と、さらに西洋の中小劇場の建築様式をそのまま移植して来た有楽座とだけが、新劇の演出に最も適合していた。殊に有楽座が独特の壇場だったと云つてもよく、事実に於ても新劇の発祥地となつた記録を作っている。

この有楽座の建築せられたのは明治四一年十二月で、在来の興行師の企業欲から離れて、華族富豪の有志者が新しい演芸を起さうとする多少の理想的計画のもとに成立つたものである。この劇場に於て明治四二年十一月小山内薫と左団次の自由劇場が、森鷗外訳のイブセン劇『ボルクマン』を上演して、西洋近代劇を初めて我國の劇界に紹介し、従来の新劇のために第一の烽火を挙げたのは、当時の一センチションであつた。その後数回自由劇場はこの舞台を利用して数種の西洋近代劇を試演すると同時に、新進の劇作家、秋田雨雀、長田秀雄、吉井勇等の創作戯曲をも紹介した。・・・

有楽座に次いで、若しくは相並んで新劇の為に相当の功績を残したのは帝国劇場である。同座は明治四二年の創立でルネッサンスの建築様式に則り、白煉瓦の巨大な樓閣を外濠に近く聳立させて帝都の一大美観であつたが、プロセニウム舞台を持っていただけに、他の日本式大劇場の、舞台の間口のムヤミにだだ広いのとは異つてその間口八間、奥行九間、プロセニアムの高さ四間、定員千六百三人であつた。この舞台で文芸協会の『人形の家』が始めて公演せられ、松井須磨子が我が国最初の女優たる事を認められたのは明治四四年十一月である。・・・今回の大震災はそうした記念の舞台を焼尽したが、外郭はそのままに残つてゐて、近く再建される筈である。その意味では有楽座の喪失に比べれば、我々の遺憾の度は幸に少ないと云わねばならない。

又歌舞伎座は日本式大劇場の或意味で模範的のものであつたが、震災の二年前に失火して全焼した。一、二の例外を除いて新劇には殆んど縁がないが、大劇場形式の新劇發生の一基点と見る時には、大正九年五月坪内逍遙の新史劇『名残の星月夜』を上演し、次いで七月に自分の創作した『井伊大老の死』を上演しているのは記憶すべきものであらう。新築中に起つた震災の被害は比較的輕かつたようであるが、こんどのは舞台間口十六間の設計と聞いては、今後の大劇場形式新劇場が果たしてそれに適合する可能性を持ち得るのか否かは相当の疑問である。猶この他に明治座、本郷座、市村座に浅草の公園劇場、三国座等の中には新劇運動と因縁があるものもあり、またそれぞれに新劇が旧劇若しくは通俗劇と雜居して、そこに多少の分布地図を描いていたが、震災のために悉く灰燼に歸し去つた。これは一時的にも旧劇に対する大打撃であるが、同時に新劇に対しても亦相当の損害であるのは勿論である。・・・

我國に於ける新劇の第一期、即ち近代劇運動時代に於ては、ひたすら純芸術的な新劇の為に途を拓かん

とする熱意と期待とに燃えて、そこに全力的な戦いが戦われたのであるが、それが途中で所謂民衆化の傾向へ転回して行った為に、必然に商業主義化されて来て、やがて創作劇が普通の営利劇場へ迎えられて行くに都合の善い段取が付いたと同時に、創作劇そのものの半面には不純分子が鼠入する動機が醸されて、近代劇運動の当初の理想的な出発点とは距離があり過ぎるといふ批難が一部から加えられているが、それも強ち無稽の言として斥ける事はできない。・・・新劇がそうして普通興行に割込んで行った結果、帝劇や有楽座は暫く別として、日本式の大劇場の大舞台の上に、本来小劇場形式の新芸術が一時の間借り状態で、落着かない状態で雑居者の如く取扱われねばならなかったのは、敏感な鑑賞家の眼には一の醜態として映じたかも知れない。それだけならまだ宥されるもするが、他の全く芸術のテンペラメントの異つてある歌舞伎劇などに混入して演出される点では、折角の新劇をして寄席興行の余興扱いさせる遺憾がないとは云えなかった。その根源は即劇場の商業主義から来ていると云へば、それはたしかに誤りのない真理である。・・・

上演されつつあった新劇の内容、基調精神の問題に到つてはここで手輕に一掃的の論断は下されないが、その多くは自然主義乃至写実主義の範圍に止まり、若しくは一種の唯美主義に低廻していたと云つても大過はない。勿論近代劇運動の主潮の一はそこに關っているが、今全世界の実生活の地盤を震撼しつつある最も現実的なブルジョア対プロレタリアの抗争から捲起された思想感情の激しい渦巻、その渦巻のためにやがて崩壊して行くとする錯覚的現代文化の運命、原始的に更生せんとして苦悶しつつある人間の魂の呻めき―そうした世界大戦以後の煉獄に投ぜられた人間の実生活図は、我國の既出の創作劇にはまだよく現われていない。・・・

破壊し去られた劇場を出来るだけ原形のままに再建したい、即ち復旧したい、その外面も、その内容をそのまま破壊前の遺業の承継であらせ度いというのが、恐らく興行当事者たちの願望ではある。そしてそれは多少の歳月を経たら、或いは遂げられて行くであらう。しかし、在來の興行当事者たちの手に支配された営利主義の劇場、即ち資本主義の傀儡であつた演劇全体が、再び原形のままに復旧される事は、決して民衆の為に望ましい事ではない。又芸術の為に願わしい事ではない。破壊前に新劇が漸く發達期に向つたのは事實であるが、前已に述べた如くそれが到底奇形的な、變態的な傾向から離脱する事が出来なかつた主要な原因の大半は、資本主義の劇場組織の係縛から来ていることは明らかである。素より今回の破壊が資本主義そのものの破壊を意味しないで、却つてその回復の為に、より多く資本主義に依頼する一般形勢を助長するかも知れないし、少くとも劇場と資本主義との絶縁の如きはさし当り空想に過ぎないのは勿論であるが、一面においてその種の営利劇場以外に非営利的な、芸術劇場乃至民衆劇場が興起する好都合は正に到来したと云つて善い。破壊後の今日は正にバラック劇場の建設の許されてゐる時代である。破壊前に数百万の建築費設備費を要した為に、大資本を擁せなくては到底手の付けられなかつた新劇場の計画が今日ではその十分の一以下の費用で実行の可能性がある事になった。演劇をブルジョア階級の手から奪還して、一般民衆もものとするには、いまこそその時である。劇場を資本主義の係縛から解放して、芸術本来の面目を自由に發揮せしむる機会は、今日を措いて他にない。この使命のために起たうとする有志の公共団体乃至公共機関が、漸く活動を始めつつある形勢も一部には見えている。我々はその活動の現実化を希望するに止まらない。今こそそうした活動の起されるのが、当然であり過ぎると思つてゐる。

破壊前の舞台に演出されつつあった新劇の多くは、世界大戦以前の西洋近代劇の脈を追うたもので、大戦後期のものでない事は已に一言した。素より芸術は個性的のものであつて、十年、二十年の歳月の経過、

乃至時勢の変遷の為に動揺されるべきものではないというのは一面の真理たるを失はない。しかし、同時に卓越した個性の天才が生んだ芸術も、時間的過程が常にこれを古典化しつつある事も亦他面の真理である。世界大戦が人間の心理の上に、また社会の組織の上に一大激動を与え、一大覚醒を促した点ではまさに画時代的であった。今回の大震災は自然の革命であって、人為の革命ではないから、世界大戦に直面した西欧の民衆の受けた程の深遠な感銘を我国の民衆に与え得たとは云えないが、少くとも世界大戦後の西欧の民衆の動揺し混乱して、その渾沌の底から一縷の光明を望んである心理の一端に、触れて行く鍵は慥かに我々の手にも握られたと云って善い。世界の煉獄の苦は日本的にも体験されたに違いない。この体験事実が芸術殊に新劇の上に反映するのは当然期待されなければならない。・・・

破壊前の新劇の基調には、兎角ブルジョア趣味がこびり付いて離れなかった。少なくともブチ・ブルジョアの殻が破れなかった。今回の震災は帝都の多くの人々が、その実生活上に被っていたブルジョアの殻を一挙に破碎し去った。ブルジョアもプロレタリアも一時的に焦土の地平に立って、一時一挙に原始人化した。所謂文化の仮面が落ちて、荒削りの生きいきした人間に還元された。その間に一面相互扶助の神的な美しい天性が発揮されると同時に、他面同族相食む獸的な醜い本性も亦暴露された。一度は坩堝に投ぜられて人間の地金が露出したのである。この前代未聞の、若くは一生に空前の体験が芸術、殊に新劇の上に投影したら、少なくとも在来のブチ・ブルジョアの殻を破ったものが、発生して来なければならない。それは荒削りの野生に満ちた芸術か、若しくは人間愛憐のユーモア芸術か、或いはその他の一特色あるものか、何んにせよ、破壊前のものとは、その風格の相違した新劇が、この体験の中から生み出されて善い筈だと思ふ。

なお破壊前から常に求められていた規模の宏い一大悲壯劇が、大民衆を抱擁する新芸術として出現せなけ

ればならないのは勿論である。小劇場形式の新劇以外に大劇場形式の新劇が続々創作され、また演出される事が、必要であるのは云うまでもない。①

島根県で旅館の息子として生まれた中村吉蔵は、公証人の書生や為替貯金管理所の書記を勤めた。苦学しつつ彼は早くから数々の小説を雑誌に投稿し入選する。やがて上京して広津和郎のもとに寄寓し、早稲田大学に入学。その後欧米での留学と遍歴によって演劇への関心を深め、帰国後島村抱月の主宰する芸術座に参加する。大正三年から大正八年にかけて彼の戯曲、『飯』や『剃刀』が帝国劇場で松井須磨子を主役として公演された。大正九年歌舞伎座で上演された中村の脚本、市川左団次出演の『井伊大老の死』も評判になる。奇しくも大震災の前年彼は戯曲『地震』を発表し、尾上菊五郎一座によって市村座で初演されていた。②

大地震勃発のとき小山内薫は、家族とともに関西に滞在し、東京四谷の留守宅も被災を免れた。新劇再生の悲願をなお秘めて、ときを待つ小山内の心境を震災の惨禍は一層沈痛にした。演劇界の伝統と傾向に失望した小山内薫は、その後松竹キネマの研究所所長として招かれ、わが国初の劇映画『路上の靈魂』を軽井沢で撮影した。しかし、大正十二年の春すべての興行と劇団から離れ、書斎での演劇研究に専念していた。

① 中村吉蔵「破壊前後の新劇」(『大正大震災誌』改造社、一九二四年。)一七六一―一八三頁

② 大山功著『近代日本戯曲史』第二卷(大正編)四八〇―四八一、四八五―四九〇頁。

『新人物立志伝―苦学力行』大日本雄弁会、一九二二年。五四―六六頁。

大地震直後の苦衷（小山内薫「築地小劇場建設まで」）

私が昨年の三月、松竹と手を切った時―それは私が日本の営利的劇場の総てに対して望みを絶った時でした。私は再び日本に於ける営利的の劇場には如何なる關係に於いてもはいつて行くまいと決意しました。當時の私にとって「前途」はありませんでした。目の前は闇でした。私は唯書いて、僅に生活し、僅に自分を慰めました。

その内に私の思想の上に或黎明が来ました。それは独逸へ行っている土方が帰って来たら、二人で演劇学校を興すことでした。勿論この考えは余程前から私にありました。営利的劇場と全く絶縁するに及んで、もうこれより外に自分の行くべき路はないと思うようになったのです。

物質上の根柢があつたのでもありません。組織上の同志があつたのでもありません。私は唯ぼんやり―併し強い希望を持って―土方が帰って来たら、二人でそれを始めようと思つていたのです。そしてそれを楽しんでいました。その考えは誰にも知られずに私自身を慰め且つ励ましていました。

大地震が来ました―その時、私は家族を挙げて地方にいました―東京の殆んど総ての劇場は焼け亡びてしまいました。私の心の中で半年前に亡びてしまつていた総ての劇場は目に見ゆる形の上でも亡びてしまったのです。

併し総ての劇場が亡びると共に私自身の希望も亡びてしまひました。演劇学校の建設などはもう当分思ひもつかない事になってしまひました。少くとも十年のギャップが私の目の前に口を開いたのです。私にはも

う自分の生きてゐる間に自分の進まうとする道が一步でも歩けるか、それが疑わしくなつて来ました。第二の絶望が来たのです―しかもその絶望は私にとって最後の絶望でした。

私はその儘地方にいました。その儘東京へ帰りませんでした。私の友人は私が東京を見捨てたと言つて私を罵りました。だが私はその時東京を見捨てたではありません。私が若し東京を見捨てたとすれば、もう半年前に見捨てていたのです。私はもう半年前に東京の劇団を離れてゐました。東京の劇団はもう半年前に私を追ひ出していたのです。東京の劇団はもう私を必要としていなかったのです。もう私は何処にいいように好い体になつていたのです。

私は何を罵られても黙つてじつとしていました。実際それについて一言の弁明もしませんでした。一言一句も書きませんでした。そして死よりも暗い絶望を抱きながら、黙つて静に毀れた東京を見ていました。震災後の東京の劇壇―すべてが亡びすべてが新しく生まれて来なければならぬ劇団―そこから生まれて来たものは果してなんでしょう。

営利劇場の基礎もない競争の宣伝、劇場の全滅を好い事にして、そこそこ首をもたげた忙しげな新劇団、バラック俳優、バラック演技、バラック興行師、

私はいよいよ絶望しました。もうどうにも救いようがないと思ひました。ひねくれた自分の根性かも知れません。徒らな反抗的精神からかも知れません。私は唯読んで書こうと思ひました。書いて読もうと思ひました。如何に叛かれても憎む事の出来ない演劇を、せまい書斎の内に、それよりも狭い自分自身の頭脳の内

に作り上げようとなりました。①

小山内薫はひととき帰宅して、彼は東京の惨禍を見詰め、大阪への転居を決意する。次男宏の嫁小山内富子による評伝では、留守宅の無事と大阪での暮らしも語られる。

大阪への小山内転居（小山内富子『小山内薫―近代演劇を拓く』）

大震災のその夏、薫の三人の子供と登女子は、薫の大阪での仕事に便乗して夏季休暇の避暑地を神戸の六甲に選んでいた。四谷の留守宅には書生と女中と姉の礼子が残っていた。三男の喬は小学校の一年生で次男宏も、長男徹もまだ小学生であった。二期期は九月一日から始まる。東京へ帰る準備も整った前日の八月三十一日、三男の喬が突然腹痛を訴えたので、帰京は延期されることになった。ここへ東京周辺は地震で阿鼻叫喚の巷と化したのであった。「あるとき喬の腹痛という偶然がなかったら、私たちもどうなっていたかわかりません」と登女子は災難を免れたそのときの幸運をよく私との話題にした。・・・

薫は家族をそのまま大阪に残して、単身東京へ戻った。一般人の上京は制限されていた。薫は新聞関係の報道員の身分証明書を持参しての一時帰郷であった。

四谷南町の留守宅は崩壊からも火災からも免れ、書籍類も無事であったし、病弱な姉礼子をはじめ書生や

① 小山内薫「築地小劇場建設まで」（『築地小劇場』一九二四年、創刊号。五九―六一頁。）

女中も無事だったことを薫は何より喜んだ。東京周辺は一面の焼け野が原で、冷静さを失った巷には流言飛語が飛び交い、治安も悪く騒然としていた。薫は家族を大阪に足止めさせておき、これを機会にいよいよ書齋に籠る決意を固め、家族も大阪へ引越させることにしたのだった。

天王寺悲殿院町の家への引越し、そこはフラトン社中山社長の持ち家で、明治情緒の漂う大きな洋館だった。部屋数もたくさんあったので、小山内一家が広い二階に住み、階下には妹の岡田八千代と松竹の女優さん親子と、薫の仕事の助手をしていた若き日の川口松太郎が、一部屋ずつを占めて、四世帯が二か所の台所を使って暮らすことになった。①

土方与志の夫人梅子は大正初期の日銀総裁、三島弥太郎子爵の次女である。ヨーロッパに滞在する土方与志の留守宅は被災を免れるが、小石川林町の豪邸へは親族のみならず、近隣の住民百余名が避難した。のちに築地小劇場の運営にも尽力する梅子は、罹災者のため炊き出しや買いものに忙殺される。大地震から派生した危険、朝鮮人騒ぎや亀戸事件をも彼女は切実に感じた。

大地震の被災と救助（『土方梅子自伝』）

与志が発した翌年の秋に私は敬太を連れてフランスへ旅立つことになりました。母はまたあとから来る

① 小山内富子著『小山内薫―近代演劇を拓く』慶応大学出版部、二〇〇五年。一八三―一八五頁。

予定でした。九段の学校も夏休みまで仕事をやめ、船の切符も入手し、すべて準備を完了して九月十日の乗船を待つばかりになりました。しかし、突然この出発は中止せざるを得なくなりました。九月一日におこった関東大震災によって、東京一帯が大混乱に落ち入ったため渡欧どころではなくなったのです。

小石川の家は倒壊や火事の被害はありませんでしたが、その大きな地震は、ふるえ上がるようなこわさでした。家の中には、何時またゆりかえしが起って家がたおれるかもしれないので庭に難を避け、木と木の間に蚊帳を吊って、その中に入っていました。満二歳の誕生日を間近かにひかえた敬太も、無事でほっとしましたが、家の中にあるおもちゃを欲しがって泣くのには閉口しました。第一のゆれは正午頃でしたが、夕方になるとあちこちで火の手の上るなかを、姑の実家加藤家や、叔母の嫁ぎ先の吉川家（もと長州岩国藩主）の人たちが、高台にある私たちの家を頼って逃げて来ました。近所の方々も庭の広い私の家へ避難して来られたので、日頃は家族数の少い土方の家も、この時は百人以上もの人たちが埋まりました・・・

わが家では百人以上もの罹災者に、炊き出しをしなくてはなりません。主婦として私はその中止になって働きました。大急ぎで近所の米屋さんから俵のまま米をとりよせ、おにぎりを作るとともに、祖父母をはじめ、親戚の人たちのおかずも用意しなければなりません。人力車に乗って、本郷にあった当時としては珍しいカンヅメやハムなどを売っている食品店まで買い出しにでかけました。

しかし、その途中が大変でした。道路には焼け出された人たちがあふれ、人力車に乗っている私にかつてどなります。「ばかやろう!」「車に乗りやがってなんだい」「コンチクショオ!」着物着て、すましてやる、非常時だぞ!」

道端のあちこちの家もこわれたり、焼けくすぶったりしています。引き返したいと思いましたが、主婦として大勢の避難して来た人たちの食事を用意しなければならない、今は自分にとってそれが一番大切な役目だと考え、決心して罵声を浴びながら小石川と本郷を往復しました。片腿をそのまま燻製にした大きなハムやカンヅメをたくさん買いこんで人力車に乗せ、小石川の家へたどりつきましたが、あの時のことを考えると、今でも苦しくなります。

地震や火災が一応収まったと思う間もなく、こんどは暴動が起るとの噂が立ちました。社会主義者や労働者、朝鮮人が火を放つとか、井戸に毒を投げ入れるとか云われ、軍隊がでたり、町の人たちが組織した自警団や、右翼団体が鉄砲や刃物、竹槍などを持って警戒にあたり、ものものしい状態になりました。

大きい家に住んでいる者はうらまれて、暴徒に襲撃されるとの噂も立ちました。私どもの家は爆弾をしかけられるかもしれないと注意され、緊張しました。しかし、これは結局デマで、実際に殺されたのは、労働者や朝鮮人、社会主義者でした・・・与志はこの時、大切な演劇上の先輩を失ってしまいました。ヨロップバに旅立つ前に、強い感動を受けた〈労働劇団〉の主宰者平沢計七氏はこの時、白色テロルのために殺されてしまったのです。大震災の時、平沢さんは純労働者組合の組合長でしたが、組合事務所のあった大島町で自衛団をつくり夜警をしていました。三日夜の十時頃、事務所へ帰ったところを制服巡査にとらえられ、亀戸署へ連行されて、そのまま消息が絶えました。

多くの社会主義者、労働者、朝鮮人が警察や軍隊を中心とするテロルや自警団の暴力に殺されましたが、当時は真相を知らされませんでした。平沢さんもその夜亀戸署内で習志野第十三連隊の兵隊によって銃殺されたと、後にあきらかにされております。平沢計七氏と与志は直接の交際はないままに、平沢氏の虐殺となつてしまったのですが、与志の演劇の道にとって平沢氏は忘れ得ない足跡を残した方で、その方を警察や軍

のテロルに奪われたことは、与志のその後の人生にも影響を与えたように思います。①

他方ベルリンに留学中の土方与志は、九月二日新聞報道で大地震を知った。その一カ月後復興しつつある祖国への復帰を決意し、モスクワを経てシベリア鉄道で大陸を横断する。途上ロシア革命七年後の首都では、新たなソビエト演劇にも接した。小山内薫と約束した劇団創立の構想を練り始めるのは、この旅路においてである。

大地震直後の祖国復帰（土方与志『演出者の道』）

一九二三年九月二日朝早くベルリンのホテルの一室に眠っていた私は、一枚の新聞を持って入って来たボーイに起こされた。ボーイは同情というよりもお悔みに近い表情をして、持って来た新聞を渡した。いうまでもなくそこには前日の関東大震災のニュースが紙面をうずめていた。そこでは日本という島が太平洋に沈んでしまったかのように大げさに報ぜられていた。半年以上ヨーロッパ各地を演劇巡礼していた私はまず途方にくれた。

ちょうど一カ月目に、このまま勉強を続けようかどうか思っている私のところへ、二通の手紙が舞い込んだ。その一つは親戚の一人からので、震災によって東京の劇場がほとんど潰滅してしまった。だからそれ等の復興がなるまで、ゆっくりそっちで勉強している、と書いてあった。他の一通は数年来左団

① 土方梅子著『土方梅子自伝』早川書房、一九七六年。七六一七九頁。

次一座で親交を結んでいた河原崎長十郎からの手紙だった。彼はくわしく東京の劇場や劇団の消息を報告してくれた。「歌舞伎座の鉄骨、灼けて飴の如く」等という名文もまぎっていた。そして最後には、一日も早く帰って来て、東京の復興をいっしょにやろうというような事で結んであった。そこで私は、この二つの手紙を前に置いて迷ったが、結局河原崎の手紙に従って故郷―東京の演劇の復興に参加しようと決意した。

もうその時は日本の新聞等も手に入れる事が出来て、沢田正二郎氏が日比谷公園で野外劇を演じ、荒廃の中の市民の圧倒的な喜びとなったというような事も知ったし、また今まで色々な法律や条令で窮屈に縛られていた劇場建築に対する制約が緩和されて、バラック建ての劇場も許可される事も知った。そこで私がヨーロッパに出発する時に、小山内薫先生と帰国後は演劇研究機関を二人で作ろうという約束を思い出し、それをさらに拡大して、まず劇場を持った演劇・劇団活動を始めようと考えた。

まだ国交も開けていなかったソビエト同盟政府の、大震災をうけた日本の国民への同情と好意によって、幸い在外の日本人を最も帰国のための近道であるシベリア鉄道通過を特別に許可するという措置が取られた。私もこの特典を帰国の方法として選んだ。

第一次世界大戦終結、十月革命からわずかに数年後であり、近道といってもベルリンから日本まで一カ月もかかった。その途中シベリア鉄道に乗りつぐためには一週間もモスクワに滞在しなければならなかった。これはしかし、私にとってたいへん有難い事で、その間新しいソビエトの演劇に、また社会やソビエト人の生活に接する事が出来た。

この一カ月の旅行中、私はバラック劇場の設計や劇場の座組等に関して様々な想像を楽しみ、一応成案を作った。十二月の終わりに私はようやく神戸に着いた。その翌日すぐに大阪に住んでおられた小山内先生を

尋ね、帰国決意以来の私の構想を話した。①

帝国劇場で初舞台を踏みながら、ふたたび家業に戻った山本安英は、横浜で焼け出された実母と東京の山の手の文房具店を開く。その商売を実際には安英が担い、仕入れのため高円寺から浅草の間屋街へも頻繁に出かけた。小山内薫から呼ばれ、築地小劇場最初の女優となるのはその翌年である。

大地震直後の家業専念（山本安英『新版 歩いてきた道』）

大正という時代も未近くに起って、数日の間に東京の文化を焼きつくしてしまったこの大事件は、私一人の生涯にとっても、また意味深いものだったのです。日本の新劇のある意味では出発点である築地小劇場が起ったのはこの焼け跡からであり、そしてしあわせにも私はその運動に最初から加えて頂くことができたのでした。

その前に一寸私個人のことを申しますと、地震の時実母は二人の弟を連れて、東京の私の家へ遊びに来ていました。そして私の家は辛い災害をまぬがれましたけれども、実母達の横浜の家は、その貧しい家財もろともに一切が灰になってしまい、こうして母と弟達はまた新しい生活苦に直面しなければなりませんでした。母たちは養父の厚意から高円寺の駅のそばに小さな家を借りて、今度はささやかな文房具の店を出すように

① 土方与志著『演出者の道―土方与志演劇論集』未来社、一九六九年。一二一―一二二頁。

なりました。うちが近くなったので、私はしばしばこの高円寺の家を訪れ、時には養家の許しを得て数日泊まりこむようなことさえありました。弟たちは学校へ通っており、母は病身なので、結局私が店を引き受けたような気もちになって、一所けんめいに頭をしばって窓の飾りを工夫したり、商品の仕入れをしたりしました。私は小さい弟の手を引っぱっては浅草の方へ出かけ、あちこちと問屋さんの店を廻って、その年頃なりにせい一ぱい頭をひねるながら、鉛筆だとか帳面だとか筆箱だとかゴム消しだとか、そんなものを自分一人の率領で仕入れては、小さな体に大きなふろしきを背負って高円寺の家はかえってくるのでした。愛読していた樋口一葉に、私自身がなったような気になりました。筑地小劇場の話が起って、小山内、土方両先生から私がよばれたのは、このようにして日々を送っている時でした。①

東山千栄子の夫河野通一郎が属する原合名会社は、富岡製糸場等を傘下とする横浜の絹物輸出業であった。革命の余波によりロシアから撤退したあとも同社は発展を続け、河野はさらにニューヨークやリヨンの支店へと赴任する。他方千枝子は苦勞の多い海外生活を自重し、以後は日本の留守宅でながく生活した。子どもを持たぬ富裕な奥様として、種々の趣味にも手を伸べながら、無為と倦怠を感じる日々と自伝では回顧される。神奈川における紡績産業の壊滅をはじめ、関東一帯の惨禍に直面して、三三歳の彼女は文明や世事の空しさに慄然とし、この世で生きる意義を懸命に考え始めた。

① 山本安英著『新版 歩いてきた道』一九二〇頁。

帰国後の生活と日々の無為（東山千栄子著『新劇女優』）

ロシヤ革命の大正六年に日本へ帰って、それからここまでの六、七年間何をしていたかということになりますが、実はこの六、七年間は私にとって全くの空白であったような気がしております。それも自分の性格から来る一つの悲劇とでもいいましょうか、何事もなくて大変苦しかった時代です。主人は永年築いた働き場所を失って失意の中にあるといっても、やがて仏蘭西に行き、アメリカに行き、また静養のため帰国して本店詰めでおります時でも、文学的な持前と共にいつも青年のような強い研究心で、身分や年齢にかかわらず、大學に行つて学生の中に交つて講義を聴くことさえも出来る、そういう風でけつして退屈することなく、従つて時の動きのよく解る人としていつも重用されておりました。それで商人というよりも書斎人的な風格がありました、そういう理解の中にありながら何故か私は、なすことのなくて日を暮らしているが気にしていました・・・

モスコで全部を失つたといつても、日本に帰つて住む家に困るのでもなければ、明日の生活に心を碎くのでもありません。女中が何人もいて、子供のない家庭の仕事は、めいめいの分担がらくに済みますし、これは主人について外国に行つて暮したとしても同じこと、私はいよいよ平凡な有閑夫人で眠り込む外なかつただろうと思われます。とにかく仏蘭西へもアメリカへも主人は一人で行き、私は日本に残っていました。もしも無理に一緒に暮したとしたら、私の剛情が目立ち、主人のかんしゃくがつり、原因という程のものはなくていて、どちらも面白くない、一般に夫婦のこういう時期のことを倦怠期といっていますが、二人が

一致して打込む仕事のない悲哀、殊に一方がまるで手あきでいる状態では、余計に空虚が目立つのでした。

こんな風で表面は一応調うた生活をしながら、過ぎて行く月日をとらえる術もなく暮らしているところへあの大震災が見舞いました。下町の住居ではありませんから、直ぐに戸外にのがれて、身命に及ぶような被害は受けませんでしたけれども、瞬間に行われた帝都の大破壊の前に、私は初めて長い眠りの眼をさまされました。①

震災の衝撃と人生の転換（東山千栄子著『私の歩んだ人生』）

日本に帰ってから、主人はリヨンやニューヨークなど海外の勤務がやはり多かったのですが、私の方後も外国生活がいやになり、日本の留守宅に残つて、当時の流行語でいう有閑夫人の毎日を送っていました。とにかく退屈でたまりませんので、その倦怠と無為とをまぎらわすために、いろいろなおけいごとをしました。しかしどんなに精を出してみたところで、どれもこれも奥様芸以上に出ないことを、私は自覚せざるをえませんでした。

そこへ来たのが、大正十二年九月一日の関東大震災でした。思いもかけなかったこの突発的な天災で多数の人命があつて奪われ、家や施設が灰燼に帰してしまいました。その悲惨な現実に向き合つて、私は人間とはなんとはかないものだろうということを、つくづく感じさせられました。そして、自分を省みたときに、愕然としました。

私はいったい何だったのでしょうか？　ただ生まれてきたから生きているというだけで、これではうじ虫の命と同じだと思いました。私のこれまでの生活は、あってもなくてもいいような、希望も理想もない、ほうとうにむだな、くだらない生活だったのです。子供ひとりない私は、子供を育て上げるという、大切な母親の義務を果たすこともできません。河野の家の両親もすでに夜を去っていて、お世話をしてあげる人もおりません。生活費をかせぐこともなく。ただ主人に食べさせてもらっているのです。

自活できない、無力な女の生き方に私は疑問をいだきました。そして、なんとか勉強して、独立できるだけの教養を身につけねばならない、そこからほんとうの私が始まるのだと考えました。

私はそう決心してまず本を読みはじめました。それはいわが手当りしだいの、秩序のない乱読でしたが、とにかくこうして私は、なにものかをつかまなければならないと決意したのでした。①

自由劇場第四回公演の一つとして戯曲『河内屋余兵衛』を抜擢された吉井勇は、本来『明星』にも寄稿した歌人であって、大正十年最初の歌集『酒ほがひ』を世に問うた。震災第二年の六月大阪プラトン社により上梓された『夜の心』には震災を詠じた「業火余燼」二六首が収録される。なお、大地震の翌月刊行された雑誌『文章倶楽部』特別号（凶災の印象・東京の回想）には、白鳥省吾の詩「灰燼の中から」等とともに、「業火余燼」のうち十首が掲載される。

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』二九―三〇頁。

吉井勇「業火余燼」「夜の心」（『定本吉井勇全集』第一巻）

何ごとの瞋^{いか}りかしらぬ地震ひぬ　天意え解かずをのきて居り
人死にぬ修羅道のごと人死にぬ　かなしいかなや人の死ぬこと
うち日さす都もほろぶ時来ぬと　業火のまへにをのきて居り
地獄絵をまざまざと見て思へらく　現身はいとあはれなるかな
いまもなおほ目に残れるは焼あとの　芝香が墓の寒きまぼろし

人を焼く煙とともに雨は来ぬ　冬まだ来ぬに寒き雨かな
怖ろしき幾夜を重ね生きながら　地獄の道をたどらむとする
空遠く飛行機見えて天日は　ものすさまじく落ちむとするも
夜もすがら絶えず聴こゆる地の声に　ふるへをのくわが心かな
吾^{あこ}子は寝ぬわれは眠らで夜を守らむ　この怖ろしき更けがたき夜を

そのむかし馬楽と見たる月に似し　月はあれどもすさまじき夜やめ
大地の瞋^{なみ}りとすればころよし地震も畏れでかく云うや誰
生きながら黄泉^{よみ}のすがたをみることに　いかに悲しきものとかは知る

酒甕の覆るさま目に見ゆと 無頼のこころ地震にほほ笑む
そのかみの別れに君と聴きしごと 地震の絶間に鳴ける虫かな

馬楽忌の酒に更けたるかへり路に 見し浅草の月に似る月
すさまじき夜ながら空にかかれるは 黄楊の櫛にも似たる月かな
大空の月いと細し夜ごとの 心細さに月も瘦せけむ

ありし日の銀座思ひて涙落つ 世に亡き人をしのぶここに
華やける人の末路を見るごとき あはれき覚ゆ今日の銀座は

わが胸も焦土となりぬいかにせむ 寂しかなしと云う人も見ぬ

馬楽の忌小せんの忌など思ひつつ われ浅草の焼あとをゆく

浅草も焦土となれば焼あとの公孫樹いそぶも寒き秋なりしかな

源治店の路次もいまなし ありし日の人のおもかげいかにもとめむ

江戸名所図絵もほろびぬ わが夢も消えて空しと嘆けるや誰

うち日さす都のなかをたもとほり しみじみと知る現身の秋

①

大地震の五カ月前土蔵劇場での公演を無事果たした秋田雨雀は、七月初め有島武郎の葬儀に列したあと、月末東北への講演旅行に出発した。東京での大震災火災を知るのは九月二日青森においてである。丹念な『秋田雨雀日記』に八月二九日から九月一日までの執筆は欠如するが、以後数年間の絶えざる震災日誌はとくに貴重である。

震災日誌（『秋田雨雀日記』大正十二年）

九月二日 朝驚くべき報道に接した。大震と火災のために東京市全滅の報に接した。一日正午正十二時ごろ上下、水平の振動起り、大建築崩壊。十二階、ニコライ、三越、松坂屋など焼失。火は全市をなめつくしかかっている。―第一報をきき、老農社へ遊びに行く。―宿屋へ帰ると、第二報、第三報がきていた―戒厳令発布の報―自動車で魁へいき、回報をみて、枋内農学士の宅により、帰路再び魁に寄り、食糧略奪、抜剣の報を受け、自動車で土崎へ帰った。今夜こそ怖るべき夜だ。今夜は怖るべき夜になりはしないか？

九月三日 暴動化はしないか？東京の家族も心配になるので、足助君とわかれて、黒石へかえった。黒石では電報をみて、東京へ出発したものと思っていた。明日東京へ向って出発の用意をする。小坂、北岡、鳴

① 吉井勇著『夜の心』（『定本吉井勇全集』第一巻、四一二―四一三頁。）

〔参照〕吉井勇「業火余燼」『文章俱樂部』大正十二年十月特別号（凶災の印象・東京の回想）、三三頁。

海の諸君来訪。東京の模様について語った。

九月四日 東京市の八分まで全滅らしい。きょう黒石を出発。出発前に朝鮮の鄭鳳吉君が訪問してきたので、警察ではだいたい問題にしているらしい。刑事が朝からつききりである。午後一時の汽車で出発。川部でそばをたべた。渋谷君の家へより、それから盛を訪ねた、水筒を渋谷家から借り、食糧をととのえて夜の急行に乗る。上京客で立錫の余地もない。宇都宮の参謀大尉と同乗。朝鮮人の流説の調査をきいて皆で笑った。しかし国民の軽率には驚く。沿道は戦闘気分だ。汽車が遅れて、赤羽に二時ごろついたので、小学校へ一泊。九月五日 赤羽の小学校では教師が救護につとめていた。親切に應對してくれた。同行十人ほどテーブルの上に眠った。夜なかに一回地震があったので驚いてとびだして、時計のガラスを破った。はじめて大震後の東京へはいるしたくをした。自分の家のことなぞ心配しながら、池袋行の汽車に乗った。まるで戦争だ。九月六日 午前中に雑司谷へつく。家は安全！食糧はいくぶん給与されていたが、全体として食糧欠乏、避難民は全部給与。比較的よく手廻しができていた。戒厳令―自警なぞでもものしい。朝鮮人虐殺は問題になるらしい。今日では反対宣伝をしているが、むずかしい問題になるらしい。妻も田中君も赤ん坊もみんな元気でいるので安心した。しかし、驚くべき損失は直接間接にぼくらに影響してくるだろう。・・・

九月十一日 朝鮮人問題につづいて社会主義者の検束の話がでている。小川君とぼくは検束されていることになっているのだそうだ。小川、藤森、生方の三君を誘い、前田河広一郎君の検束の話をきいた。自警団だ密告したらしい。藤森、小川君なぞが弁解して、取り返してきたそうだ。夜警。(大門会)・・・

九月二六日 高木、松田の諸君が写真を撮ってくれた。(大杉君はリーブクネヒトと同じ運命にあった。)戒厳司令官福田大将交代。憲兵隊長罷免、甘粕憲兵大尉軍法会議廻附の事が理由不明のまま問題になっている

たが、きょうはじめて発表された。甘粕憲兵大尉は平素社会主義に反感をもっていたが、大震後無秩序の状態に際し無政府主義の巨頭大杉らが不穩の行為にいずるを恐れて、大杉ほか二名を某所に連出して、銃殺したという犯罪分明にされたので、軍法会議の附せられることになったのだそうだ。大震に比較すべきほどの大事件だ！国民の無智は怖るべきことだ！清藤君大鰐から来た。(大杉君銃殺の報(大いなる損失)・・・

十一月十三日 『解放』の戯曲着想。二つほどえた。一、震災にヒントをえた、避難民を主材としたもの、一、牢獄と二つの窓。表現主義ふうのもの。このいずれかを創作してみよう。ずっと主観的なものでいい。暁民会の川崎悦行君が市ヶ谷監獄で病死したという通知をうけた。立派な青年だった。仏教から生まれた社会思想家だ。二四才。不穩文書の件。午後高田保君に会い、ふたりで運天女史を中野に訪い、牛込でた。中野のカフェ・アザミによった。夜大門会にごたごたがあったのを仲裁した・・・

十一月二十日 松本弘二君がきて『解放』が三月に延びたということを書いていった。戯曲は月末に脱稿することにした。『女性改造』の短い感想「わが子の行末を見守りて」のために短いものを送る。「子供は自然の子」とした。

十一月二三日 かなりな強震。いいあたたかい日。茅野家から死んだ娘さんのくやみの返しがきた。佐藤君がきたのでふたりで墓地のほうへ歩いていった。酔って憲兵隊につれていかれた話をしていた。おもしろい男だ。夜千代子をつれて東洋大学へいく。記念会で『国境の夜』をやっていた。校庭での屋台舞台。月光に照されて五、六百人の人が見物していたのはおもしろい感じをあたえた。舞台装置は丸太小屋なのがよか

った。グレゴリーの『月の出』もやった。千代子と二、三のカフェによって帰った。①

大地震の翌月雨雀も雑誌『文章倶楽部』に詩編「死の都」を掲載し、十一月には戯曲の執筆を再開した。②
着想されたのは青森へ逃れた被災者の苦境で、救護先における朝鮮人騒ぎを含み、表現主義による錯乱場面がフイナーレをなす。翌年『演劇新潮』に発表された脚本『骸骨の舞跳』をここに抜粋する。

避難先での不穏（秋田雨雀脚本『骸骨の舞跳』）

人物Ⅱ青年、老人、看護婦、医長、〇〇人、自警団員（後に骸骨）、貴婦人、避難民男女、其他

場所Ⅱ救護班のテント（立体派風の舞台装置を可とする。所謂マヴォ式の試みも面白いであろう）

老人　じき夜が明けましょうか？

青年　夜の明けるまではまだ二時間もありません。

老人　そうですか・・ああ何んでことでしょうね・・こんな年になってこんな目に逢うなんて・・あれは

何んの音でしょう？

青年　何でもありません、汽車の音です。あなたは何時ここへ降りたんですか？

①『秋田雨雀日記』第一巻、三二二―三二四、三三〇―三三一頁。

②『文章倶楽部』大正十二年十月特号。三七頁。

老人　ゆうべです・・ゆうべ遅くです・・一体何んで話でしょうね・・こんなばかな話があるものでしょうか？

青年　東京でやっぱりひどい目にお逢いでしたか？お互に飛んでもない目に逢いましたね。

老人　ひどい眼位じゃありません・・私は娘と孫に死なれてしまいました・・それに私は病身でして、そんな事をして旅なぞ出来る身体じゃないんですけれども・・

青年　然うですか、お気毒ですね・・そして娘さん達や孫さん達は何処で失くなったんですか？本所ですか？

老人　いえ、向島です・・私共は三十年向島に住んでいましたから・・何んでも近所の人の話では娘は孫をつれて土手に逃げていたのを、人に押されて大川へ落っこってしまっただそうです・・

青年　それはお気の毒なことをしましたね。あすこでは随分そんな人があつたそうですね。あなたはそれでよく逃げられましたね・・

老人　一層死んだ方がよかったです・・娘や孫に死なれて何が楽しみです生きて行かれますか？

青年　そうお思いになるのも無理はありません・・でも世の中は生きていきえすれば、また何とかなりましょう・・いや実は僕自身もいまのところ何の光明もないんですが・・然し生きている間は生きていなければならぬんです・・

〔中略〕

看護婦　気分のお悪い方ではありませんか？

避難者　看護婦さん、先生を呼んでくださいな・・お腹が痛んで仕方がないんです・・

避難者 看護婦さん、私に水を一杯ください・・
避難者 看護婦さん、この身体で船に乗れましょうか？・・
避難者 看護婦さん この切符で只で船へ乗れましょうか？

看護婦 皆さん、静かにしてください。そう一度におしやつちゃ何うすることもできません・・（老人に）
あなたは今夜船にお乗りになれますか？

老人 私はそれをおあなたにお尋ねしたいんです・・もう少しここへ置いていただく訳に行かないでしょう
か？・・何うも身体が痛んで仕方がないんです・・

看護婦 そうですか？今先生がいりますから診察していただいたらよろしいでしょう。

〔中略〕

そのとき一団の自警団員がテントの中に入り込んで来る。甲冑を着て抜刀をした者に統率され、在郷軍人の服装をした者、陣羽織を着た者、鉢巻きをした者、学生服を着た者、各々手に槍刀剣類を携えている。

甲冑 看護婦さん・実は探し物があるんですが、一寸テントの中へ入れていただきます・・

看護婦 そんなに入って来ちゃ困りますね。患者が寝ているんです。

鉢巻 一々断る必要ねえじゃねえか・・さあ勝手に入って探そう・・

看護婦 （唇をふるわせて） いけません・・入っちゃいけません・・

甲冑 看護婦さん、実はこのテントのなかに○○○○○○・・現に汽車から降りるのを見た男がいます。

・・○○○○○○

陣羽織 ○○○○○○・・市民の安寧のためです・・鉢巻

在郷軍人 そうだ、市民の安寧のためだ

鉢巻 ぐずぐず言っていないで早く探そう・・なんでもやつつけちまえ・・

自警団員は提灯を振り廻して避難民の中を歩き廻る。看護婦は蒼白な顔をして一団の後を追うて行く。自警団員の一人は、老人と青年の背後に子犬のようにしゃがんでいる一人の男の周囲に立つ。

鉢巻 こいつだ！・・こいつだ！・・提灯を出せ・・皆なこの顔付きを見ろよ・・

ある男 （二四、五歳の労働者風の男） 僕は何もしないんです・・

学生 （真似をする） 私はなにもしないんです・・

陣羽織 やっつけちまえ・・やつつけちまい！

甲冑 乱暴なことをするな・・己れが今調べて見るからな・・おい、○○○○？嘘を言っちゃ為にならな
いぞ・・

ある男 僕は日本人です・・皆さんはなにをするんです？ ①

① 秋田雨雀著『骸骨の舞跳』叢文閣、一九二五年。三一―三三頁。

〔参照〕「秋田雨雀と表現主義―秋田雨雀と関東大震災の戯曲」（大笹吉雄著『ドラマの精神史』新水社、

一九八三年。）

第四節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その二

新劇人に係わる多くの震災記録のなかで、とくに悲惨なのは小山内薫の師弟平沢計七の運命である。鉄鋼所の工員であった平沢は、大島・亀戸における労働組合活動家であるとともに、プロレタリア演劇の先駆たる〈労働劇団〉を組織していた。大地震翌々日の夜半、平沢は数名の警官に呼び出され、大島町の自宅より警察署へと連行された。同じ頃亀戸では南葛労働会の活動家六名が検束され、いずれも生死不明となる。十月十日警視庁は亀戸警察署における彼らの殺害を認め、新聞各紙でも報じられた。^①

平沢計七が命を断たれた一連の弾圧は、関東大震災に派生した亀戸事件としていまに伝えられる。まもなく労働総同盟友愛会の依頼により、弁護士山崎今朝弥らの自由法曹団が事件の調査に着手した。犠牲者の家族や周囲の人たちを対象に、かくして作成された聴取書二四件の第一は、平沢の遭難をめぐる知人八島の陳述である。

① 藤田富士男・大和田茂著『評伝平沢計七』恒文社、一六八―一七五頁。

拙稿『紡績工場の労資と女工の被災記録―産業革命先端への震災直撃(続)』三七―四一、九五―九九頁。
online.

平沢計七の検束と殺害 『自由法曹団聴取書』

聴取書 第一

府下大島町三丁目二百二三番地

八島京一 二九才

一、自分は一日の地震の日に焼出され小松川の方面に逃げましたが、二日に雨が降り野宿が出来ませんので大島の方へ行きたる処、途中で平沢君の細君に逢いました処、自分の家に来て居れと云われたので平沢君の処へ行きました。此時は午後三時頃でした。而して平沢君は翌日正岡君の処へ倒潰家屋片付の手伝に行き、夕方帰って暫くすると夜警に行くと云い出て行き九時か十時頃と思う頃帰って来ました。暫く休んで居ると正服巡査が五六人来て平沢君に、まことに済まんが警察まで一寸来て呉れと云い、平沢君も「はい」と云いおとなしく出て行きました。

そして夫れ切り帰りませんから細君が心配するし、自分も心配だから五日の正午頃手拭紙等を持ち警察署へ差入に行きました。而して亀戸署の高木高等係に逢い差入れを托したる処、平沢君は三日晩に帰したと云いますから自分はその時平沢君はもう殺されたものと思つて帰つて来ました。

二、その訳は、四日の朝三四人の巡査が荷車に石油と薪を積み引き行くに逢い、その中の一人の顔馴染の某正一と云う巡査にその薪及石油は何にするかとききたる処、外国人が亀戸管内に視察に来るので、その死骸三百二十人を焼くので昨夜は徹夜した、朝鮮人ばかりでなく主義者も八人殺されたと云うて居りました。夫れで平沢君も居るのではないかと、巡査にきいた方面の場所へ行き見たる処、朝鮮人支那人等二、三百人

位の人間が殺して山に積でありました。その近辺に平沢君の靴と思われる靴が置いてありましたからです。
三、私の考では平沢君は自警団へも進で出ており、極めて親切な要領の好人ですから、殊に彼の場合演説をしたり、革命歌を唱えたり、又警察内で騒ぐ様な無謀な行動を採る様な人で無いと深く信じて疑いません。

四、尚私の考えでは平沢君は三日に連れて行かれると、その夜の中に殺されたものと考えられます。
右の通り相違ありません。

大正十二年十月十六日午後十時

東京市芝区新桜田町十九番地 松谷法律事務所二於テ

八島宗一

聴取人弁護士 松谷与二郎

立会人 〃 山崎今朝弥 ①

平沢計七の活動については、土方与志や鈴木文治による回想もあるが、山内みな自叙伝には震災直前の面影が親しく描かれる。紡績女工であった山内は、やがて労働運動に専念し、下中弥三郎設立の労働週報社に勤めた。労働者向けの雑誌で平沢計七を編集長とするものの、ここに属したスタッフは他に彼女ひとりであった。

① 『亀戸労働者殺害事件調書一』（『二村一夫著作集』別巻二。online.）

山内みな「平沢計七さん」（『山内みな自伝』）

『労働週報』の編集発行名義人が平沢計七さんに変ったのは、大正十一年の十一月七日発行の第二二号からですが、平沢さんは純粹の労働者出身の労働運動家で、大正初期からの友愛会の中心人物のひとりでした。...

『労働週報』の事務所です仕事をしているときの平沢計七は、いつも陽気で、黙っているということがありませんでした。私を相手に労働歌を歌ったり、自分の書いた小説を暗唱したり、時によっては芝居を始めたりました。私ははじめは、気違いかと思いました。そうかと思うと「これは売れない雑誌であり、もうからない仕事だ。むだじゃな」と独言を言ったりしました。

小説家の菊池寛が事務所にあずねてきて、「平沢に会いたい」と案内をたのみました。そのようすが、モサツとしていて背が低いので、私は毎朝読んでいた新聞の連載小説を書いている小説家の菊池寛だとは思いませんでした。さぞ美男子だと思っていたから、ピンとこなかったのです。平沢が「ここです。ここです。」と言ってきて、芸術論をやりだす。菊池寛が帰ってから私がきくと「おお、あれが有名な菊池寛だよ」と言っていて何かブツブツ言っていました。「何ですか」と私がきくと、「あれはブルジョア階級の小説で労働者階級の小説ではない。面白いだけが小説ではない」ときびしい声で言うのです。私は「わかりました」とこたえました。が、ながながとプロレタリア芸術論を話したので、そのあとはこっちは聞いていませんでした。次ぎに菊池寛がたずねてきたとき、私が応接間をつかったら、と言ったのですが、「つくろうことはな

い。労働者は労働者だ」といって、狭い事務所の中で芸術論をやりだすのです。私はふきだしてしまいました。①

前衛的なポスター、装幀、油絵で知られる柳瀬正夢は、田端や本郷でボヘミア的な年月を送りつつ、十五歳で院展に入選した。雑誌『我等』を創刊したばかりの長谷川如是閑と大山郁夫に個展を機縁として知り合い、大正デモクラシーを唱導する両知識人から保護と影響を受ける。同時に村山知義らと新興美術の一派マヴォを組み、『読売新聞』に時事漫画を書き続けた。大正十二年八月大山の静養に付き添って房総海岸に滞在し、一足先に帰京した彼は、大山の留守宅で大地震に驚愕。下宿に戻って、深夜検束されるのはその二日後である。綴られた柳瀬の自叙伝は数頁にすぎぬが、なかでは震災における検束と新生への改心が中心的に記述される。②

検束の艱苦と新生への戒心（柳瀬正夢「自叙伝」）

彼が自叙伝を書くという。僭越の至りである。だが恐らく彼はこれを最初にして最後のものとするであろう。来順嗜好機不可逸。この機会にでも彼ひとつ生活過程を整理し、同時に即刻彼のこの過去帳を埋葬せねばならない。ぼやけた彼の記憶よ、やすらかに成仏しろ！

① 『山内みな自伝』新宿書房、一九七五年。一一一―一一三頁。

② 柳瀬信明『柳瀬正夢を語る』『へねじ釘の画家』柳瀬正夢展』ムサシノ出版、一九九〇年。二三―二七頁。

彼の生年？ 大正十二年。 月日は？ 九月一日。

全く真面目で言っているのである。彼はぐうだらでありし過去の襤褸をば、此の日きれいさっぱりと棄てたから。関東大震災の焼土の中に。

そして彼の更生使命は？ 組織的無産階級解放運動。・・・

大正十二年九月一日の関東の大震災は、私の終始した観念的ニヒリズムを根こそぎ持って行ってくれた。何の馬鹿々々しいと思ひ乍らも、此の災変を限界に更生したことが今頃になって意識されてきた。避暑の房州から皆より二日先に帰京して、大山さんの戸塚の邸の留守番をしていたことが禍因となった。

その夜たしか震災三日目であったと思ふ。十二時過の下宿の二階の夜警から帰って余震に揺れる蠟燭の灯に、漫画日記をつけていた時突然私は襲はれた。後で家宅搜索に取散された部屋一杯の乱雑さと、夜具の上などに残っていた土足の跡などを数えて、私は当夜の物々しさに改めて驚いたが、それは私が街路へ引出されて下宿に背を向け、懐手のまま直立不動を強いられている間に行はれたものとみえる。予審判事達の自動車二台が暗の中に棄ててあるのを見た。私は軍隊の銃剣包囲の中で、中尉に命令された夜空の一方をみつめてゐた。やられるものと覚悟していたが、その瞬間の落ちついた英雄的な気持を今辱かしく思っている。私は馬鹿だった。

親しかった近処の人達は私の敵にと一変した。罵言、弓張、日本刀、鳶口、竹槍、石ころ、銃剣、そして暗、里程、護送中の軍隊、その他の乱暴さ愚昧さをいま詳述する自由と暇を持たないが、自警団の名によって表されたおろかな民衆の姿を見た。警察の狂乱。

私は戒厳令下の仮設中隊本部から淀橋署に引渡されて、留置場にたたきこまれた。隣檻に五年振の友達が

居たりなどした。格好な其処は私の天国だった。

五日間ののち私は此の安全地帯から放り出され、長谷川さんの忠告に従い一カ月許り門司に帰った。私は彼等の宣伝のあらゆる仮面を見た。じっとしてはいなかった。私は行動を引ずった。①

大山郁夫は当時早稲田大学の政治経済学部で政治学の講義を担当していた。大震災の三カ月前、六月四日に治安当局の検事一団は、佐野・猪俣両講師を搜索するとして、早稲田大学構内に立ち入る。彼らは恩賜館研究室なる大山教授の机上をも点検し、風呂敷包一個と紙包一個の書類等を押収した。これに対して同月二六日神田のキリスト教生年會館で抗議集會が開かれ、三宅雪嶺の講演に続いて大山は、落涙しつつ學問の自由と大學の自治を訴えた。大地震の翌日戸塚の留守宅が搜索され、自邸に戻った彼は九月七日、多数の武装兵士によって憲兵隊臨時駐屯所に連行され監禁される。② 柳瀬正夢の検束と収監はみずから推断するとおり、大山への弾圧に起因したであろう。

大山郁夫に師事し、のちに彼を党首とする労働農民党に参じる田部井健次は、大震災の第七日恩師の消息を心配し、戸塚の大山邸を訪ねた。房総から帰宅した夫妻は無事で、田部井も朝食を共にする。その間に数十人が邸宅を包囲して、政治学者大山を検束し、これに應對する田部井もみずから望んで憲兵隊屯所に監禁された。かね

① 「自叙伝」〔『柳瀬正夢全集』三人社、二〇一三年。第一卷、二〇、二七一―二八頁。〕

② 『早稲田大学百年史』、早稲田大学出版部、一九九七年。第三卷 三四〇―三五二頁。

て陸軍では大山郁夫襲撃の計画がなされていた。田部井による小冊子『大山郁夫』には、震災に乗じた思想弾圧の一端が痛切に語られる。

憲兵隊による大山郁夫の拘禁（田部井健次著『大山郁夫』）

私が戸塚の先生のお宅へ着いたのは、朝の九時ころでしたが、内玄関の戸を開けると、直ぐその突き当りのところにある食堂から先生と奥さんのにぎやかな笑い声が聞えて来ました。ははあ、もう帰って居られるな、と思って私は直ぐに上へあがり、大急ぎで食堂の戸を開けると、先生と奥さんは食事をしておられました。私も直ぐに朝めしを御馳走になることにし、一緒にめしを喰べながら、当時の東京の情況を先生に詳しく報告しました。大杉さんのことは私はまだ何も知って居りませんでしたが、堺利彦老人を中心とする数名の人々が獄中で殺されたらしい、というようなことや、江東方面でだいぶ多くの同志が殺されたらしいという噂など、私の聞き知って居た限りのことを報告し、最後に私は「先生！我々も東京にいては危いです。も一度田舎へ逃げ出すことにしませんか」ということを提案しました。

と、丁度そのときです。当時大山先生のところを書生さんをしておったS君があわてふために食堂の戸を開け、「大変です！いま兵士たちが剣つき鉄砲を持って玄関のところへ押し寄せて来ています！」というのです。・・・玄関のそとにいたのは約二十人ほどでしたが、なお垣根のところにも二間に一人くらいの割合で兵隊が配置されているのがちらりと見えましました。多分家の周囲全体をぐるりと取りかこんでいるのです。全部で五十人くらいの兵隊が動員されてきているらしいのです。・・・

僕は若い将校との談判を終えるや否や、直ちに奥へ取ってかえし、先生にこう言いました。「先生！とうとうやって来ましたよ、憲兵隊本部の命令で先生をつれに來たのです。家の周囲はもう兵隊に取りかまれてしまいましたから、逃げようとしてもとても不可能です。僕も一緒にいきますが、これが最後になるかも知れませんから、その覚悟で行くことにしましょう」と・・・

やがて支度が出来たので、今度は先生と僕と二人で玄関へ出て行きました。そこには例の若い将校が相変わらずいかめしい顔をして控えていました。彼は最初の論議があつてからは、敢えて上へあがろうとせず、じつとそこに待っていたのでした。先生はその若い将校に向かっていかにも静かに、「ごくろう様です」という丁寧な挨拶をなさいました。その将校も黙って目礼し、我々はそのままだとやと玄関の外へ出ました。先生と僕とを中にして、前方には約二十人くらい、後方には約三十人くらい兵隊が、四列縦隊に整列しました。そのとき表の方を見ると、垣根のそとに約百三十人位の人たちが、群がり集つて何かがやがと話し合っています。多分近所の人たちが噂をききつけて集まつて來たのだと思います・・・

やがて私たちは約一時間ほど歩いて、落合の憲兵隊屯所へ着きました。そこは普通の住宅を臨時に憲兵隊屯所にあてたものでしたが、相当に広い家で、その家の庭には多数の兵隊があらこちらに屯していました。その家の八畳ほどの広さの板敷きの応接室でした。時間は十一時少し前だったと思います。私はその部屋へ入れられるや否や、とっさにまどのところ行つて外の様子を見ましたが、そのまどの直ぐ下には十数人の兵隊が屯しているので、いざとなつてもそこから逃げ出す可能性は全く無さそうです・・・

我々ふたりは相変わらず応接室に監禁されたままです。そとはもうすっかり暗くなり、やがて八時近くなのですが、まだ何の音沙汰ありません。「どうするつもりなのだろうか、殺すなり、帰すなり、さつさと

片づけたらいいではないか！」と僕は腹の中で少々いらいらしながら考えました。が、やがて四、五人の将校がどやどやと部屋の中へ入つて來ました。そしてその中の大將株の男が、「どうもいろいろ御迷惑をかけましたが、もう帰つても宜しいです。御留守中にお宅の家宅搜索をやりましたが、どうぞ悪からず」という挨拶をしました・・・

かくして先生と僕とはその晩の九時近くに無事に家へ歸つて來ました。しかし、僕が憲兵隊屯所でかえりがけに「別段用事も無いのに、我々をこんなところにひっぱつて來て云々、」と言つたのは、実は全く僕の誤解でした。彼らにはやはり「重大な用事」があつたのでした。後で判つたのですが、彼らは最初から暗殺の目的で、先生を憲兵隊屯所へひっぱつたのだそうです。

あの大地震があつて数年後労働農民党の支部が全国各地に確立され、華々しい闘争を展開し始めた頃のことです。四国の或る町の町長で、極めて熱心に労働党を支持していたひとりの老人がいました。その人が或る時労働党の数人の黨員にこんなことを話したそうです。

「諸君は何も知らないだろうが、君たちの党首の大山さんは、大震災の時に危く殺されかたんだよ。陸軍の或る秘密本部の方針で、大山さんを、あのどきどきまぎれに暗殺することになり、憲兵隊が大山さんを自宅から落合の屯所へ引っぱつたのだが、その引っぱり方が余り大げさだった為に、付近の民衆が騒ぎ出し、それをまた新聞社が嗅ぎつけ、四方八方へ電話をかけて大山さんの行方を探したものだから、憲兵隊でもとうとうおやまさんを殺すわけにはいなくなつて了つたのさ。大山さんという人は運のいい人さ！」と。

この話を聞いて黨員たちは、その老人が何故そんなことを知っているのか、その話に疑問を持ち、直ぐにそれを質問すると、その老人は大声で笑いながら、「実はわしはそのときの憲兵隊の参謀だったのさ」と、

自分の前身を正直に告白したというのです。①

新劇の代表的な男優千田是也は、銀座服部時計店を設計した建築家伊藤為吉の六男である。早稲田大学の独文科に聴講生として在学中の大正十二年、千田は兄熹朔とともに人形芝居に熱中していた。動く人形で『セヴィリアの理髪師』などを演じるため、夏休み末に麻生材木町の小さな家を借り、模型舞台の装置を運び入れた。大部な自叙伝で縷々語られるのは、大地震における市街への脱出と一家の対応である。朝鮮人騒ぎの余波を浴びた千田是也の受難、〈千駄ヶ谷のコリアン〉との誤認はよく知られる。

大地震の襲来と朝鮮人騒ぎの受難（千田是也著『もうひとつの新劇史』）

そこへ越した翌日の午ちかく、熹朔はなにかの買い物に出かけ、私と川村君とは鴨居にずらりとぶらさげた人形の糸の具合を調べていた。すると急に家が上下、左右にもものすごく揺れだし、例の大正十二年九月一日の関東大震災がやってきた。廂から瓦がガラガラ落ちてくるので、うっかり外へも出られず、二人とも縁側の柱につかまって、いつ崩れるかと天井をにらんでいた。

そのうちにだいぶ揺れが納まって来たようなので、ともかく近所の様子を見てこようと、あいかわらず悲劇的な顔をしながらかプランプラン揺れている人形たちを袋に入れて押入れにしまい、細い路地をまっしぐら

① 田部井健次著『大山郁夫』進路社、一九四七年。一一―一二、一四―一七、二六―二九頁。

に走り抜けて材木町の大通りに出た。すると六本木のほうから熹朔が息せききってやって来て立ちどまりながら、「おれ、平河町へ行かなけりやならいから、家のほうを頼むよ」というと、またスタコラ引きかえしていった。

よしきたと私は勇みたち、余震のたびに墓石がゴロゴロ倒れている青山墓地を駆けぬけ、白い雲だか煙だが、モクモクしている四谷から赤坂へかけての空をはすに見上げ、これはただごとではないぞとあわてながら、青山練兵場を千駄ヶ谷に抜け、やっと家にたどりついた。

さいわいこの辺は大した被害はなく、わが家も塀が倒れたり、瓦が落ちたりしただけで、みんな無事に裏の空地に避難していた。「熹朔はいつたいなにをしているのよ」と母はだいぶ不服そうだったが、私は熹朔のさっきの済まなそうな顔を思い浮かべて「だってあつちは彼女と女中だけだし、仕方ねえよ」と弁解した。

その晩から私はやたらに忙しくなった。おやじの二号さんや三号さんや近い親類の安否を尋ねてあちこちを駆けまわされたり、その途中で罹災者の大八車を後押しをしたり、主人にはぐれてウロウロしているどこかの婆やさんらしいのを、佐々木たつもこんなことになっているのかなあと、つい日本橋から宮城前までおぶって行ったり、見つかった親類の家へリヤカーで食料をはこばされたり、夜警に引っぱりだされたり一日頃は細工物や本にへばりついている私でも、さてこういう事態のなかで駆けまわるのは、やはりうちでは一番うってつけの年齢だったわけであろう。

センダ・コレヤという私の芸名の由来であるあの事件が起きたのは、この大震災のたしか二日目である。個々の炎が夜空を真っ赤にそめ、ときどきガソリンや火薬の爆発する不気味な音がきこえ、余震がくりかえされ、通りには怪我人たちをのせた担架や荷車をかこむ疲れはてた人たちの行列がつづくあの状況の中で

きくと、朝鮮人が日頃のうらみで大挙して日本人を襲撃してくるとか、無政府主義者や共産主義者が井戸に劇薬を投げこんでいるとか、道ばたで避難民に毒餵頭をくばっているとかいう馬鹿馬鹿しいデマまでが、なんとなくほんとうに思えてくるらしい。おまけに鉄衛がそのころ近衛の聯隊長をしていた古荘のところへ見舞いについて姉からきてきた情報によれば、軍は多摩川べりに散開して、神奈川方面より大挙北上中の〈不逞鮮人集団〉と目下交戦中だという。

そこで私もじっとしていらなくなり二階の押入れにいてあった長持の底から先祖伝来の短刀を持ち出して、いつでも外から取れるように便所の掃き出し口の小窓のかげにかくすと、登山杖をもって、お向いの勝ちゃんに従兄の大学生といっしょに、家のまへの警備についた。

そのうちに夜も更け、便々と待っているのも気がきかぬような気かしはじめ、敵情偵察というわけで、千駄ヶ谷の駅にちかい線路の土手にのぼっていくと、うしろのほうで「鮮人だ、鮮人だ!」という叫びがきこえた。ふりかえると、明治神宮の、当時はまだ原っぱだった外苑道路の闇の中をいくつもの提灯がちかづいてくるのが見えた。それをしてつきり〈不逞鮮人〉をこっちへ追って来るものと思ひこみ、はさみ撃ちにしてやろうと走って行くと、いきなり腰のあたりを後からガンとやられた。おどろいて向きなおると、雲くばかりの大男がステッキをふりかざして、「イタア、イタア!」と叫んでいる。

登山杖をかまえて後じさりしながら、「違う、違います!」といくら弁解しても、相手はいっかな聞きいれず、「センジンダア、センジンダア!」とステッキをふりまわしながら嗅ぎつづける。そのうち提灯たちが集まってきて、ぐるりと私をとり巻いた。みると、喚いている大男は千駄ヶ谷駅のまえに住む白糸ロシア人の羅紗売りだった。そっちは朝鮮人でないことは一目瞭然だが、こっちはそうはいかない。その証拠に棍

棒だの木剣だの竹槍だの薪割りだのをてんでに携えた、これまた朝鮮人だか日本人だか見分けのつけにくい連中が、「畜生、白状しろ」「ふてえ野郎だ、本籍を言え」「嘘をぬかすと、叩っころすぞ」と私をこづきまわすのである。

「いえ日本人です。ついこのさきに住んでいるイトウ・クニヤという、このとおり早稲田の学生です」と、学生証まで見せたがいっこう聞きいれず、薪割りや木剣を私の頭のうえに振りかざして「アイウエオ」を言ってみろの、「教育勅語」を暗誦しろのという。・・・ありがたや、だれかが後ろのほうから、「なあんだ、伊藤さんのお坊ちゃんじゃねえか。大丈夫だ、この人なら知っています」と言ってくれた。近所の酒屋の若い衆である。するともう一人、「そうだ、伊藤君だ」と、青年団の服を着た青年が前に出て来た。これは千駄ヶ谷教会の日曜学校に通っていた頃の友達だった。・・・

いま思えば、ナチスのユダヤ人狩りと同じように、あれは震災で焼け出され傷つき裸にされた大衆の支配層に対する不満や怒りを、民族的な敵対感情にすりかえようとした政府や軍部の謀略だったのであろう。

そんなエピソードをも含めて、あつとという間に東京の三分の二以上を焼け野原にしてしまったこの大地震は、私にいい薬になった。《救世軍の芝居》から『その妹』を経て、これが私の見た第三のリアルなドラマということになるわけだが、これはむしろ《救世軍の芝居》にちかく、だがもっとも大きく、もっとすさまじかった。言ってみれば、人間対人間のドラマもあり、人間対自然のドラマもあり、おまけにその両方が

きびしく巨大で、芸術青年の私はすっかり圧倒された。①

同じく築地小劇場の男優薄田研二は福岡の酒造家で生まれた。子どもの頃彼は郷土芸能（博多にわか）は熱中し、しばしば店先で黒板を背景に自演も披露する。富裕で芝居好きの父親が、評判の尾上松之助を招いて興行を支援し、宿として自宅を提供することもあった。やがて絵画の修行を始めた賢治は、入院を機縁に児島善三郎や倉田百三と知り合い、ついに大正九年倉田を慕って上京し牛込に下宿する。おりしも白樺派の文人たちが倉田の戯曲『俊寛』の上演を企画し、大森池上の料亭に設けられた舞台で彼は俊寛の役を演じた。②

演劇への志望と自宅の震災（薄田研二著『暗転ーわが演劇自伝』）

どうやら生活も落ち着いたころ、みやこ新聞の学芸記者をしていた上泉秀信さんから手紙がきて、村田実が地球座という劇団をつくって浅草で旗揚げ公演の準備をしている、行ってみたらどうかと、すすめてまいりました。白樺の人たち、武者小路先生、有島武郎先生、長与善郎先生なども、私のことについてはいろいろと心配して下さっており、またそういう関係で上泉さんも骨折ってくれているわけです。しかし私の内心は実はまだ絵のほうへ未練があつて、なかなか決心がつかずにいたのですが、妻の晴子も画家としてより俳優

① 千田是也著『もうひとつの新劇史ー千田是也自伝』筑摩書房、一九七五年。五六―五八頁。

② 薄田研二著『暗転ーわが演劇自伝』東峰書院、一九六〇年。二九―三七頁。

優としてのほうが大成すると思う、と強くすすめることもあつて、やっと芝居に入る決心がつき、じゃあ行ってみようかと、と腰をあげた瞬間、ぐらぐらときました。大正十二（一九二三）年九月一日、死者九万一千名余、五二万戸の被害家屋を出した関東大震災の第一震です。

東京では地震直後一四五カ所から火災がおこり、水道管破壊のためほとんど消火が行なわれず、火は風をよび、風はまた火をよんで、下町一帯をなめつくしました。・・・この混乱のなかで、一時的におこった無政府状態を利して、為政者みずからが放った流言ー不逞朝鮮人の暴動、社会主義者の蜂起ーによって、ただでさえ冷静を失った民心に不安と動揺を与え、自警団を組織させ、朝鮮人と思えば撲殺し、軍隊、警察も内乱鎮圧の演習として直接手を下し、朝鮮人、社会主義者を犠牲にしたことは、永久に忘れることのできない恨事でした。・・・

さて私の家ははじめの一震でペチャンコになり、私は梁の下敷になってしまいました。しかし、何が辛いかわかりません。若いころ病気勝ちだった体をきたえるために、から手を稽古したことがありましたが、針金を胸に撒いてブツリと切るぐらいのことは当時でもできましたが、そのから手の呼吸でどうにか危地を脱することはできました。しかし、東京は壊滅です。芝居や絵どころではなくなりました。家がつぶれたので行くところがない。倉田先生のお家は幸いつぶれずにすみしましたから、あとのことを頼んでひとまず東京を引きあげることにしました。・・・

東京を離れるに際して私は倉田先生から、大阪におられる小山内薫先生に会って身の振り方を相談するようという紹介状を頂きました。当時小山内先生は大阪のプラトン社という出版社の編集顧問をしておられ、月に一度ずつ下阪することにしていて、家族連れで関西に来ていて震災を知り、大阪定住を決意しておられ

た。私は伊丹に腰を落ち着けるとさっそく大阪へ先生を訪ねましたが、先生の頼みとする有楽座、明治座、市村座など都心部の劇場はみな焼け亡び、東京の再起はむずかしいのではないかと悲観的で腰をあげる様子はみられませんでした。

私は仕方なく伊丹で再び絵をかきはじめました。地三の手を引き、つま子を乳母車にのせ、自分はカンパスと絵具、それに酒をつめた魔法ビンとをかついで、尻端折りをして毎日絵を描きに出かけましたが、煙草は両切では面倒なので、葉巻にしましたから、伊丹のような田舎ではたちまち名物おとこになってしまいました。①

築地小劇場の明星となる田村秋子の父は、戯曲家田村西男にほかならず、花柳界を題材とする彼の作品も帝国劇場や新橋演舞場で上演された。大地震の数ヵ月前女学校を卒業した秋子は、親睦会の素人芝居で初めて舞台に立つ。出しものはプーシキン原作の『大尉の娘』であり、父の縁故で新派の名優、花柳章太郎と井上正夫から事前に指導を受けた。彼女の経歴については聞き書き『ひとりの女優の歩んだ道』で伝えられる。

素人芝居の経験（田村秋子・小山裕士共著『ひとりの女優の歩んだ道』）

あたしは小劇場に入る前の年に、父に勧められて初めて父たちのやっていた通話会の舞台に出て、生まれ

① 薄田研二著『暗転―わが演劇自伝』四二―四五頁。

て初めて芝居というものをしたんです。神田女学校を卒業した年でしたわ。通話会というのは文士劇ともいっていましたが、あたしがでた頃は他の職業の方たちも多く、同好の士の集まりとでも申しましょうか、坂本猿冠者、鳥居清忠、三宅孤軒といった方々がスターでした。出た動機は自分が舞台をやりたいっていうじゃなくて、「人の前で芝居みたいなことをするのはずいぶん面白いよ。いちど経験してごらん」という父の無責任な進め方につて、引っぱり出されたんですよ・・・

『大尉の娘』の初公演というのは花柳（章太郎）さんと井上（正夫）さんが初めて二人でおやりになって、前の月にたいへんな評判だったんです。通話会で『大尉の娘』をやるうということになったのも、先月のその舞台装置がそのまま同じ明治座に残っているの、それを使えばいいっていうんで、選んだ出しものだったんです。で、あたしがとにかく一応やったら、井上さんはじつと黙って見ていらっしたんですが、何もおっしゃらないで、仏頂づらをして、いきなり羽織をお脱ぎになったんです。そして「これから私がお父さんの役をやってあげるからやってごらんさい」とおっしゃって、素人の女の子を相手に、そりゃもう本気でやって下さるんです。井上さんって偉い役者だと思いましたわ・・・とにかく夢中で汗だくで、その芝居であたし、芝居っていうものが忘れられなくなりましたし、芝居っていうものの魅力にとっつかれたかも知れないんです。それ以前は芝居をしたっていうような気持ちは毛頭なかったんですけど、その芝居がすんでラクになって、この芝居の役にさようならかと思うと、たまらなくなりましたね・・・

通話会の素人芝居に出たのは、それ一回きりなんです。それから震災にあったのですから。あたしのそんな気持が父親にもわかったのでしょうか。「君ね、芝居したいだろう」と言っただけですよ。地震の最中に、ほうぼう避難して歩いてる最中に。で、あたしは言っただけです。「芝居したいわ。でも、あたしのような者

は役者になれない。」それよりも地震で焼けだされたあたしは、どこかに職をさがしてお金をとることを考えてたんですよ。ところが父はこういうんです。「どうせ何か仕事をするんなら雑誌の仕事をしろ。小山内さんがプラトン社にいるから、もしかすると、その女書生に使ってくれるかもしれないよ」って。そして大阪に行つてらっしゃる小山内先生に父が手紙でお願いしたら、先生、「僕たちの小劇場が近い将来に出来る。そのとき研究生として入れるからそれまで東京にいて待て」とおっしゃって下すつたんです。「ああ、あたしはまたまた芝居が出来る」―あたしはすっかりうれしくなっちゃいましたね。①

房総半島北条へしばらく転居した及川家では、避暑地での快適な自然と交遊によつて娘道子の健康もかなり回復した。小学五年生の夏休みも明けて、帰京と登校の準備を始める九月一日、館山湾沿岸も激震と津波に襲われる。道子など子ども三人は倒壊する家屋の下敷きとなり、辛うじて知人に救出された。自伝『いばらの道』には苛烈な地震と避難の様相が、繊細な感性をとおし痛切に語られる。

房総で倒壊する家屋の下に（及川道子著『いばらの道』）

いよいよ今日から九月という日は、朝早く通り魔のようなひどい嵐があつて、それが過ぎた後は、また気味の悪い程のいいお天気になりました。お昼近く母は裏の井戸端でたらい一杯のお洗濯に忙しそでした。

① 田村秋子・小山裕士共著『一人の女優の歩んだ道』白水社、一九六二年。一二―一三、一五―一七頁。

父は一等小さい弟の菊夫を抱いて、お守りをしながら庭を散歩してられました。和夫と冬生は奥の間で佐々木さんを相手に何かおもちゃをいじって遊んで居りました。そして、私と強子と従姉の浜ちゃんとの三人はお茶の間でおままごとに夢中でした。

そのお茶の間の窓近くには大きな橙の木がありまして、その実を取つて遊んでいたのですが、丁度強子がそれを採ろうとして、手を伸ばした瞬間、不意に沖の方で雷の鳴るような音がしたかと思うと、いきなりミリミリ、バーンバーン、ガクガク!という物凄い響と共に、柱は折れ曲り、襖障子は弾け飛び、壁は崩れ落ち、家は今にも揉みつぶれるようで、畳はまるで波のように揺れうねり、棚の上のものは何一つ残らず転げ落ち、一瞬にしてあたりは言語に絶した修羅場と化していました。

私はとっさの場合に、日常父から地震の時はあわてて外へ出てはいけない、と教えられたことを思い出し、三人一塊となつて、畳にうつ伏してしがみついていた。いえ、その場合出ようにも、どうしようにも、立つことはおろか、腹ばうことすら出来ないのです。・・・

そのうち震動が少し小止みになった隙を見て、佐々木さんに抱かれるようにして、弟達は戸外へ飛び出して行きました。これを見て私達もこの時だと思つて、三人一緒に二、三歩歩みかけた時、ああ何という恐ろしいことだったでしょう。前よりも一層物凄い地鳴りと共に、もっと激しい震動が襲つて来たと思う間もなく、倒れかかっていた柱、崩れ残っていた壁、そして落ちかかっていた天井が、この時とばかりに鋭い悲鳴をあげて、一時に私たちの上に覆いかぶさつて来ました。手をひいていた妹を護ろうと、自分のからだを伏せた瞬間、どしりと重い板のようなものに抑え付けられたと思うと、そのままあたりは真暗闇になって、何も見えなくなっていました。・・・

屋根、天井、柱と三重にも四重にも抑えつけられた私達を掘り出すには、とても父と佐々木さん二人の手に合わず、と云って隣近所どこでも皆同じように困っている時とて、手伝って貰うことも出来ず、氣ばかりあせって弱り抜いておられるとき、折良くいらつした高等師範の方々に手伝って貰って、先ず従妹、それから私と掘り出されましたが、最後の強子は大きな重い柱に片方の足を圧しつけられているので、これを引き出すのに随分手間取りました。その間強子が腹を千切られるような悲しい声をしぼって「もうこれからいい子になりますから、助けてください！」と泣き叫んだあの有様がまだ目にみえるようです。

こうして幸いにも一同命に別條なく、顔を合わすことが出来て、庭の大きな橙の木の下に、寄り添ってホット一息ついていると、またしても大きな震動がやって来ました。薄気味悪い地鳴り、亀の甲形に裂けて行く地割れ、そこから噴き出す水、そしてあちこちに起る人畜の悲鳴―これこそ全くこの世の終りかと思われました。

この時父はつと立ち上り、泣き叫ぶ一同をおししずめながら、諄々とした非常時に処する態度を訓えたのち、両眼に涙を浮べながら悲壮な声を張り上げて、「主よ　みもとに近づかん　のぼるみちは　十字架にありとも　など悲しむべきや　主よ　みもとに近づかん」と讚美歌を歌い出しました。そして、歌い終ると一同深いお祈りをいたしました。

このとっさの場合の、こうした父の落着き払った態度に、威圧と限りなき信頼を感じてか、付近の人々までもが、私たちのまわりに寄り集まって来て、みな一様に鳴りをしづめて父の言葉に耳を傾けていました。

するとどこからともなく、津波が襲って来るかもしれない、という警報が伝って来ましたので、みんな山の方へ逃げなければならなくなりました。強子だけは足を柱で押しつぶされて、ひどい怪我をしてとても歩

けませんので、米屋のリヤカアを借りて運びました。

山の上に来て見ますと、そこはすでに避難している人々で一杯でした。泣くもの、喚くもの、唸るもの、また傷けるもの、死せるもの―折柄後ろの森に沈もうといっている赤い夕陽にてらされて、それらの人々の姿は戦乱の巷もこうあろうかと惚ばれるほどでした。

ところが夜に入ってから、ここもまだ不安だと云うことになり、子供たちだけでもつと上に登って、そこにやっと落ちつきました。そして毛布を敷いて貰って休みましたが、いつ襲うかも知れない地震と津波に対する恐怖に加えて、折柄燃え続けていた隣村の山火事が、だんだんこちらにも移って来そうに見え、燃えさかる火を見ては、恐怖が募るばかりで、周囲はいつまでも騒々しさが止まず、殆ど眠ることも出来なませんでした。

それでも明け方少しは眠ったものと見え、朝眼を覚まして、何気なく上を仰ぎますと、そこにはいつもの天井の代りに低く覆いかぶさった松の枝の隙間から高い空が覗いていました。そして、丁度東の空には真紅な太陽がやつと上りきったところでありました。

隣りに寝ている強子ももう目を覚まして、繃帯を巻きつけた足を毛布の裾からのぞかせて、痛そうに顔をしかめながらも、心配そうに私の方を見守っています。私はふと寝返りを打とうとして、体を動かしますと、胸のあたりがズキンズキン痛むので、恐るおそろる手を触れて見ますと、いつの間にか繃帯が幾重にも胸に巻きつけられていました。―あとで知ったのですが、屋根の下敷きになったとき、肋骨を挫かれていたのを、寝ている間に手当されていたのです。

段々明るくなるにつれて、周囲に目をやると、右にも左にも、前にも後ろにも、頭や手や足を繃帯した怪

我人や、むしろや布切れに包まれた死人が無数に転がっています。私はその惨状にゾツとしてしまいました。その日のうちに、海岸にあったパーラーの天幕を持って来て、諏訪森の丘に小屋を建てて、その中に私たちは収容されて、こうして私たちの山の生活がはじまったのです。

①

料理の達人としても著名な女優沢村貞子は、歌舞伎作者の娘として生まれた。同家の息子たちは子役としてはやくから舞台に立ち、兄は四代目沢村国太郎、弟は映画俳優加東大介として大成する。男女平等を旨とする第一高等女学校で学んだ長女貞子は、女優として立てる新劇の道を志し、まずは築地小劇場の山本安英に相談の手紙を送った。彼女が大地震に襲われたのはその数年前、女学校三年のときである。大火によって浅草猿若町の自宅は焼尽し、父と母がひととき行方不明となった。衝撃を受けたのはまさに台所で昼食を用意するさなか。気丈な母親は娘らへさきに避難するよう命じ、みずから脱出したあとは浅草寺の炎上防止を人々に督励した。

歌舞伎一家の震災体験（沢村貞子著『貝のうた』）

大正十二年九月一日の関東大震災は、私が女学校の三年の二学期、始業式の日起こった。学校から帰った私は、昼ご飯の仕度をしていた。父母も弟も芝居へ出かける直前だった。兄はひいきの客に連れられて、箱根へ行っていて留守だった。毎月朔日、十五日には小豆ご飯を炊くのが、芝居ものの習慣である。でき上

① 及川道子著『いばらの道』紀元書房、一九三五年。四四―五二頁。

がったご飯をお櫃に移し、お豆腐のおつゆの味をみようとお皿に口をもって行ったとき、突然ブーツというなり声とともに家がぐらぐらとゆれ、あわててガスの火を消した私は、足がもつれて屍餅をついた。まわりじゅうの壁がバラバラと落ちて、鍋の中が白くにごった。

二階で掃除をしていた母が、階段から転げ落ちながら叫んだ。「早く火を！ガスを消して！」また激しくゆれて、やっとガスの元栓をしめた私の足元に、鍋が引っくりかえった。新聞をよんでいた父は、敷いていた座ぶとんを頭にのせて「ナミアミダブツ、ナミアミダブツ」と口の中でブツブツ唱えるばかりだった。そのまま動かないのは腰が抜けたらしい。

案内柱がしっかりしていたのか、わが家はひどくゆがんだだけで、つぶれなかった。丁度昼飯時だったせいもあって、あつという間に八方から火の手が上がった。みようにシンとした異様な空気のなかに、激しい叫び声、泣き声が鋭く耳を破った。余震は絶え間なくつづいた。

「私と父さんはもう少し様子を見るから、あんたたちはとにかくさきへ逃げなさい。」母は急いで小豆ご飯のはいったお櫃と三本の鯉節を私にわたしながら言った。弟にはお湯のはいったままの鉄瓶をもたせた。吾妻橋を渡って向島で落ち合う約束しているところへ、父の妹ひさ伯母とその養女で私たちの姉せい子が、着のみのままで転げながらたどりついた。ほんの一町と離れていないのに、ここまで来るのが命がけだったと、叔母はあおい顔でオロオロ泣くばかりだった。母の姉とみ叔母もかけこんできた。

「とにかくこの子といっしょに先にお逃げなさい」母は私の腰にずっしりと重い袋を結びつけた。五銭白銅ばかりはいった、うこんの財布である。そのころの芝居の当たり祝、大入り袋の中身は五銭の白銅玉だった。これが好景気時代の、母のただ一つのへそくりだった。

結局私たちは母と約束した向島へ行けなかった。吾妻橋の上で向島から逃げて来る人波に押し返されてしまった。川の向こうもあちこちに火の手が上がっていた。やっと上野の山へたどりついて、その夜をすごした。西郷さんの銅像の傍へやっと座れるだけの席をとった。あたりはいっぱいの人だった。その人たちが夜ふけとともにものを言わなくなった。不気味な静けさのなかで、動物園のライオンや虎のうなり声だけが、ときどき大きくこえました。上野の森から見おろす下町には、何十本もの真っ赤な太い火柱が、空を焦がすように傲然と立っていた。仮借なく人間たちを焼き殺す地獄の火が、どうしてあんなに美しく見えたのだらうか……

母はきつと生きている。そして父を守っているにちがいない。私はそう信じていた。夜の明けるのを待って、私はその付近の貸家をさがした。庇が落ちて、ひどく汚いけれど、安い家が見つかった。屋根さえあればそれでいい。大家さんの米屋の主人に一生懸命たのみこんだ。やっと承知してくれた米屋さんは、畳の上に五銭白銅を前家賃として並べる十四歳の少女の顔を、あきれたように見つめていた。お米に味噌、鍋とふとんの借り賃を払っても、白銅はまだ何枚が残った。

二人の叔母と弟をそこに残して、私と姉は父母をさがしに浅草へ向かった。道々まだ何べんも自警団に認められて本籍姓名をいわされた。恐ろしい噂はますます拡がっていた。焼けたあととはまだブスブスとくすぶっていた。こわれた蛇口からチョロチョロと流れでる水で、草鞋をしめさなければ歩けなかった。地熱で足の裏がやけどしそうだった。

そこだけがたった一カ所焼けのこった浅草観音堂へたどりついたのは、夕方近かった。境内には運よく命びろいをした人たちがいっぱいだった。「加藤伝太郎さーん。加藤マツさーん」姉と私は声をからしてよび

歩いた。本堂の前の大銀杏の根もとに張ったボロ切れのテントから、「ここだよ！ここにいるよ！」母が這いだしてきた。つづいて父も「おい、無事だったか」と涙を浮かべてすがりついた。自慢の高い鼻が、すりむけて赤くなっていた。

「あら、貞ちゃん」近所の半玉のうさぎちゃんも、どろんこのアッパツパで顔をだした。長唄のお友達である。まっ黒に煤けた顔にサンバラ神ーどうみても浅草きつての売れっ子の雛妓とおもえなかった。うさぎちゃんは「お貞ちゃんとおばさんのおかげで助かったのよ。たのしかったわ。おばさんは、ほんとうに、」と溜息をついた。

その話によると、母は命からがらここへ逃げこんだ人たちを叱咤激励して、本堂に火のうつるのをふせいだという。そしてどうやら火が消えて、やっと落ちつくと、味噌屋の焼けあとからは焼け味噌を、肉屋の店からは焼き肉を掘り出して、まわりの人たちに公平にわけ、飢えをしのがせたそうである……

私たちが家を逃げ出すと間もなく、三方から火の手がせまり、さすが気丈な母もつづら一個をを背負って逃げるのがやっとなかった……すぐ目と鼻の瓢箪池にはまだ死体が浮かび、本所の被服廠あとでは、逃げこんだ人たちの持ち込んだ荷物に火がつき、三万人あまりが焼け死んだとまわりの人が声をひそめて話していた……

年も押しつまって、浅草の焼けあとにバラックができた。大工の叔父が「はやくお貞ちゃんを引きとってやらなければ、」と、一生けんめいに奔走くれたおかげである。一時しのぎのお粗末なものだが、私には御殿のように見えた。東京っ子の復興の努力はめざましかった。近所の人たちも、その年のうちにあらかた帰

沢村貞子が育った芝居街浅草猿若町は、水野忠邦による天保の改革に起源を有する。町人の暮らしを取り締まり、奢侈・遊興を禁じる水野は、城下より離れた浅草にのみ、芝居小屋の建設を許した。そのため浅草寺北方が猿若町と改称され、市村座、中村座、河原崎座の三座が鼎立して、芝居茶屋が並び芝居関係者もここに移住する。以後「猿若町にのみ演劇の隆盛を誇るに至」り、「劇道の発達とともに江戸の好事をここに蒐め、為に櫓簾え旗幟翻るに至」った。市村座では幕末に河竹黙阿弥の『三人吉三』が初演され、大正に入るや五代目尾上菊五郎と初代中村吉右衛門による黄金の菊吉時代を呼び寄せた。②

明治十九年浅草公園において瓢箪池の開削がなされ、四年後には千束町に十二階建ての凌雲閣が完成した。これを中心として周囲の浅草六区には興行街が発達し、浅草寺詣でや吉原通いの途上にも寄る盛り場ともなる。島村抱月による芸術座の消滅、さらには小山内薫による自由劇場の活動停止によって帝国劇場が不振に陥ったため、伊庭孝や石井漠など丸の内新劇の落武者は、六区の日本館、金竜館、観音劇場に活路を求めた。大衆的な浅草では音楽と舞踊が主体であって、新劇はオペラに挟まれてわずかに上演される。③ こうして大正六年頃から浅草

① 沢村貞子著『貝のうた』新潮社、一九八三年。四五―四七、四九―五一、五五頁。

② 新実武編『浅草猿若町』新実商店、一九七三年。四七―五〇、八九―九〇、一〇三頁。

③ 松本克平著『日本新劇史―新劇貧乏物語』筑摩書房、一九六六年。三二五―三二七頁。

オペラは最盛期を迎え、日本館における東京歌劇団の『天国と地獄』や金竜館における根岸大歌劇団の『釈迦』が人気を集めた。しかし、関東大震災は猿若町の芝居小屋をすべて焼き尽すとともに、六区の興行街をも焦土と一変させた。

大震災と浅草興行街（内山惣十郎著『浅草オペラの生活』）

九月一日午前十一時五八分。突如として襲った関東大震災に、歓楽街浅草公園は一瞬にして猛火に襲われ、生地獄となった。金竜館の舞台ではその時佐々紅華作のお伽歌劇『カチカチ山』を、杉寛のタヌキ、高井ルビのウサギで熱演の真最中、天地が崩れるばかりの大動搖に、木造作りの楽屋は大波のように揺れ、道をへだてた公園劇場とハチ合せをせんばかりの凄まじさに、女優連中は悲鳴をあげて、狭い階段を転がるように表へ飛び出した。

六区は各館から溢れ出た観客が、猛火と煙の中を逃げまどい、杉寛はタヌキの縫いぐるみを着たままで、群衆を押し分け掻き分け、無我夢中で瓢箪池の中の島までやっとたどりついた時、一大音響を立てて十二階が真ん中から折れて崩れ落ちた。歌劇の殿堂金竜館も日本館も、いや浅草公園は観音堂が奇蹟的に残っただけで、あたり一面荒涼たる焦土と化してしまった。

本城を失った歌劇人は、再建の日までと、東京を後に地方巡業に出たものの、楽譜は焼け衣装は焼け、満足な興行は出来なかった。それでもふたたび六区復興の日、オペラ再興の日を夢見て、北に南に旅巡りを続けて露命をつないだが、さて復興の浅草は、地方から入りこんだ大工、左官の職人たちの天下で、オペラフ

アンの学生、サラリーマンは姿を消し、観客層はガラリと変っていた。

翌十三年四月浅草劇場にオペラ残党の役者をかき集めて森歌劇団を結成。だが、スリルとスピードとエロチシズムをもつ剣劇と安木節が六区興行街を風靡し、さしも全盛を誇った浅草オペラは、ついに再びその華やかな幕を開くことなく、関東大震災と共にフィナーレとなってしまったのである。①

大震災火災により首都の興行界が壊滅するなかで、帝国劇場は巨費を投じて再建工事を急ぎつつ、早急の営業を企画した。早くも十一月九日から三日間、帝国ホテルの演芸場を借り、ヤッシャ・ハイフェッツのヴァイオリン演奏会を催したのである。同じ仮舞台で同月松旭斉天勝の一座の奇術、翌月には舞台協会により山本有三の戯曲『生命の冠』などが演じられる。大正十三年二月には麻生南座で守田勘弥一座が武者小路実篤作『桃源にて』を、また報知講堂では佐々木節一座が坪内逍遙訳の『ヴェニスの人』を披露。震災により帝国劇場専属の俳優は多く解雇されたものの、残された少数の女優が南座などの舞台にも登場した。同年十月ようやく帝国劇場の再建が完了し、改装記念として平山晋吉作・幸田露伴加筆の『神風』を尾上梅幸、松本幸四郎、守田勘弥が演じ、招かれた中国の名優梅蘭芳とその一座もここで公演する。②

① 内山惣十郎著『浅草オペラの生活』雄山閣出版、一九六七年。一一九―一二〇頁。

② 『帝劇の五十年』東宝株式会社、一九六六年。一一八―一一九、一八二―一八五頁。

〔物語〕 関東大震災からの復興と築地小劇場の興起―小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子―

第五節 震災からの復興と築地小劇場への準備

帝国劇場などの営利主義と低俗に失望し、震災の社会的衝撃も加わって苦衷の淵に沈む小山内薫を再起させたのは、フランス、ドイツ、ソビエトで演劇を学んだ土方与志の帰国である。大地震のほぼ四カ月後神戸港に着いた土方は大阪に住む小山内薫を訪ね、かつてふたりで夢想した小劇場を実現すべく、バラック劇場建設の構想を示した。

築地小劇場創設への準備（小山内薫「築地小劇場建設まで」）

そこへ、ヨーロッパから土方が帰ってきました。土方はロシアを―赤いロシアを―通って帰ってきました。そして二カ年のドイツが一週間のドイツで解決されたと言いました。土方はこれからどうしようと言いました。私は土方の留守の間に私の経て来た心の動きを話しました。そして先ず東京へ行って、今の東京を見て来いと言いました。

土方がどう東京を見たか、それはここには言いません。暫くすると突然土方がまた大阪の私の処にやって来ました。そして吾々の劇場を建てようと思うがどうだと言うのです。バラック劇場の建設が許される。そしてここ五年間はそれを吾々の舞台とする事が出来る。本建築で吾々が劇場を持つという事はいつ出来るか

分らない。バラックなら吾々の劇場が持てるのだ。

吾々の劇場―自分達の研究劇場―それが持てるという事は、私にとって可なり強い誘惑でした。私は何も考えずに唯それだけの誘惑に引つ張られて行きました。「よし、やろう」私は直ぐに賛成しました。それがこの正月の三日でした。それからこの五ヵ月―それはすべてその為の準備に費されました。

準備と何ですか。先ず同志を糾合することでした。若い同志が集って来ました。毎日のように議論がありました。そして最後に組織せられた同人が、演出家としての土方と和田精と私と、俳優としての汐見と友田と、経営者としての浅利鶴雄とでした。この同人六人はこの劇場の経営維持に同じ程度の責任と義務とを持つものでした。土方の劇場でもないのです。小山内の劇場でもないのです。同人間には上下も軽重も階級もありません。劇場はこの六人で共有するものなのです。

敷地の選定、警視庁の許可、それにも二ヵ月以上の考慮と奔走とが費されました。建築のプラン、舞台設備の設計、観覧席の研究、それにも一ヵ月以上が費されました。今年一杯の演出目録の予定、同人以外の同志―その内には俳優もあり、照明家もあり、舞台装置家もあり、舞踊家もあります―が集められました。

議論又議論、熟読又熟読、一つのアンサンブルとしての基礎は漸く固くなって来ました。最初に俳優の基礎教育が始まりました。建築に就いて当局との交渉も円滑に進みました。四月二六日の朝、筑地二丁目の小さな敷地に縄張りが施されました。その後には武藤山治氏の二千人はいるという演説場が既に天を衝いています。その隣りには団十郎座の建築が既に計画されています。政界革新の機関に利用されようとする舞台と瀕死の吐息をつきつつある古典的歌舞伎劇の保存に供せられようとする劇場との間に介在して、吾等の劇場はそもそも何をするのでしよう。それはここには申しません。唯見て下さい。見ていて下さい。・・・

築地小劇場に於ける私は今までの私とは全く別のものでなければなりません。私はそれが為に幾多の批難を受ける事を予期しています。幾多の友人を失望させるに違いないと思つて居ます。

私はもう単なる舞台の芸術家ではありません。私は一つの全人格としてこの劇場の中で働きたいと思っています。私は一個の芸術家であると共に一個の哲学者であり、社会学者であり、同時にまた民衆のリイグアであり社会改良家であるだろうと思います。私は自分の今まで持っていた、又自分に今までくつついていた総てのものから解放されたいと思います。その解放をこの劇場から求めるのです。私は生まれて始めて何者にも拘束されない自由な国をこの小劇場の舞台の上に見出だそうとしているのです。

今この部屋の上で、ゲーリングの『海賊』の稽古が始まっています。恐ろしい速度で弾丸のように詞が飛んでいます。大砲の響が時々家を動かします。神を祈る者があります。服従を否定する者があります。異常な情欲に燃える者があります。氣狂いになろうとしている者があります。それは戦争です。しかもその戦争の行きつく処は何でしょう。―吾々は今戦争に直面しています。そして吾々の目的は何でしょう。弾丸が飛んでいます。火煙が上がります。砲弾は吾々を震撼しています。吾々は何処へ行くのでしょうか。誰も知りません。しかし、知っている者があります。少なくとも知っている者が一人はあります。①

旅行中の東北から九月六日帰京した秋田雨雀は、翌月より被災者の艱苦に着想した戯曲を執筆する。早くも

その時点で自身の代表作『国境の夜』が東洋大学の屋外舞台上演され、これを観劇しつつ秋田は、復興の世相と劇壇の再起を注視していた。

震災からの復興と演劇の再建（秋田雨雀著『雨雀自伝』）

関東大震災は大きな傷あとを日本の社会に残したまま、一歩々々記憶の世界へ過ぎ去っていった。しかし、いつでも耳を澄ますと、どこかで人々の泣き叫ぶような声がしていた。人々はちよつとした物音にも強い衝動を感じた。一旦京阪やその他の地方へ逃げのびた人々も、そろそろ東京へ帰って来た。復興！復興！という声は機械的に響いている。内包した矛盾をそのままにして、日本の社会は復興事業に急いでいる。ローマの廢墟のような東京の焼土の上に、バラック建が一通り立ち並んでいる。すいとかんや安てんぶら屋の店がバラック建のカッフェに早変わりしたり、そばやの店が半分土間になって、円テーブルに椅子が並べられたり、子供洋服の店や石油コンロの屋台店が毎日のように殖えていったりした。そして動物の焼けただれたような臭気が、砂ほこりといっしょになって植民地のようなバラック建の上を吹き捲くっていた。その中を人々は血走ったような眼をして、そのくせどこか浮わつたような足どりでぞろぞろ歩いていた。これが大震災の翌年の春ころの東京だった。・・・

大きな社会激動の直後に来る芸術が、詩および演劇であることは、ロシア革命の場合によっても証拠だてられているが、震災直後に起った芸術は、日本では演劇の復興であった。沢田正二郎は震災前から浅草で芝居をしていたが、この年の一月にはバラック建の劇場で『国定忠治』『日蓮上人』および『震災余聞』の三

つの作物を上演していた。沢田は前にも記したように、表現力の強い俳優であったが、生活態度の英雄主義的傾向から、次第にファッショ的になっていった。この傾向のテンボを早めていったのはやはり大震災による自然的・社会的脅威であった。このころの沢田正二郎は、すっかり『国定忠治』になりすましていた。

私はこのころ佐々木孝丸、佐藤青夜、川添利基などと先駆座の仕事をつづけていた。この座は最初小ブルジョアの演劇研究者の集団であったが、土蔵劇場の試演後大震災に逢い、この年スコットホールにアナトール・フランスの『運まかせ』、ストリンドベルヒの『仲間同士』および私の『水車小屋』をやった。舞台装置は柳瀬正夢であった。この演劇研究のグループは、劇場商業主義に対する反対を標榜し、エレオノーラ・ジョーゼの言葉を引用して All or Nothing（凡てか無か）のスローガンを掲げていた。しかし、このスローガンのかげに既に二つの対立した力が動いていた。一つは社会的なものであり、他は芸術至上主義的なものであった。前者は後ではランク劇場、前衛座等のプロレタリア演劇の創立の一要素となった。

小山内薫はこの年、築地小劇場の旗揚げとともに華々しい活動を開始した。この劇場は、若き演出家であり、出費者である土方与志との芸術的協力によって創立されたもので、その第一回の公演はゲーリングの『海戦』によってはじめられた。これは文字通りの『海戦』であった。小山内は自由劇場の失敗いらい長く休火山の芸術生活をつづけていたばかりでなく、この演劇行動によって再びその存在を認められ、またその敵である程度まで屈服せしめたという感じがした。小山内と当時の論敵との対立は、小山内の芸術至上主義と小

ブルジョワ的通俗主義との対立であったと私は理解している。①

つとに大震災の二年前小山内薫は、創られべき非営利主義の小劇場について述べ、ヨーロッパにおけるその特質と歴史を語っていた。一八八七年パリにおいてアンドレ・アントワヌが素人俳優の一座を組織し、〈自由劇場〉の名で新進作家の戯曲四つを上演したのが、小劇場の嚆矢とされる。フランスではポオエの〈制作劇場〉やルウシエの〈美術劇場〉がこれに相継ぎ、戯曲の選択、演技の手法、舞台の装置に斬新な試みがなされた。ドイツやポーランドでも小劇場が誕生したあと、一八九〇年ロシアでモスクワ芸術座が創立され、動乱と革命の最中にも高い芸術水準を維持する。②

小劇場の革新的な特質（小山内薫「小劇場と大劇場」）

〈小劇場〉というものの出来た来た理由はどこにあるか。〈小劇場〉の「存在の理由」は何にあるのかと申しますと、先ず第一が舞台と見物席とを近いものにする―即ち役者と見物とを親密な関係に置くというところから起って来ています。〈小劇場〉運動の始まるまでは舞台と見物が余りに隔離していた。・・・それ

① 秋田雨雀著『雨雀自伝』一〇五―一〇六、一〇八―一一〇頁。

② 小山内薫「小劇場と大劇場」（『小山内薫戯曲全集』、未来社、一九六五年。第二卷〈築地小劇場篇上〉二六―二八頁。）

故近代の自然主義的な、または日常生活的な戯曲を芸術的に演ずるには多くの不便と不可能があった。それが〈小劇場〉というものの案出で、一部の解決を見たわけです。第二には普通の劇場ではやれそうにもない商売向きでない戯曲を心配なしに演ずるという事、第三には上演目録を作って、それを一日変りに演ずる制度（即ち同一の狂言を毎日続けてやらないという制度）と見物に座席の予約をさせるという制度（即ち選ばれた見物を集める制度）を置くという事、第四にはいろいろ変った舞台装置をして見る一種の舞台研究室にするという事、先ず大体そういった理由から生れて来たのが〈小劇場〉の運動なのです。

それ故〈小劇場〉というものは、「非営業的」であるというのが、その第一の要素で、見物を大勢呼ぼうとか、大儲けをしようとかいう事は、全然考慮に入れていないのであります。詞を代えて言えば、〈小劇場〉というものは「劇に対する愛」から起ったもので、「利益に対する愛」から起ったものではないのであります。最近バリーに於けるこの種の運動で世界的の名譽を得ているコロンビエ劇場のジャック・コポオなどは、明らかに自分達が「営業的劇場」の敵である事を宣言しています。それ故見物席も少ないのが普通で、先ず七、八十から三、四百が留まりになっています。そして、この種の劇場に集まって来て、働いている連中は、役者でも、戯曲作家でも、舞台装置家でも、電気技師でも、舞台監督でも、そんな同じ芸術的な動機と感激を持っているのです。簡めて言えば、〈小劇場〉というものは常に芸術としての劇の「研究室」でなければならぬのです。それが〈小劇場〉というものの最も重大な任務なのです。①

① 小山内薫「小劇場と大劇場」（『小山内薫戯曲全集』第二卷、二五頁。）

ヨーロッパからの帰途練り上げた構想に小山内の賛同を得た土方与志は、団員の結集と劇場の建設に着手する。劇団の中枢は小山内を含む同人六名であって、自由劇場以来の盟友たる市川左団次は、築地への参加を固辞したとされる。

築地小劇場への設立準備『演出者の道―土方与志演劇論集』

十二月の終わりに私は神戸に着いた。その翌日すぐに大阪に住んでおられた小山内先生を尋ね、帰国決意以来の私の構想を話した。小山内先生は非常に喜ばれて、私が遠慮して持ち出した顧問になっていただくという要請を断られて、同人の一人として参加しようと語られた。この会見で始めて私の劇場建設の希望は実現の第一歩を踏み出すことが出来た。早速帰京の途についたが、横浜駅辺りにはまだ煙りや死体のおいさえ感じられた。東京に着くとこれも一面の焼け野原で、方々ヒビの入ったレンゲ建ての私の家は、避難して来た親戚や知人でごった返していた。

早速私の構想の中であって、小山内先生の承認をも得た、今後いっしょに仕事をして貰う人たちを集めた。そのなかには故友田恭助君がいた。彼とは中学生時代、二人の別荘が茅ヶ崎にあったので、夏休み毎に南湖座―友田君やその大勢の従兄弟達のために出来ていた茅ヶ崎南湖在の別荘の松林のなかに建っていた物置兼踊り屋台である―で近隣の別荘客や地元の漁師のおかみさんを観客として、茶番や一幕物等を演じて以来の友人である。その後ご友田が早稲田に進んでから、水谷八重子さん等と若者座を組織したり、畑中夢坡氏の

指揮する劇団に属して、ユニークな俳優としてその才能を認められていた。私は彼を第一に私の協力者として迎えることにきめていたのであった。友田君は築地小劇場でその名演技を発揮し、また愛妻田村秋子を得た。彼が上海事変に駆り出すされて非業の死をとげたことは、今さら惜しみきれない。幸い友田君の快諾を得て、小山内先生の次に彼を同人として入れた。

その他に私は慶大劇研究会や帝劇の裏方として活躍していた浅利鶴雄君や、有楽座でチェホフのマモメ等を初演した汐見洋君、私の模型舞台研究会や舞台の会以来の友人の和田清君等を同人に迎え、時々大阪から上京される小山内先生を交えて劇場実現の仕事を始めた。

まず最初の仕事は、焼跡に土地を捜すことだった。浅利君や和田君と私はドイツ以来のニッカー・ボッカーにアルバイター・ミュッツェー後の築地帽のモデルとなったドイツ労働者のかぶっている鳥打帽子のようなものをかぶって毎日東京都内を歩き回った。新宿にも神田にも目ぼしい土地はいくつもあった。たしか三十数カ所予定地を得た。まず一番手頃だと思われたのは駿河台であって、この土地を目標に建築プランを作り出した。名前を駿河台小劇場という事にし、ブループリントも出来た。

ところが突如、当時これも溜池の焼跡にバラックの演技座を立てて、沢田正二郎氏の新国劇をかけて、大儲けをしていた劇場主の初山半三郎氏から築地二丁目の持土を使わないかという申し出があり、急にそこを借地する事になり、建設に取り掛る事になった。すでに設計図は出来ていたので、バラック建ての劇場は着々と建ち上って行った。われわれは毎日建築上に行くのだったが、銀座三丁目の四ツ角に立つと、河原崎の手紙にあった通りの、飴のごとく曲がった鉄骨をおびやかしている歌舞伎座の廃墟をのこして、新しい木造の劇場の骨格が毎日形をととのえながら一面の焼跡のなかに建っているのが見えた。「駿河台小劇場」とい

う名称も急に「築地」に変わった。①

舞台や演技への準備は小石川の土方邸で進められ、伯爵夫人たる梅子もスタッフへの応対や世話に忙殺される。彼女の自伝では親しく描かれた俳優の横顔が興味ふかい。

築地小劇場へのスタッフ（『土方梅子自伝』）

与志が帰国して、六ヵ月ばかりのわずかの日数で、劇場建設と劇団の結成、上演へとこぎつけるのですから、そのテンポの早さは驚くほです。私どもの毎日がどんなにあわただしかったか、ご想像いただけるでしょう。与志が帰国した時は、大震災で焼け出された加藤家の祖父母を始め、親戚の人たちがまだ寄寓しておりましたが、やがてそれぞれ別荘などに落ちつきました。

私は親戚の世話が終わったと思う間もなく、新しい劇場と劇団設立の準備に忙しい与志を手伝って、てんてこまいの毎日になりました。毎日、毎日、朝から夜中まで大勢の人が出たり入ったりで、家中はひっきりかえるような騒ぎでした。庭の芝生では海水着を着てダルクローズのリズム体操を習っている人たちがいるかと思うと、家の中では発声をやっている人たちもあり、別の部屋では上演する三つの芝居の稽古、地下室の模型舞台研究所で装置や照明の研究、模型の作成に忙しく働いている人たち、庭も家もまるで戦場のよう

① 土方与志著『演出者の道―土方与志演劇論集』一二二―一二三頁。

でした。

食事時にはこの方たちに食事を出し、ビールを出す。一ダースくらいのビールはすぐなくなってしまう。酔って衣装の布の山にもぐりこんで寝てしまう人もいる。私は第一回の出しものの衣装も作らねばならない。敬太付のお手伝いさんはおりましたが、やはり母親としていろいろ面倒をみなければならぬ。ほんとうに一月から六月の開場の日までの忙しさは言葉につくせないほどでした。・・・

当時の日本はまだ新劇は目新しく、そのうえ芝居や役者に対して偏見のあったじだいですから、特に女優さん探しに苦労しました。客員として夏川静江さんをお願いするとともに、研究生に山本安英、田村秋子のお二人を迎えることができたのは幸運でした。

山本さんは小山内先生と与志が松竹女優養成所の講師をしていた時の生徒さんでした。帝劇で小山内先生の『第一の世界』上演の際、左団次さんの娘訃に抜擢され、新人女優としてデビューされたのですが。養成所が解散したため、家庭に帰って居られたのを先生と与志がひっぱり出したのです。

田村さんは作家の田村西男さんのお嬢さんで、文士劇に出られたことがあり、才能のある方と聞いて交渉しました。その頃は女優さんといっても、いまの新劇志望の若い人たちとう霧囲気も違いました。山本さんが見えた時はおさげ髪にセーラー服でしたし、田村さんも「父に連れられて土方先生のお邸のお伺いした時の私は、ひっこめ髪に、銘仙の着物、メリンスの花模様の帯に、日和下駄といういでたち」（田村さん談）でした。

新しい劇場と劇団創設が新聞などで報じられ始めると、新劇志望の青年の来訪もありました。築地発足の年の正月頃だったと思いますが、私が玄関に出ると、詰襟の学生服姿の青年が、もじもじしながら、「芝居

をしたいと思いますので、先生にお目にかかりたいのです」と言いました。服装から判断して「学生さんですか」と尋ねますと、「浅草で働いている者です」と、気弱そうにその青年ははにかみました。後に天才的と言われた名演技者丸山定夫さんは、このようにして築地の研究生になりました。

いよいよ築地に劇場が建て始められると、まだ大震災の傷のいえない東京のバラック建ての中に、ひときわ高く目立つ建物が銀座のあたりから見えました。電車を降りると焼野原の中に骨組みからだんだんと形を整えていく築地小劇場が目に入ります。劇場は命あるもののように新しい演劇をめざす私たちを勇気づけてくれました。開場が近づくと、

理想的小劇場の誕生

築地小劇場

真摯なる演劇研究機関の確立

とスローガンを描いたポスターが、あちこちに張り出され、また新聞や雑誌には小山内先生や与志たちの論文や談話が紹介されて、いよいよ雰囲気は盛り上ってきました。①

東京美術学校の図案科学生であった吉田謙吉は、劇団踏道社のポスターを描き、大地震の二年前卒業制作として油彩「ロココの誕生」を仕上げた。その後市村座における創作劇場の旗あげ、土方与志演出の『指曼外道』に

① 『土方梅子自伝』八七―八九、九三頁。

出演し、その機縁もあって築地小劇場の創立に参加する。俳優陣の手薄によってその一役をものになうが、舞台装置の要員である吉田は、稽古場たる土方邸の多彩なロココ風家具にまず魅了された。①

小劇場開演への舞台装置とポスター（吉田謙吉著『築地小劇場の時代』）

第一回公演の『海戦』の稽古が進められている。「弾丸のような」といわれたように、テンポの早いセリフが、飛びかうようにきこえてくる。舞台装置と同時に、第七の水兵として出演することになっていたばかりは、自分のセリフのきっかけ近くなっていると、急いで二階へ駆け上がった。①

こんどはその部屋でそのまま、舞台装置のデッサンを書きつづける。開場ポスターのデザインも急がなければならぬ。そのためにクレオンならどこでも描けるので、開場ポスターはクレオンで描くことにした。一つには従来のポスターとはまったく異なった新鮮さで、アッピールさせようと思ったからであった。小道具のいくつかの弾丸も、それを抱えて演技しやすい寸法を、割り出さなければならぬ。舞台に敷く黒い地がすりにも、表現派風のタッチをつけなければならない。衣装のよごしもある。すべて演出者土方与志との打合わせを欠かさず、デザインが完成するまでにおよそ四ヵ月近くかかった。・・・

そのころ地鎮祭もすでにすんでいて、築地小劇場の建設工事は着々進んでいた。震災後五年間だけはとく

① 吉田謙吉著『築地小劇場の時代―その苦闘と抵抗と』八重岳書房、一九七一年。二七―二八、三二―三三、五〇―五二頁。

に本建築でなくとも、ばらつく建てが許されていたことが、一面築地小劇場の建設を早めたのだった。

外装の足場のとれたのはいつであったろうか。観客席あたりの屋上に、換気塔が突き出ているのが、かなり遠くから見えるのに気が付いた。あれに「築地小劇場」と書いてはどうか、というぼくの提案で、さっそうペンキ屋を呼ぶことになった。・・・

開場と同時に思ったと思うが、ぼくのデザインした「築地小劇場」と染めぬいたベナント型の、天地三メートル近い大旗を、劇場の表がかりに、建物と直覚に突き出して取りつけた。・・・

正面の三つのアーチのうち、左手の二つのアーチは観客の出入りのためになっていて、右手の一つは同じカーブのアーチでかこまれた壁だが、そこには毎公演のホスターを貼り出すようになった。そのホスターは模造紙を三枚つぎだかにしたもので、毎公演ごとにほとんど大部分ぼくが手描きで描いた。一公演終わると、すぐつぎのレバトリのポスターと貼り変えるので、紙のはがしたあとが歴然と残っていた。①

大地震のため人形芝居の準備を中断しながら、それでも千田是也は十月の下旬知人の邸宅を借り、『アグラヴェーヌとセリセット』の試演会を催した。兄の伊藤熹朔らが人形つかいにあたり、麻布の会場へ招かれた約四十名には秋田雨雀も含まれる。朝鮮人騒ぎの受難から辛うじ脱した千田は、大杉栄と平沢計七の殺害を知り、その背景をも推察する。社会主義や無政府主義に目を開き、クロボトキンの著作『パンの掠奪』などを読むのはこの

① 吉田謙吉著『築地小劇場の時代―その苦闘と抵抗と』五四―五五、六八、七七―七八頁。

時期からである。① 築地小劇場の設立に参じた彼は、演劇の勉強に専念し、当初は俳優でなく、演出家を志望していた。

小劇場開演への作業と訓練（『もうひとつの新劇史―千田是也自伝』）

土方先生が急にドイツから帰られて劇場をお建てになるという話を私がいちばんはやく耳にしたのは、建築をやっている次兄の鉄衛からだだった。震災で小石川林町の土方邸の大きな煙突がくずれて屋根をつきやぶり、壁に大きなヒビがはいったとかで、その修理や、分割整理中の土方家の地所の基礎工事や塀づくりの御用を、この兄がずつとつとめ、新しい劇場の敷地さがしや基本設計にも、引きつづきご相談にのっていたおかげである。

どうしても芝居の仕事をしたいというのなら、思いきってこの新しい劇場で働かせていただいたらと鉄衛にすすめられた。私は大いに勇みたった。震災のあとで、なにか汗まみれになれる実地の仕事やってみたくてウズウズしていた時だったし、長男がわりの鉄衛の口添えとあれば、父母を納得させるにも都合だったからだ。こんな話があったのは、まだ震災の年の暮れのように思うが、劇場創立事務所二毎日通うことになったのは、年が明けてからだだろう。

創立事務所は土方邸の地下室にあった。食堂のわきの階段を降りて行くと、まずつきあたりに、まえに模

① 千田是也著『もうひとつの新劇史―千田是也自伝』六〇―六三頁。

型舞台のあった四坪か五坪の部屋があり、模型舞台の機構はもうとりこわされていたが、小山内先生が震災前に大阪へ移られるときあずけて行かれた厩大な蔵書や、土方先生が外遊中に集めて来られた何百冊もの演劇書が、本箱につめたまま部屋いっぱいに積まれ、大工さんが四方の壁に本棚をつくっていた。廊下をはさんだ階段の右手は十三、四坪の大きな部屋で、私なども手伝って、そこへ事務机や本箱や応接セットなどをいれ、まず事務所兼アトリエをつくった・・・

劇場創立事務所への舞台転換のお手伝いがひとわたりすむと、私は小山内、土方両先生の蔵書の整理を仰せつかった。この地下室に積んであった分のほかに、二階の土方先生の書斎にも、四間ぐらの片方の壁いっぱいに、本がならんでいた。芝居に関するかぎり、実にいい、珍しい本がやたらにあり、それを読ませてもらえるだけでも、ここへ来た甲斐があるような気がいた。別にいつまでもと急つかれぬのをさいわい、みんなが忙しそうに立ち働いているなかで、私は拾い読みをしたり、自分でノートをとったり、リストをつくったりしながら、のんびり本の整理をやっていた・・・

ここへ通い出した時分には役者をする気は全然なかったこと―ただ漠然と芝居の勉強をしたい、できれば演出もやれるようになりたいとしか思っていなかったことだ。そのうちいつか、演劇の基本は俳優の芸術であり、よい演出家になるには、まず俳優の芸術をきわめねばならぬときづいたといえおあつらえ向きだが、べつにそんなおぼえもない。やはり創立当初の人手不足のために若くて五体さえ満足ならばと間にあわせてに狩り出され、こっちもそれだけのつもりで、物は試しにやって見ただけというのが真相らしい。

どうせやる以上は、と友田、汐見、東屋などの先輩連中や、その頃ボツボツ集まりはじめた竹内良作、山本安英、田村秋子など、ほんとうに俳優志望の研究生たちにまじって、私も基本訓練をやりはじめた。研究

生ではなかったらしいが、夏川静江さんも早くから加わっていた。土方梅子夫人も美容のためとかで、いっしょにやっておられたのをおぼえている。

しかし、この基本訓練がいつ頃からはじまったか、『海賊』などの稽古にはいる前だったか、それと平行してだったかは、その辺のことははっきりした記憶がない。ともかくある日の夕方近く、みんな水着姿で庭に出て、私には生まれて始めての、その基本訓練というものが始まった。土方先生はなにかも演劇の方へ引寄せて来ねば気のすまぬ、子爵家から嫁にもらった恋女房まで衣装屋にしようような方だったから、お庭もちゃんと野外劇場の形にできていて、かなり広いゆるやかな芝生のスロープの正面に、大きな樹立にかこまれ、刈り込んだ灌木の茂みを袖にした小高い舞台があった。始めたばかりの頃は、その盛土をした舞台の部分が霜解けで練習につかえなかったような気がする。すると基本練習が始まったのはまだ二月中かだったかもしれない。

基本訓練としては、岩村和雄指揮のダルクローズの律動運動と、土方先生がドイツでならって来られた発声・造音練習や呼吸体操をやった。

律動運動の方は、例の三つの準備運動や、十のジェスチュアや、音譜のリズムにあわせて歩いたり跳んだりする練習を一通りやった程度である。岩村さんは外国のバレエ・マスター気取りでとても厳しく、手がのびなかったり、両膝がびったりくっつかなかったり、リズムをまちがえたりすると、男女の区別なく、細い鞭でピシリピシリ叩いた。私のような若い者でも、最初のうちは翌日まで足腰が痛くて閉口した。山本安英さんが黒い長い靴下をはいて、おさげの髪を二つ肩にぶらさげ、水着と靴下の間があくのを気にしながら、神妙な顔をして芝生の上をワン・エンド・トゥー、スリー・エンド・フォーと歩いて行くのが、今でも眼に

市川左団次による俳優養成に応募し、帝国劇場で小山内薫作『第一の世界』に抜擢された山本安江は、築地小劇場における最初の女優となった。生来の天分を熱意と努力で磨き、彼女は後年とりわけ木下順二作『夕鶴』の名演技によって、東山千栄子とともに国民的演劇人と称えられる。

土方邸での演劇訓練（山本安英著『新版 歩いてきた道』）

歌舞伎、新派に対する当時の日本近代劇運動は、確かに非常に微弱なものだったのです。既に一九〇六年坪内逍遙先生の文芸協会、一九〇九年小山内先生と市川左団次さんによる自由劇場とによって口火を切られた第一期近代劇運動は、その後劇団の数も増え、多くの戯曲を上演し、それなりの努力は立派に展開されていたのですが、何と言ってもその社会的な力は弱く、技術の程度もはっきりした基礎をまだ持てなかっただけに低いものであり、歌舞伎や新派の方々からは素人芝居という眼で見られている状態でした。そこにあの大地震が起ったのです……

一九二四年一月に運動開始の決意がなされてからいよいよ初出演の幕があくまでの五ヵ月間は、想像以上に多忙な準備活動が持たれました。まず小山内薫、土方与志、友田恭助、汐見洋、和田精、浅利鶴雄という

① 千田是也著『もうひとつの新劇史—千田是也自伝』六五—六六、七一頁。

六人の同人組織、俳優、舞台装置家、舞踊家等の糾合、俳優の基礎訓練、それと併行して敷地の選定、法律上の手続きの問題、建築プラン、舞台設備や観客席の研究、向う一年間の演出目録の用意などなど。

俳優は汐見さん、友田さんに、先の関係から私が呼ばれ、そのほかに丸山定夫、千田是也、竹内良作（のち良一）、藤崎和正（のち欣司）さんたち、それにたしか江原さんという女優さんがはいました。すが姿が見えなくなり、私はしばらく一人だけ男優さんたちのあいだにまじって、ダルクローズという舞踊の基本体操の練習などをしていました。そこへ田村秋子さんが加わってこられたので、ほっとしたのを覚えています……

今までの劇団に対しての全く新しい出発を、私たちはこの小さな劇場から始めて行くのだという希望と興奮とが、小石川林町の土方先生のお屋敷で準備と勉強とを進めて行く私たちの間にみなぎっていました。当時まだ伯爵だった土方先生のこのお屋敷は、どっしりした古風な洋館で、以前明治天皇の訪問を受けたことなどもよくあったお家と聞いていました。広い芝生のお庭や、小山内先生の蔵書も預かってぎっしり演劇書の詰まった地下室があり、別棟のお母さんが住んでいられる日本館の方からは長唄の三味線が聞えて来るようなこともありましたが、今はまるで戦場のような騒ぎです。劇場の創立事務所でもあり、稽古場でもあり、研究室でもあり、そして同時に食堂でもあり、時には宿泊所でさえもあるこのお宅の、あちらの部屋では日本最初の表現主義演出である『海賊』の稽古に、男優さんが弾丸のような速さでせりふを絶叫していると思ふと、こちらの部屋ではどんなような声で議論が沸騰しています。つい先日まではラジオ巻きの髪に結って中国服などまつて、学校に通う時など馬車に乗っていられたという土方梅子夫人が、衣装係の女の人達と一緒に柳原などの古着屋を歩きまわり、大きな風呂敷包みを背負ってかえって来られる姿も、私達を感動さ

せたものでした。

毎日毎日協議や勉強や稽古や、その他いろいろの用件に一人一人が追いまぐられ、いつしか夜になって一所に食事をとり、男の人たちが顔のはいりそうな大きな外国のジョッキで乾杯している最中に、のちに築地の小屋の正面に揚げられたあの大きなぶどうのマーク（土方久功氏作）が届けられて、一同歓声をあげた時の感激も忘れられません。またあちこちと土地を探した揚句、いよいよ築地に決定し、地鎮祭のあと一同を連れた小山内先生が、例の片時もはなさないパイプを手には、ステッキの先で示しつつ、ここが舞台だよ、あそこが楽屋だよと、地面の縄張りに従って説明して下さるのを聞きながら、思わず涙を落してしまった時の興奮も忘れることのできないことの一つです。①

山本に続いて築地小劇場に採用された十八歳の田村秋子は、西洋風の男優ばかりに当初は違和感を覚えた。水着姿のダンスにも、西洋式の会食・乾杯にも驚いたと回顧する。『海賊』での演技に感銘を受け、やがて友田恭助と結ばれるが、女優との結婚に当初友田家では反対であった。②

築地小劇場の研究生に（田村秋子・小山裕士共著『一人の女優の歩んだ道』）

① 山本安英著『新版 歩いてきた道』二二二―二五頁。

② 田村秋子・小山裕士共著『一人の女優の歩んだ道』二〇―二三頁。

関東大地震で麻布の南座と牛込の神楽坂の演技場のほかは、東京の劇場はすっかり焼け、帝劇も焼けちゃったでしょ。小山内先生は「今さらずぶの素人の研究生からではなく、相当出来た演技者が欲しい」と言っただけで、あたしなんぞ入るはずと前に、帝劇の中堅以下の若い女優さんたちが相当、築地小劇場へ入られることになっていたんです。そんなわけで最初女優さんはわりに募集しなかったらしいんですよ。ところが帝劇がまた再建することになったので、帝劇の若い女優さんたちがみんな元へ戻っちゃったもんで、誰もいなくなりました。山本安英さんが左団次の俳優学校にいらっしゃった時の、小山内先生と土方先生の関係で一人残っていらしたんです。で、どっかに女優はいないか、と探されたんです。別に新聞などに募集の広告などを出したわけじゃなく、コネで探されたらしんです。あたしの場合には、女でありさえすれば、誰でもいいからって、いうので誘われたらしんです。・・・

ちょうどそのころ（水谷）八重子さんが第二次芸術座を作られたんです。あたしは八重子さんとは前の通話会でお友だちになったものですから、八重子さんのところも女優さんがいないので、遊びながら出ないか、いま『人形の家』のけいこをしているから、一度見にいらっしゃい、って言われたので、その牛込通寺町の八重子さんのお宅に初めて行っただけです。そこで青山先生と友田に会ったんです。八重子さんと三人が瀬戸の火鉢に手をかざしながら、『人形の家』の本読みをしていたんですが、あたしその時の本読みを聞いてびっくりしたんですよ。その前に新劇だっただけで見ることは見てるんですけど、せりふの調子が今まで聞いたことのない調子だったので。今まであたしの知ってる新劇のどの芝居のなかのせりふよりもスピードが、テンポがあるんで。その時あたしは小寺融吉さんの『真間の手古奈』の村の娘の一人をやりました。そのあとショウの『軍人礼讃』、アンドレーフの『殴られるあいつ』にでました。その後大正十三年四月上旬に築地小劇

場へ研究生として入れていただいたんです・・・

あたしが築地小劇場の研究生になったんで、呼ばれて小石川の土方先生のお宅へいきを見に行ったら、男の人がみんな先生のおうちの広間で『海賊』をやってましたから。役者って妙なもので、どんな男でも新しい女が見物来ると、この人に見せようって気になるらしいんですね。男の人たち、これ見よがしにやるんですか、そのせりふのテンポの速さかげんきたら、まるで機関銃の弾丸をバンバンバン撃ってるようにやったんですよ。それを見てても一つもせりふはわからないんですけど、あたしもあんなに感動したことはないですわ。びっくりしちゃったんです。みんなの気負った意欲って言うのかな、とにかくその意気はたいへんなものでしたね。ああいう意気っていうのは、その後にもあんまり見ないんじゃないかと思うんですよ。ガーガーやりやいいっていうもんじゃないんですけど、『海賊』という芝居はたまたまそれに合ってるでしょう。最後にはみんな死んで行んですけど、

あたしは開場の一月半くらい前に築地小劇場へ入ったんで、その前に入られた方は、多少はずっとその基礎教育をおうけになったにちがいないんですが、あたしの頃になるともう公演にかんしての準備と稽古のほう为主になっちゃったんですね。発声法とかグルクローズなどは教わりましたけれど、ほかの部門のものは別に致しませんでしたわ。先生方にしてみれば、基礎教育をやりかかったでしょうし、あたしたちも基礎的なものもしっかり身につけたいと思ったのですけれど、結局みんな次から次への公演に追われたと思う

んですよ。

①

小劇場開設を準備する土方邸では演技の稽古や舞台の準備が進められるとともに、演劇全般についての研究会も開かれていた。笈川道子の自伝によれば、おそらく同人和田清と父親との繋がりによって、十四歳の少女もこれに参加したのである。房総海岸で罹災した笈川一家は、やがて東京に帰ったものの、震災後の世相で貧窮と困苦は募るばかりであった。敬虔な心でこれに耐える家族に希望の光が射したは、長女道子が築地へ参加し始めたときである。

土方邸における研究生少女（及川道子著『いばらの道』）

傷ましい記憶を深く刻まれた北条の町を引き上げて、私たちの一家は東京へ戻ってまいりました。けれども、打ちひしがれたような、みじめな姿で再び帰って来た私たちの上に、東京の生活は一層試練の鞭を振りかざしていたのです。・・・一家の生活はいよいよ苦しくなるばかりで、父や母の心痛は夜も昼も絶えないほどでした。ことに妹の雪子が生れました震災の翌年から、私が小学校を卒業する頃までは、この青山時代でも一番困った時でした・・・

「どんなに貧しくたって、正しい心を以って皆んなが仲よく暮せるならば、それが世界の中で一番幸福な

家だ。正しくて、しかも貧乏だということは、決してはずかしいことではない。もしその貧しさが恥ずかしいなどと思うことがあるなら、その人間は卑屈なのだ。」夕食の後の団樂の席で、そう云って聞かせる時の父の声は、厳かな響きをもって、私たちの胸をどんなに強く打ち励ましたでしょう。

「それでは世界で一番幸福な家に相応しいように、仲よく皆さんで、楽しい歌を歌いましょう。」母の声の終わらぬうちに、私たちは清く朗かな声で歌い出しています。「きれいな 白いあの子羊は よき飼主に 日々愛せらる」

このような忍苦に満ちた生活と、つましやかな清い幸福のなかに、地震の年が明けると、私たちには思いがけない大きな幸福が見舞ってきました。それは震災の年の十二月に帰朝された土方与志先生が、翌年の一月から御自分のお屋敷の地下室で、劇の研究会を開かれたので、私も和田清先生につれられて、その会に参れるようになったことです。千田是也さんや吉田謙吉さんも、やっぱりその会で岩村和雄先生について、熱心にお稽古をしてもらっておられました。

前にも書きましたが、私の父は芸術に対して深い理解を持っていましたし、・・・母もまた芸道に深い愛着と理解を持っておられましたので、そのような両親の手に育てられた私は、小さい時分から自然と芸術に対する愛と親しみを持っておりました。そして小学校時代にも、学芸会などではいつも童話劇を主演したり、また独唱などをいたしました。

それですから土方先生の研究会に入れて戴けた時の嬉しさは、言葉にも言い表せないほどでしたし、またこの研究会に通うようになってから、先生の導きによって、私の生涯をその道の精進に捧げるようになった、大きな動機を作ったわけです。

こうして私は自分の前に大きな希望の道が開かれたような、輝かしい思いを抱きながら、まだ傷の癒りきらない胸に繃帯をし、その上を真綿の入ったセルのワン・ピースで包んで、毎日熱心に通っていましたが、そのうちとうとう私が晴れの舞台に立てる日がきました。

その当時は小劇場運動、言いかえればアマチュア劇団の一番盛んな頃で、大学生や勤人などの間にたくさんそういった劇団が結成されたように聞いていました。そのうちの一つに〈青騎手〉という小劇団がありまして、これも和田さんの御紹介で知ったのですが、稽古場にお店の土間を貸して上げたり、父の知っているお寺を借りてあげたりしたので、度々お稽古を見せてもらったし、また保険協会のホールなどでの公演に度々出かけて熱心に見たものでした。

その翌年でしたか、築地小劇場が創立されて、ここにこれらの小劇場運動も集中されたかのように、段々消えてなくなったように考えます。①

低俗化として小山内薫から批判される浅草の興行界からも、築地小劇場の旗揚げに数名が参加した。帝国劇場における新劇の不振のあと、浅草寺界隈の日本館あるいは金竜館における『カルメン』、『椿姫』、『天国と地獄』、が人気を博する。その後震災で全滅した盛り場を離れ、青島歌劇団や根岸大歌劇団に所属した丸山定夫、小杉義男、水品春樹らはひととき地方を巡業した。

浅草オペラから築地小劇場への参加（松本克平著『日本新劇史―新劇貧乏物語』）

多くの落伍者が（浅草）オペラの凋落とともに剣劇やレビューに再転向して行ったのと反対に、オペラから築地小劇場に参加していることは興味深い。・・・男優では丸山定夫、小杉義男、田村稔、舞台監督の水品春樹、女優では若宮美子、月野道代の六人がそうである。

まず丸山定夫である。筑地、新筑地、エノケン一座、PCF、東宝映画を通じて名優と謳われ、広島で原爆の犠牲となった丸山の前身は、広島の大津賀八郎の青鳥歌劇団時代の弟子であった。そして浅草オペラから築地小劇場に参加した。エノケン（榎本健一）はこの浅草時代の親友である。彼は四国松山の医者者の三男に生まれた。父に逆らって家出し、福岡の大きな家具店の下足番になった。やがて画家を志し京都へ行って車夫になって苦学した。ある日新京極の夷谷座で伊庭孝作、高田雅夫主演の楽劇を見るに及んで心機一転改めて俳優を志したのであった。

丸山は東京へは赴かず、郷里松山の対岸にあたる広島の新天地に転じて、臨時に映画館を改造して青鳥歌劇団を主催していた大津賀八郎の門を叩いたのであった。採用された丸山はここで朝からピアノをたたき、声楽のレッスンをやり、庭の掃除、炊事の手伝い、楽屋入りをしてからは舞台のこと、みんなの雑用、風呂の釜たき、大津賀の身のまわりまでマメマメしく働いた。オーケストラ十数名のほか俳優その他三十余名で、丸山はみんなに可愛がられた。・・・

ところで若宮美子もこの青鳥歌劇団にいたのである。彼女は千葉県生まれ、千葉の女学校を出て、浅草の朝日少女歌劇団に加わり日本館に出ていたが、大津賀の広島行きの一行に加わったのであった。そして広島へ行ってから水品春樹と暫く深い関係を持つようになる。

ここで一年ばかり仕事をしたが、大津賀は酒飲みで統率力に欠けていたため、だんだん去って行く人が出て来た。水品、丸山、若宮も東京へ戻って本格的に勉強する必要を感じて、九州巡業にでる一座と別れて上京した。そして水品は広島へ行くまで働いていた日本館の文芸部や金竜館の知人と再び交わり、浅草の周辺を彷徨する。間もなく大正十二年九月一日の関東大震災にあつて浅草の興行界は全滅する。オペラの連中はほとんど大阪へ移住してしまう。大津賀も当時大阪に出ていた。そして浅草から避難したオペラ仲間で、大津賀八郎、柳田貞一を中心にして歌劇団を編成、東北、北海道へ巡業に出発する。丸山も水品もその一行に加わる。・・・

こうした長いさすらいのあと、浅草へ舞い戻った初夏のある日のことであつた。震災前のペラゴロの集合地になっていた浅草ひょうたん池のそばのコーヒー店ブラジルで、丸山と水品は葡萄のマークのついた白い封筒から取り出した、青色の紙に印刷されてある築地小劇場の「御挨拶」をじっとみつめていた。

御 挨 拶

私共同人は此度築地小劇場の建設に着手しました。六月中旬、同劇場竣工と同時に、毎月五日間ずつ築地小劇場演出として責任ある公演を致します。

私共は演劇の多角的な要素とその使命を感じ、芸術の創造と鑑賞の自由のために、出来る限りの設備の完全を期して設計致しました此の小劇場に於て、商業主義の仲介者を排して、私共一同真摯なる研究と努力の結果を発表したいと思います。

猶俳優の養成及一般戯曲、演出の研究機関を同劇場内に並置致します。

何卒吾々一同の微力に対して、親しき御批判と御鞭撻を仰ぎたいと思います。

大正十三年五月一日

築地小劇場同人

丸山はすでに土方与志に手紙を出し、単身小石川林町の土方邸を訪ねて採用され、六月十三日開場の『海戦』その他の稽古に参加していたのであった。こうして丸山の幹旋で、オペラでは丸山よりはるかに先輩であった水品は、おくれて七月十八日に小山内薫に面接し、七月十九日の第六回公演の初日から舞台監督の手伝いをするようになった。^①

① 松本克平著『日本新劇史―新劇貧乏物語』筑摩書房、一九六六年。四五〇―四五四頁。